

わが批判者の批判

村岡史郎 訳

ブラス  
B. MEXAH  
GOWHER  
版入叢

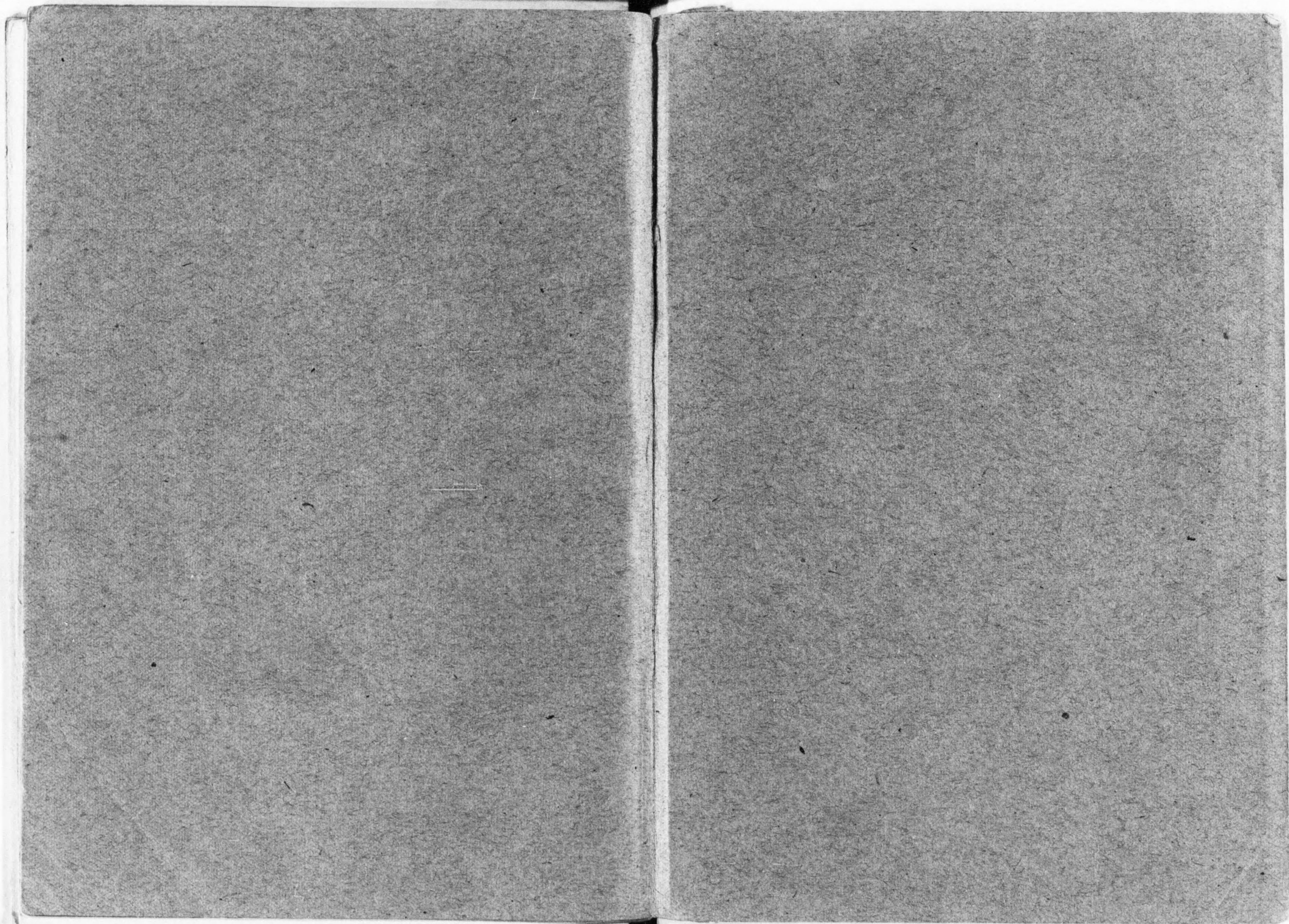
363  
d  
122

禁複写



始





П.В. ПЛЕХАНОВ

おおぞか批判香の批判

カフカ  
外村史郎訳

1929年 叢文閣出版

СОЧИНЕНИЯ

363  
122



503

### はしがき

本集にはブレハーノフ全集第十一卷「批判者の批判」の本質的部分をなす所の、エ・ベルンシュタインに對する駁論、カー・シュミットに對する駁論、及びベ・スツルーウエに對する駁論の三篇を収めた。

ベルンシュタインに對する駁論の中の『ベルンシュタインと唯物論』は、一八九七年から『ノイエツアイト』に掲載されたエツアルド・ベルンシュタインの『社會主義の諸問題』に附隨して起つた『ノイエツアイト』誌上の討論のための最初の論文である、それは一八九八年七月『ノイエツアイト』の第四四號に掲載された。第二論文はコンラッド・シュミットに對するもので、これは同じくその年の十月に『ノイエツアイト』に掲載された。

一八九八年十月三日―八日のスツットガルトにおけるドイツ社會民主黨大會において、カウツキイは、『ノイエツアイト』によるベルンシュタインの諸論文の掲載問題に關して、就中、『ベルンシュタインは我々をして考慮せしめた、それに對して我々は彼に感謝しなければならぬ』と述べた。カウツキイの演説における正にこれらの言葉がブレハーノフに彼に對する公開狀を書かしめる動機を與へたのである。この公開狀は一八九八年『ザクセン労働者新聞』の第二五三―二五五號に掲げられた。

『ベルンシュタイン氏の遺言書』は一九〇一年に書かれ、『ザリヤー』第二三號に發表された。『科學的社會主義の發展』の翻譯への序文は一八〇二年に書かれたもので、ベルンシュタインの『科學的社會主義は可能であるか？』に對する回答である。

カー・シュミットに對する駁論は一八九八—一八九九年の『ノイエ・ツァイト』に掲載された。ロシア修正派の理論的代表ベ・スツルウエに對する駁論は、一九〇一—一九〇二年の間において、『ザリヤー』第一號、第二—三號、第四號に連載された。ベルンシュタイン及びシュミットに對する論争においてはブレハーノフは主としてマルクス主義の哲學の領域における修正主義の批判に従事してゐる、しかしロシア修正派の批判においては専ら革命的マルクス主義の實踐の問題を問題としてゐるのを見る。

一九二九年五月

外村史郎

### 目次

はしがき ..... 一

反ベルンシュタイン論 ..... 一

    ベルンシュタインと唯物論 ..... 二

    何の爲めに我々は彼に感謝するか ..... 二九

    カントに背く Kant 又はベルンシュタイン氏の遺言書 ..... 五一

    エフ・エンゲルスの『科學的社會主義の發展』の翻譯への序文 ..... 一〇五

反シュミット論 ..... 一四九

    カール・マルクス及びフリードリヒ・エンゲルスに反對する ..... 一五〇

    コンラッド・シュミット ..... 一五〇

目次 ..... 一

唯物論かカント主義か……………一八五

唯物論再論……………三三一

反スツルローエ論……………三三三

社會發展に關するマルクス説の批判者の役割に於ける

ベ・スツルローエ氏……………三三六

第一論 文(その「哲學」に對して)……………三四

第二論 文(その「矛盾の鈍り」の正體)……………三〇六

第三論 文(その「實踐」に對して)……………四二四

# 反ベルンシユタイン論

## ベルンシュタインと唯物論

〔*Neue Zeit*〕の第二四號でベルンシュタイン氏は彼の『社會主義の諸問題』の連續講義の第二部を續けてゐる。彼はそこで、『どれほど、現代の社會主義は現實的であるか、また、どれほどそれはイデオロギーとして現はれてゐるか』を研究してゐる。この研究に際して著者によつて採られてゐる方法は私には、提起された問題の解決にはまづたく無力であるやうに思はれる。それゆゑ私はこの方法を以下の論文において批判に附することとする。この際に興味あるのは『或る程度まで』カントに復歸せよといふベルンシュタイン氏の呼びかけである。『認識論の領域においては門外漢である、——とベルンシュタインは言つてゐる、——私は、與へられた問題に關して何等か門外漢の思想以上のものを持込まうとするものでない。それどころか、私は自己の直接的のカント執着を〔Vorwissen〕への科學附録に於けるコンラッド・シュミットの一論文に負うてゐるのである。』

コンラッド・シュミット氏の哲學的散文の幾行かから刺戟を受けた後、ベルンシュタイン氏は他の門外漢に向つてかう語つてゐる、『純粹若しくは絶對的唯物論は純粹若しくは絶對的觀念論とまづたく同様に唯心的である。共に簡單に、異なる見地からではあるが、思惟と存在とが同一であることを豫想してゐる。要するに、彼等は表現方法を異にするのみである。反對に、新しい唯物論者たちは現代

の最も偉大なる博物學者の多數がなしたと同様に原則的に斷然カントの見地に立つてゐる。』

これらの結論は極めて興味的である。しかし『純粹若しくは絶對的唯物論』とは何であるか？ ベルンシュタイン氏はこの間に答へてゐない。さうすることの代りに、彼は註の中に、全然『カントの意味で』言つてゐる一人の『最も新しい』唯物論者の定義を引用してゐる、曰く『我々は唯だ原子アトムを信ずるのみである。』

ベルンシュタイン氏の謂ゆる『純粹若しくは絶對的』唯物論者たちが如何にしても、上に引用された定義の中に特徴づけられた思惟及び表現の方法を許容し得ないであらう事は明かである。どれだけベルンシュタインのこの解釋は哲學の歴史によつて確證されるか、——問題はそこにある。

どこへ我々はホルバツハを歸屬させたいか？ 『純粹』かそれともまた『不純粹』唯物論者へか？ 明かに、前者へである。しかしホルバツハは物質についてどう考へてゐたか？

次の箇所は我々にそれを説明する。

『我々は如何なる對象の本質も——若しも本質なる語をその本來的な本性を成す所のものと解するのであれば——知らないのである、我々は物質をそれが我々に與へる感覺と觀念とを基礎として知るに過ぎない。次いで我々はそれについて、我々の器官の構造に相應して、善惡を判定するのである。』

註一 《Système de la Nature》, II, p. 1.

更にまた、  
『我々にとつて物質とは、何等かの方法で我々の外的感情を覺醒するところのものである。——そして我々が種々の物質に歸してゐる諸特性は、彼等が我々の内部に惹き起す種々の印象若しくは變化に基づくのである。』

註1 Ibid, I, p. 28.

尙ほ一つ短いしかも特徴的な箇所を擧げるなら、『我々は物質の本質も、眞實の本性も知らぬのである、尤も我々は若干のその特性及び性質を、それが我々に影響を及ぼす程度に従つて決定することは出来るのであるが。』

註1 Ibid, II, p. 116. 一七八一年出版。

こんどは他の唯物論者、エルヴェシユースに訊かう。物質は感情する能力を具へてゐるか？ エルヴェシユースはこの問題に對して、——それは非常に多くの十八世紀のフランス哲學者の心を捉へてをりまたそれに我々は尙ほ後にもう一度立ち戻る筈であるが、——次のやうに答へてゐる、『これに

ついでには非常に長い間論争された。唯だ非常に後になつて、何について本來論争は行はれてゐるのかと自問するやうになり、その結果物質なる語により精確な概念を結付けるやうになつたのである。若しこの論争において最初から物質なる語の意義が精確に規定されてゐたならば、人々が、言はひ、物質の創造者であることを知りえたであらう。』私には『我々は唯だアトムを信ずるのみである』といふ表現よりもこの方が何程か明瞭であるやうに思はれる。

註1 《De l'Esprit》, Discours I, chap. IV.

私はホルバツハ及びエルヴェシユースの哲學思想を私の著述《Beiträge Zur Geschichte des Materialismus》(唯物論史論文集)に於て述べた。それゆゑ私はこゝではより詳密なるその觀察には従事せぬであらう。唯だ、エルヴェシユースには我々の外なる物體の存在は單に蓋然的にしか考へられてゐない、といふことだけを注意して置かう。彼は『哲學的幻想』を嘲笑してゐる。彼の意見によれば、我々は「觀察と共に歩み、それが我々を棄てるその瞬間に停まり、そして知ることがまだ出来ないところのものを知らない勇氣をもたねばならぬ。』

註1 《Beiträge Zur Geschichte des Materialismus》七十七頁及び以下参照。



《De la Nature》(自然について)なる書物の著者、ロビネーはかう言つてゐる、「我々は、我々の本性よりして、對象の本質を、成すところのものを認識しえない、それを認識する如何なる手段も我々は有しない。本質 (des essence) の認識は——我々の勢力の範圍外にある。」

註1 《De la Nature》, Amsterdam, MDCCLXIII, tome premier, p. 265.

この著述の他の場所に於て彼は言つてゐる、「心が自分自身の本質について知るところは他の本質について知る以上ではない。心が自からの中に透徹しえないのはそれに結付けられた身體の質量へ透徹しえないのと同様である、その成長力を心は感じないしまた見ないのである。」果してこれはまづたくカントの意味で語られてゐないだらうか?

註1 《De la Nature》, p. 259.

今度はラメットリーに、この唯物論哲學の《enfant perdu》(失踪兒)に、自己の大膽さをもつて最も大膽な人々をさへ驚かしたところの人に、訊いて見よう。彼は言つてゐる、

「人間及び動物の心の本質は我々には知られてゐない、また常に知られざるものとして残るであら

う、物質及び物體の本質もまた同様である。しかし我々は物質の本質について何等の表象をも有しないとは言へ、それでも、我々は矢張り我々の外的感情によつて物質の中に發見される諸特性を承認せざるを得ない。」

註1 《Oeuvres philosophiques de Monsieur de la Mettrie》. Amsterdam MDCCLXIV; tome premier; Traité de l'âme, p.p. 83 et 87.

自己の《Abrégé des Systèmes》(體系の短縮)に於てラメットリーは、スピノーザ哲學を批判しつゝ書いてゐる。

『我々の心は外物を認識しない。それはこれらの對象の、全く相對的なる、また抽象的なる若干の個別的な特性を知るのみである。そして、最後に、我々の感情若しくは觀念の多數が我々の諸器官に依存してゐる程度は、最後のものが變化を蒙れば、彼等もまた直ちに變化するほどである。』

こゝで最も「絶對的なる」唯物論者の一人は、我々の見るやうに、やはり「全くカントの意味で」語つてゐる。そしてかゝる聲明と並べるとき、何かまつたく「新しいもの」のやうに、ヘルンシュタイン氏が引用してゐる、「我々は唯だアトムを信ずるのみである」といふ命題は、甚だしく滑稽なものになつて来る。

それともベルンシュタイン氏は、フリードリッヒ・エンゲルスが、我々は唯だ原子を信ずるのみであるを知らなかつたと思つてゐるのであるか？ エンゲルスは非常によくそれを知つてゐたと思はねばならない。しかしこのことは彼にカント哲學と鬭争することを、また『ルードウィッヒ・フォイエルバッハ』の中に次の行句を書くことを妨げなかつた。「そして若しもドイツの新カント派がカントの見解を復活させようとし、イギリスの不可知論者が——ヒュームの見解（それはイギリスに於て決して滅びなかつたところの）を復活させようとしてゐるなら、——理論も實踐もすでに久しい以前にそのいづれをも顛覆したに拘らず、——それは學問上からは一つの退歩であり、實際上からは、公衆の眼の前で迫害されてゐるところのその唯物論を裏口から引入れる破廉恥である。」

それともベルンシュタイン氏はこれに對して、エンゲルス自身——この場合どこに問題があるかを明瞭に理解しなかつたと抗辯するのであるか？

ベルンシュタイン氏は多年フリードリッヒ・エンゲルスと親交があつた、しかも彼の哲學を理解しなかつた。偉大なる思想家の豊富な寶庫から兩手で掬ひ出すことの出來た彼、その彼がコンラッド・シュミット氏の似而非哲學的小論文を通讀しなければならなかつたとは、それも哲學上の諸問題に興味を感じて、自分にかう訊ねるためである、しかし何處に、本來、わが師の哲學はあるのであるか？ がそれよりもつと悪いことは、すべてこの哲學を放棄する爲めに彼がカー・シュミット氏の一對の悖理に通ずるだけで充分であつたことである。これは信すべからざることである、しかしその通りなの

である。これはマルクス・エンゲルス學派にとつて甚だ遺憾なことである！ そして、何よりも、ベルンシュタイン氏にとつて甚だ遺憾である！

しかし、それはどうあらうとも、彼が我々に向つて「カントへ還れ」と呼んでゐる時、我々はこの「批判者」の忠告に従ふ何等の慾望をも有しない。それどころか我々は彼に呼びかけよう。戻れ……哲學の研究へ、と。

「カントへ復歸すること」を我々に忠告する際、ベルンシュタイン氏は『*Neue Zeit*』に掲載されたシユテルン氏の論文『*經濟的及び自然科學的唯物論*』に依據しようと企ててゐる。シユテルン氏は哲學の領域に於てベルンシュタイン氏よりも比較にならないほど博識である。従つて彼の論文は我が讀者の充分なる注意に値する。

ベルンシュタイン氏が「或る程度まで」カントに復歸してゐるのに對して、シユテルン氏はスピノザ老人について語り、この上品なそして天才的なユダヤの思想家の哲學に復歸することを我々に提唱してゐる。これは——何か別のものであり、ベルンシュタイン氏の呼びかけよりも遙かに條理あるものである。事實において、一方、マルクス・エンゲルスの哲學思想と、他方——スピノザのそれとの間に何等か共通なるものがあるか、どうかを研究することは重要なことでありまた興味あることである。

この問題に正しく解答しうる爲めに、我々は先づ、シユテルン氏が哲學的教義の眞の本質を如何に

理解してゐるかを明かにしなくてはならない。彼は言つてゐる、

『古代ギリシヤに於てはデモクリトス及び彼の學派によつて、前世紀に於ては——エンサイクロペヂスト達によつて、新時代に於ては——カール・フォグト、ルードウイヒ・ビュヒネル等々によつて代表される自然科学的唯物論と、マルクス及びエンゲルスの經濟的唯物論とは、その名の共通であるに拘らず、思想の異なる領域に關係するところの二つの異なる學說である。第一のものは自然、部分的には物心の關係の説明を含み、第二のものは歴史、その行程及びその事件の説明を提供し、かくて社會學的學說として現はれる。』

これは必ずしもさうではない。

第一に、『エンサイクロペヂスト達』の哲學は物心の關係の研究のみに局限されなかつた、それどころか、この哲學は同時に唯物的解釋の助をかりて歴史を説明しようとして企てた。<sup>1)</sup>第二に、マルクス及びエンゲルスが唯物論者であつたのは常に歴史研究の領域に於てのみではない。彼等は精神と物質との關係の解釋の領域に於ても亦かゝるものであつた。第三に、『エンサイクロペヂスト達』の唯物論とフォグト及びビュヒネルの唯物論とを一とからげにすることは全く誤りである。これも、言はゞ、『二つの全く異なる學說』なのである。

註1 私はそのをエルヴエシユニスに關する私の論文に於て指示した。

『自然哲學的唯物論の根本思想は、——とシュテルン氏は續ける、——物質は何等か絶對的なるもの、永遠に存在するところのものであり、凡て精神的なるもの（心理的なるもの、感情、感覺、意志、思考）は、——物質の所産である、といふことの中に含まれる。物質は一般に、これまた恒久的である運動に等しいと見られる、無限の勢力 (Stoff und Kraft) を有してゐる。複雑な動物の有機體に於ける諸勢力の交互作用によつて、彼等の中に有機體の廢滅と共に再び消滅するところの精神が發生する。凡て發生的なるもの、——同様にまた人間の慾望及び行爲、——は原因性の法則によつて支配され、物質的原因への依存の中に在る。』

かゝるものとしてシュテルン氏には唯物論的教義が考へられてゐる。彼は正しいか？ また彼によつて與へられた特徴づけを、例へば、エンサイクロペヂスト達の唯物論に適用することが出来るか？ この問題に對する解答には豫め、與へられた場合に於ては『エンサイクロペヂスト達』なる表徵が一方に於て、まつたく精確でなく、迷妄に導いてゐるといふ注意をなし置くことが必要である。必ずしも凡てのエンサイクロペヂスト達が唯物論者であつたのではない。他方において、十八世紀のフランスには『エンサイクロペヂア』に一行も書かなかつたところの唯物論者があつたのである。これが證明としては同じラメットリを挙げれば充分である。

これは序いであるが、こゝで本質的なことは『エンサイクロペヂスト達』の中の唯物論者も、ラ

ラメットリも決して、物質のすべての力を運動に歸することが出来るといふことを認めてゐなかつたことである。シュテルン氏は、明かに、唯物論の歴史に對する自己の無識に拘らず、満足をもつてそれについて語ることを斷念し得ない人々の言葉によつて迷妄に引入られたのである。このことは直ちに最も反駁しえない方法をもつて證明することが出来る。

今度は最初にラメットリーの言葉をお眼にかけよう。

讀者は既に、物質に對するラメットリーの見解が、天と地との如くに、或るどんなかの「獨斷論」から遠いのを知つてゐる。しかし矢張り我々は暫く彼の哲學に停まらなくてはならない。

ラメットリーは徹底的に思索し自己の頭腦を當時の凡ゆる生物學的知識をもつて豊富にした、生粹のカルテジヤ學徒であつた。デカルトは、動物は機械以上でない、彼等には全く心理生活と名づけられるところのものが缺けてゐると斷言した。ラメットリーはデカルトの言葉を捉へてゐる。彼は言つてゐる、若しもデカルトが正しいならば、人間もまた機械以上ではない、何となれば人間と動物との間には何等の本質的な相違もないからである。こゝから——彼の有名な著述の題名 (L'Homme machine) (人間——機械) が來てゐる。しかしながら、人間は如何なる場合にも心理生活を奪はれてゐないが故に、ラメットリーはさらに進んで、動物もまた心理生活を惠まれてゐると結論してゐる。こゝからして他の著述の題名 (Les animaux plus que machines) (動物——機械以上) が來る。尤もラメットリーは、密かにデカルト自身も同じ見解を持つてゐたと考へてゐた。「何となれば一般的に、

また全體的に、たとひ彼は人間と動物との間には本質的な差異があることを斷言してはゐるもの、しかしそれは彼にあつては單なる遁辭であり、形式上の演習であることが明かである」からである。云云。従つてラメットリーは人間を機械と定義してゐるとは言へ、しかしこれをもつて彼は決して「物質のあらゆる力を運動に歸することが出来る」と言はうとしてゐるのではない。それどころか彼はこれによつて何か全く別のことを表現しようとしてゐたのである。彼は思惟をもつて物質の一特性と考へてゐた。「私は認める、——と彼は言つてゐる、——思惟は組織化された物質から殆ど全く區別せられない、それはこの最後のもの、電氣、運動力、不可浸透性、膨脹性等々と同様の特性である、と私には思はれる。」

註1 《Oeuvres philosophiques de Monsieur de la Mettrie》. T. 10, p. 72.  
註2 Ibid, p. 73.

シュテルン氏は、疑ひもなく、これに基づいて、ラメットリーにとつて思惟は單に組織化された物質の特性であるに過ぎない、また正にこのことの中に一切の唯物論のアキレスの踵があると抗辯するであらう。「全く説明され得ない、——と彼は引用された論文の中で言つてゐる、——如何にして動物の細胸中に感覺(心理生活の基本的要素)が突如としてピストルの彈丸のやうに、現はれるのであるか、

非組織物體にもまた、勿論最小限度のまた單純なものに過ぎぬにしても、我々が生物の段階を昇るに従つて成長し複雑化するところの心理が固有であると結論しなければならぬ。これはその通りである。しかしラメットリーは何等それと反對のことを斷言したのではなかつた。この場合彼は、決定的な解答をそれに與へずして、單に問題を提起してゐるのである。『次のことに同意しなければならぬ、——と彼は言つてゐる、——我々は、物質が感覺の直接的な能力を具へてゐるものであるか、それとも單に組織體のみ固有であるところのそれらの變化の影響の下にそれを獲得する能力だけを持つてゐるものであるか、知らないのである。』

註1 《Traité de l'âme. etc.》, chap. VI. この著述に於てはラメットリーはまだ、その後彼が放棄したところの舊い用語を固執してゐる。

自己の (L'Homme plante) (人間——植物) の中には彼は自己の思想を多少異つた、一層それを決定的なものにしてゐる、形式で表現してゐる。『すべての生物の中で、——と彼は言つてゐる、——人間は、必然的にさうならざるを得なかつたのであるが、何物にも優して心を具へてゐるところのものである。そして植物は彼等の中にあつて最もすくない程度に心を具へてゐるものとして現はれる。』この思想の中には完全に「物質の靈活性」の全理論が含まれてゐる。しかしラメットリーはこの理論

を放棄してゐる、何となれば植物及び礦物の「心」は何か全く萌芽的なるものであるからである。

『如何なる欲求も、——と彼は叫んでゐる、——如何なる慾望も、如何なる情熱も、如何なる惡も善も持たないところの、また肉體の要求についての配慮によつて煩はされることのない心はよし！』

シュテルン氏はスピノーザの「倫理學」の第二部の第十三公理の證明を引用してゐるが、そこにはすべての個體 (individua) は異なる程度において靈活的である (quavis diversis gradibus) と語られてゐる。

讀者は今や、ラメットリーにとつては靈活性の程度が決定的意義を有するのを見る。彼にとつて靈活的ならざる存在であつたのは、その感覺能力が或る一定の最小限度を越えなかつたところのものである。従つて若しも彼が「思想」は組織化の成果であると宣言してゐるとすれば、これによつて彼は組織的「個體」に於てのみ「靈活性」——の比較的に高度の形態が出遇はれうと言はうとしてゐるのである。

それ故にこそ私はスピノーザ主義とラメットリーの唯物論の間に全く何等の本質的な差異をも見ないのである。

『エンサイクロペヂスト達』のところでは問題は如何になつてゐるか？

我々が生きて人間に於て見るところの、そしてそれを凡ての残りのものから區別しなければならぬところの第一の能力は、——とホルバツハは言つてゐる——それは「感性」(即ち感覺——ゲー。

ペー)である。

『如何に我々にこの能力が一見不可解に見えようとも、我々は矢張り少しく立入つて研究する時、それが組織體の本質及び特性の成果であり、それはまた恰度、重力、磁氣、彈性等々が或種の物體の本質若しくは特性の成果であるのと同様であるのを見るのである……或種の哲學者は、感覺は物質の一般的特性であるといふ見解を奉じてゐる、與へられた場合に於て、その發現によつて我々に知られるところのこの特性がどこから彼に現はれるかを研究することは無益であらう。若しもかゝる假説を許しうるならば——自然に於て二種類の運動——一は、活力の名の下に知られてゐるもの、他は、惰力と名づけられるところのもの——が區別されるのと同様に、二種類の知覺を區別することが出来るであらう、——即ち能動的な、若しくは生きた知覺と、被動的な若しくは惰性的なそれとである。最後の場合に於ては實體の靈活性は能動的または知覺的たることを彼に妨げる障礙の缺除に於てのみ成立つであらう。約言すれば、知覺は運動として傳へられることが出来、または組織化のお蔭で獲得されることが出来るところのさういふ特性であるか、さうでなければ知覺はあらゆる物質に固有なる特性かである。そのいづれの場合に於てもその擔ひ手は人々が想像してゐるやうな人間の心の如き無形の實體ではありえない。』

註1 ホルバツハの用語は我々の時代に於ては最早使用せられない。

註2 《Systeme de la Nature》, T. I, p.p. 88-89 及び 90-91.

シュテルン氏自身今や、ホルバツハの唯物論哲學は彼によつて「エンサイクロペヂスト達」に歸せられてゐる教義と何等共通のものを持たないのを見る。

ホルバツハは、物質のすべての力を運動に歸することが出来ないのを非常によく知つてゐた。彼は「物質の靈活性」の假説に對して何等の抗議もしてゐない、しかし彼はこの假説の上に停まつてはゐない、何となれば彼の注意を他の課題が惹き付けてゐるからである。彼は、何よりも先づ、心理生活の諸現象の説明をする爲めに我々は無形の實體の存在を前提しなければならぬ必然的の必要は少しもないといふことを證明しようとしてゐるのである……先きへ進まう。ホルバツハは『自然の體系』の唯一の創造者ではなかつた。デイデローはこの著述に於ける秀れたる共働者であつた。デイデローは唯物論者であつた。その者が何であつたらうとも、より大なる權利をもつて「エンサイクロペヂスト」と呼ばれうるこの人間の唯物論は如何なるものであつたか？

デイデローはスピノーザに對する自己の態度を「エンサイクロペヂア」の第十五卷に掲載された《Spinoste》(スピノーザ主義者)なる小論文に於て明かにした。

『舊新スピノーザ主義者を、——と彼はこゝで言つてゐる、——混同してはならない。最後の者達は物質は感覺することが可能的であるといふ基本的な原理から出發する。彼等はこの思想を無生命體で

ある卵が單に上昇的な温度の影響の下に漸次的に感覺を附與されたる生物に轉化することを指摘することによつて確證してゐる、彼等はまた同様に、その初めは單なる一點として現はれ、そして唯だ彼の爲めに食餌として役立つ植物質及びその他のすべての實體の同化作用のお蔭で、大なる、感情を有する生命體となる各々の動物の成長を引證してゐる。こゝからして彼等は、唯だ物質だけが存在するといふ事、そしてその存在は一切の現象の充分なる説明として役立つといふことを結論するのである。爾餘の點に於ては彼等は舊スピノーザ主義の一切の結論に固く依據してゐる。」

これだけではまだ、何處に、デイデローの意見によれば、新スピノーザ主義の舊きものに比較しての優越があるか、必ずしも明瞭でない、しかしデイデローがスピノーザ主義を正しい教義と認め、それから流出する結論を怖れなかつた事は全く疑ひなきことである。一般的にまた全體的に、カール・ロゼンクランツは、彼が自己の有名な著書『デイデローの著述とその生涯』(第一卷一四九頁)の中に次の如く書いた時、正當であつたといふことが出来る、「暗黙の中にスピノーザ主義は、——特にブラギューから始めて、感覺論を経て唯物論に移つたすべてのフランス人の承認するところであつた。……」

註1 それと同時に、デイデローが單にスピノーザの汎神論と呼ばれるところのもののみを否定してゐたことは、最もあり得べきことであり、全然確實でさへもある。

が如何に十九世紀の唯物論者たちはこの問題に對してゐるか？

ルードウィツヒ・フォイエルバッハは十八世紀のフランス唯物論者を可成りに輕視してゐた。「何物も、——と彼は言つてゐる、——ドイツの唯物論の發生を (Système de la Nature) 『自然の體系』から若しくはラメットリーのキノコ入りの饅頭からさへも導かうとする以上に虚偽なるものはない。」<sup>1)</sup>にもかゝらず、彼自身は兩足でもつてフランス唯物論の地盤の上に立つてゐたのである。

註1 著作集、第十一卷、一二三頁。

即ち、譬へば、彼は自己の著述、『唯心論と唯物論について』の中で言つてゐる、「抽象的な思想家にとつては……思想、それは——超腦髓的な働きである、しかし醫者にとつては、——それは——腦髓の活動である。」正にこれはラメットリーが自己の『人間機械』において證明せんと欲したところである。「醫學、一般病理學は、唯物論の故郷及び源泉である。」——とそのすこし先きのところでフォイエルバッハは言つてゐる。<sup>2)</sup>そして再び同じことをラメットリーもまた言つてゐる。<sup>3)</sup>彼自身の病氣が物心の關係についてこの彼の考察の出發點となつた事實は普く人の知るところである。

註1 著作集、第十卷、一二八頁。

反ベルンシュタイン論

註<sup>2</sup> 唯心論者たちはこのことを非常によく知つてゐる。ラメットリーの傳記の作者は《Biographie Universelle ancienne et moderne》に於て『同一機械』の著述を、『露骨に唯物論の慰めなき教義を展開せる醜惡なる著述』として描出してゐる。しかし何處にこの教義はあるのか？ 下のことにあるのである、お聞きなさい、『自分の病氣中に、彼の精神力の減退が彼の諸器官の衰弱に次いで現はれたことを觀察したところから、彼はこのことから、思惟は身體組織の所産に過ぎないといふことを結論し、またこの自己の見解を公表する勇氣を有したのである。』何といふ怖ろしいことだらう！ 何といふ愚劣な僞教義だらう！！

『しかし醫學は無思慮なまたは抽象的な唯物論ではなく、が……人間に依據する内的唯物論の源泉として役立つのである。——とフオイエルバツハは言つてゐる。——正にこゝに唯物論と唯心論との論争に於けるアルキメデスの見地があるのである、何となれば問題はそこでは、結局物質の可分不可分についてではなく人間の可分不可分について……人間の外に在る物質についてではなく、人間の頭蓋骨の中に在る物質について、進んで行つてゐるからである。約言すれば、この論争に於ては問題は、——それが頭腦の參與なしにはなく行はれてゐる以上——單に人間の頭腦にのみ關聯してゐるのである。』

註<sup>1</sup> Feuerbach, Werke. 第十卷、一二八—一二九頁。

ラメットリー、ホルバツハ及び『エンサイクロペヂスト達』の中の他の多くの唯物論者もまた同様にこの論争を觀察してゐる。そして正に、彼等の意見がかゝるものであつた故に、彼等は、極めて少數の例外を除いて、『人間の頭蓋骨の中に在る』のではない物質の靈活性の理論に對して可成に冷淡であつたのである。フオイエルバツハの見地はこの點に於ても亦フランス唯物論者の見地であつた。

しかしそれと共に、フオイエルバツハが單に或る一定の地點までであつて、決してそれ以上ではなく、唯物論者たちと手を携へて行くことを欲したことは疑ひない。彼は一度ならず、眞理は彼にとつて『唯物論の中にも、觀念論の中にも、哲學の中にも、心理學の中にも』ないことを宣言した。——本質に於て彼自身の見解を内包せる理論からのこの偏倚はどこから來てゐるか？

エンゲルスはこれを説明して、フオイエルバツハは唯物論とこの世界觀が或る歴史的段階に於て、即ち正に十八世紀に於て、形をとつたところの特殊形態とを同一視してゐた、と言つた。が本來的なフランス唯物論について言へば、フオイエルバツハはこれとそれに包まれて十八世紀の唯物論が博物學者および醫師の頭腦の中に存在し続け、またそれを彼が五十年代に於てビュヒネル、フオグト及びモレシヨットの中に發見したところの俗惡な、通俗的な形態とを混同してゐた。私はエンゲルスよりも進んでかう言はうと思ふ、フオイエルバツハは彼が十九世紀に於て十八世紀の唯物論の眞實の復活者であつたこと、また彼がその一切の長所とその一切の缺陷とをもつてこの唯物論の代表者として現はれてゐることを知らなかつた、と。



フオイエルバッハは、今やシュテルン氏によつて分け有たれてゐるところの、フランス唯物論者は物質のすべての力を運動に歸してゐた、といふ見解を抱いてゐた。私はすでに、この見解が全然誤りであること、またこの點に於てはフランス唯物論者がフオイエルバッハ自身に劣らず『唯物的』であつたことを指摘した。しかしフオイエルバッハのフランス唯物論からの偏倚は至大の注目に値する、何となればそれは彼自身の世界觀と同様に、マルクス及びエンゲルスの世界觀をも鋭く特徴づけるところのものであるからである。フオイエルバッハによれば、心理學に於ける認識の源泉は生理學に於けると全く別である。しかし認識のこれらの二つの源泉の差異はどこにあるか？ フオイエルバッハは極めて特徴的な解答を與へてゐる。曰く『私にとつて、或ひは主觀的に、精神的活動であるものが、それ自身に於ては、即ち客觀的には、物質的なる、感覺的なる活動である。』これは、御覽のごとく、シュテルン氏が下のごとく言つてゐるのと同じである。「かくて、譬へば、飢餓は、物質的に觀すれば、一種の肉體的液汁の不足であり、心理的に觀すれば、それは不満の感情である、飽滿は物質的には有機體の不足の充足であり、心理的には——満足の感情である。』しかし、シュテルン氏はスピノーザ主義者ではないか。Ergo(従つて)……ergo(従つて)、フオイエルバッハもまたスピノーザの見地に立つてゐる。

註1『カントに復歸しつゝある』マルクス主義者の爲めの注意、フオイエルバッハの『それ自身に於ては』は

『純粹理性批判』の著者の『Kan Sich』『それ自體』と何等共通のものを有つてゐなう。

また、事實において、フオイエルバッハが嘗てデイデロワがかゝるものであつたと同様のスピノーザ主義者であつたことは、何等の疑ひも存しない。

このことを一瞬間と雖も疑はない爲めには、彼の著述を多少の注意をもつて讀めば充分であり、スピノーザから始めてヘーゲルに終る現代哲學の發達に關する多少とも明確な概念を把持すれば充分である。「スピノーザは現代の思辨哲學の眞の創始者である、シェーリングはその復活者であり、ヘーゲルはその完成者である」と彼は最も注目すべき自己の著述の一つに於て言つてゐる。スピノーザ主義の『秘密』眞意義は、——フオイエルバッハによれば、——自然である。「スピノーザが論理的若しくは形而上學的には本體と名付け、神學的には——神と名付けてゐるところのものを仔細に觀察する時それは何であるか？ 自然以外の何物でもない。』これはスピノーザの強味であり、この中に『彼の歴史的意義と價値』とは含まれる。(自然はまたフオイエルバッハの『秘密』でもある——ゲー・ペー)。しかし、スピノーザは神學と絶縁することが出来なかつた。自然は彼にとつて自然でない、自然の感性的な反神學的な本質は彼にとつて抽象的な形而上學的、神學的本質に過ぎぬ……スピノーザは自然から神性を創造してゐる。そしてこゝに彼の『根本的な缺陷』がある、フオイエルバッハは自己のスピノーザ主義の缺陷を、Sive(即ち)の代りに aut-aut(或は——或は)を残すことによつて、改めて

2。『(Deus Sive Nature) (神即ち自然)ではなくして、(aut Deus aut Nature) (或は神或は自然)が眞理の合言葉である。神が自然と同一であるところ……そこには神も自然もない、神祕的な水陸兩棲の雌雄同體があるのみである。』

註1 著作集、第二卷、二一四頁。第四卷、三八〇頁。

註2 著作集、第四卷、三九一頁。

註3 著作集、第四卷、三九二頁。

我々はすでに、正にかゝる批難をデイデローがスピノーザ主義に對して、「エンサイクロペディア」の中に印刷されたところの、上に引用された論文『Spinosiste』(「スピノーザ主義者」)に於て加へてゐるのを見た。シュテルン氏は、思ふに、スピノーザはかゝる批難を受くべきものではないと反駁するであらう、しかし此處ではそれは我々に關係しない。こゝで問題になつてゐるのは、フオイエルバッツハの哲學がスピノーザ哲學に如何なる關係にあるかといふ問題に對する解答である。がこの解答につて言へば、彼はかう語つてゐるのである、

フオイエルバッツハの唯物論哲學は、デイデローの哲學と同様に、スピノーザ主義の一種に過ぎなかつた、と。

が、今やマルクス及びエンゲルスに移らう。

これらの著者たちは或る時期の間フオイエルバッツハの感激的な心酔者であつた。エンゲルスは書いてゐる、「我々は皆な感激してゐた(「キリスト教の本質」の出現の後に——ゲー・ベー)そして皆な一時フオイエルバッツハの追隨者となつた。如何なる感激をもつてマルクスが新しい見解を迎へ、また如何に強くそれが彼に、彼のすべての批判的但書きに拘らず、影響したかは、——『Die heilige Familie』(「神聖家族」)の著書によつてそれを知ることが出来る。』

しかしながら、既に一八四五年の二月にマルクスは天才の透徹さをもつてフオイエルバッツハの唯物論の「主要なる缺陷」を見出した。この主要なる缺陷は、彼においては「現實的な、感情によつて知覺される對象の世界が、單に客觀の形態に於て若しくは直觀の形態に於てのみ、即ち實踐の形態に於てでなく、主觀的にでなく觀察されてゐる」ことにあつた。この批判は唯物論の發展に於ける新段階の出發點となり、それが歴史の唯物論的説明に導く。「經濟學批判」の著述の序文は、科學として進出しようであらうところの一切の未來の社會學へのプロレゴメナと名付けることの出来るところのものを含んでゐる。

しかし注意せよ、マルクス——エンゲルスの批判はフオイエルバッツハの唯物論の基礎的見地には觸れてゐないのである。まつたく反對である！

エンゲルスが、「唯物論者の陣營には自然を基礎的根元としてゐる凡ての者を歸屬せしめなければ

ならない』(彼の著述「ルードウィッヒ・フォイエルバッハ」を見よ)と書いてゐる時、彼は唯だフォイエルバッハの次の言葉を繰返してゐるのである、「思惟と存在の眞實の關係は、唯だ、存在、それは主辭であるといふことに存する、思惟は——賓辭である、思惟は存在から發生し、非存在は思惟から發生する。」<sup>1)</sup>がフォイエルバッハの見地はスピノーザ主義者の見地であつた故に、それと同一であるエングルスの哲學的見地もまたそれ以上であり得なかつたことは明かである。

註1 Werke, II, 二六三頁。

嚴密に言ふなら、「思惟は存在から、非存在は思惟から發生する」といふ命題は、スピノーザの教義に一致しない。しかし、こゝで問題になつてゐるところの、その「思惟」は、人間意識、即ち「思惟」の最高形態であり、従つてこの思惟への存在の前提は如何なる場合にも「靈活性と物質と」を排除しないのである。このことを信する爲めには、唯だフォイエルバッハの著作集第二卷二二六頁、及びエングルスの著書《Ludwig Feuerbach》(「ルードウィッヒ・フォイエルバッハ」)の二一、二二頁を讀めばよい。エングルスが如何なる輕蔑をもつてカール・フォグト、モレンヨット等の唯物論について語つたかは周知のことである。しかしこれこそは正に或種の權利をもつて、彼は物質のすべての力を運動に歸せようと言つて批難することの出來たところのその唯物論なのである。私はマルクス

及びエングルスの文學的遺産の中にある原稿の公表が、この問題に新しい光を投げるであらうことを信するものである。が差し當り私は充分なる確信をもつて、マルクス及びエングルスが自己の發展の唯物論的時期に於て決してスピノーザの見地を棄てなかつたことを斷言する。そしてこの私の確信はなかんづく、エングルスの個人的證明に基づいてゐる。

註1 私がこれらの行句を書いた時(一八九八年)、私は、主として、當時まだ印刷されてをらず、しかもその存在を私がエングルスから既に一八九九年に聞いて知つてゐたところの、エピクロスについてのマルクスの學位論文を念頭に置いてゐたのである。その後この學位論文はエフ・メーリングによつて出版されたマルクス及びエングルスの初期の作品集の中に印刷された。しかしそれは私の期待を正當化しなかつた、何故かと云ふにマルクスはその中に於てまだ全く觀念的見地に立つてゐるからである。

一八八九年に私は、パリに於ける國際展覽會に出席した序をもつて、個人的にエングルスと近付きになる爲めに、ロンドンに赴いた。私は殆どまる一週間に亘つて各種の實踐的および理論的 주제로基づいて彼と長い談話を交はす満足を持つた。或る時我々の談話は哲學上の問題に觸れた。エングルスは、シュテルンが極めて不正確に、「自然哲學的唯物論」と呼んでゐるところのものを鋭く批難した。「それでは、貴方の考へでは、——と私は訊ねた——スピノーザ老人は、念ひと廣がりとは同一本

體の二つの屬性以外の何物でもないと言ふ時、正しかつたのですか？』『勿論です。——とエンゲルスは答へた。——スピハ、ザ老人は全く正しかつたのである。』

若しも私の記憶にして私を欺かないならば、我々の談話には有名な化学者シオルレンメルがゐ合はせたし、そこには尙ほベ・ペ・アクセリロツドもゐ合はせた。シオルレンメルは最早生きてゐない、しかし我々の同席者の他の一人はまだ壯健である、そして必要な場合には、勿論、私の報道の正確さを立證することを辭せないであらう。

尙ほ數言。『ルードウイツヒ・フオイエルバツハ』への自己の序文に於てエンゲルスは、なかんづくドイツの諸大學の聴講者に哲學の名稱の下に提供されつゝある『折衷的雜炊』について語つてゐる。彼の生前にはこの美事なる雜炊はまだドイツの労働者には給與されてなかつた。今やコンラツド・シユミットはそれを彼等の間に持ち廻つてゐる。これは正にその試食がかくも幸福にベルンシユタイン氏を『覺醒した』ところの、その雜炊なのである。コンラツド・シユミットは一派を創始しつゝある。それ故彼の折衷的雜炊を鋭敏な試藥、マルクス——エンゲルスの哲學によつて分析することは餘計な事ではないのである。私はそれを次の論文に於てなすであらう。

### 何の爲めに我々は彼に感謝するか？

カール・カウツキイへの公開狀

—

尊敬すべき貴重なる同志！

何よりも先づ、ドイツ社會民主黨のストツトガルト黨大會に於ける貴下の演説が私に與へた満足に對して自己の感謝を表白することを許されたい。黨大會の代議員たちの壓倒的多數の側からして貴下に表明された熱烈な支持と關聯して、これらの演説は大なる意義をもつ政治的事件である。若しも以前にドイツの黨の若干の黨員達——ベルンシユタイン、コンラツド・シユミット及びハイネ諸氏——の演説および論文が我々の敵の心に、ドイツ社會民主黨は階級闘争の革命的地盤を放棄して日和見主義の泥沼に墮ちようとしてゐるといふ愉快な希望を起させたとしたならば、今やこの希望は、煙のやうに、消え失せた。今や如何なる疑惑もあり得ない。今や何人も、ベルンシユタイン、コンラツド・シユミット及びハイネ諸氏は決して黨の見解を表明したものでなく、従つて同志ジンデルは完全なる權

利をもつて自己の終結演説に於て、我々はかゝるものであつた、またかゝるものとして残るであらうと語る事が出来たと信じてゐる。然り、ドイツ社會民主黨は、實際、常にそして凡ゆる時にさうであつたところの、我々の時代の革命的思想の忠實なる旗手として残つた！

残念なことには、貴下の演説の一つに、深い喜ばしい印象を或る程度まで弱めるのみならず、將來重大な誤解の因となるかも知れない箇所がある。私はこゝでベルンシュタインに對する貴下の反駁演説を念頭に置いてゐる、がその問題の箇所は、疑ひもなく、私ばかりでなく、他の多くの者達をも驚かすべき性質のものであつた故に、私は、貴下との私的な對談の代りに、貴下への公開狀に於てそれを討論に附することとしたい。

自己の演説に於て貴下に言つた、「ベルンシュタインは我々を混亂せしめなかつた。しかし我々をして考慮せしめた。それに對して我々は彼に感謝するであらう」と。

これは正しい、しかし唯だ部分的にである。ベルンシュタインは、實際、すこしもドイツ社會民主黨を混亂せしめなかつた。これはスツットガルトの黨大會に於て採用された決議が證明する。しかし彼は我々をして考慮せしめたか、それだけでも爲し得たか？ 恐らくは否と考へる。

何人かをして考慮せしめる爲めには、新しい事實を指摘するか、さうでなければ既に知られてゐる事實を新しい照明の下に提出することが必要である。ベルンシュタインはそのいづれをも爲さなかつた。それゆゑ彼は何人をも考慮せしめることは出来なかつた。

それとも私は、ベルンシュタインの文學的活動に關する自己の評價に於て誤つてゐるのであるか？ よろしい、見て見よう。

我々にとつてこゝで興味あるのは、二三の同志達の側から或種の批難を受くるに至つたところの彼の著述家的活動のその部分だけに限られることは自明である。こゝへは彼の活動の最近數年間が關係する。以前の彼の文學的勞作については異なる意見があり得るかも知れない、しかしこゝではそれらまで論及する必要は少しもない。

かくて、最近數年間ベルンシュタインは、一般的には、彼が革命的な文句と名付けたところのものに對して、また部分的には、「破綻の理論」に對して闘つて來た。この理論に對する彼の議論の重心は、彼の考へる所に據れば、マルクス及びエンゲルスによつて共產黨宣言の中に表明された多くの見解は、社會生活の發展のその後の行程の中に確證を見出さなかつた、といふ疑ふべからざる事實の指摘の中に含まれる、『社會關係の尖鋭化は、——と彼は言つてゐる、——宣言が記述してゐるやうには行はれなかつた。これを隱蔽することは無益であるばかりでなく、極めて愚かなことである。有産者の數は減少しないで、増加した。社會的富の巨大なる増殖は資本所有者の急速に減少しゆく數によつてではなく、あらゆる程度の資本家の増大しゆく數によつて伴はれる。中間層は性質を變じては居るが、しかし彼等は社會的地位の階梯から消え去つてはゐない。』若しも我々がベルンシュタインの此等の議論に、産業の或種の部門に於ては集中化が極めて緩漫に行はれて居るといふこと、従つて將來産業恐

慌は、以前のやうに、鋭いかつ全般的な性質を帯びる筈がないといふ彼の意見を附加へるならば、完全なる権利をもつて、これを以て彼の『破綻の理論』に對する全議論は盡きると言ふことが出来る。そこで、尊敬すべき貴重なる同志、注意深くこの議論を観察せよ、然らば貴下自身、既に幾度となくブルジョア陣營からの我々の敵によつて語られた以外の何物も、絶対に何物も、その中に存しない事を確信するであらう。その時貴下はまた、我々がベルンシュタインに對して何物かを負うてゐると感すべき絶対に何等の根據も有しないことを承認しなければならぬであらう。

貴下は、疑ひもなく、シュルツェ・ゲーヴァニッツ氏の勞作に通じて居る。希はくば、彼の著書『Zum Sozialen Frieden』(『社會平和に關して』)を取上げて、第二卷、四八七頁及びそれ以下を一讀されたい。シュルツェ・ゲーヴァニッツ氏はそこで『破綻の理論』を反駁せんと企てゝゐるのであるが、これを彼は次ぎのやうに定式化して居る、『大規模産業の發展は労働者の無差別プロレタリアートの隊列への強められゆく没落、少數者の手による富の蓄積、中間階級の消滅、社會革命黨の進出を表徴する。』シュルツェ・ゲーヴァニッツの意見に従へば、事實はこの理論に一致してゐない、『Board of Trade』(『貿易局』)の詳密な統計はイギリスの爲めに、社會革命的傾向が地盤を失ひつゝあるといふ反對の現象を確立して居る。』一方に於て労働者の經濟状態は最近五〇年間に次第に改善された、他方に於て、『益々少數の手に財産が集中されるといふ廣く普及された表象』が誤れるものであることが解つた。最後に、株式會社の普及は益々多數の小貯蓄所有者を大規模生産業の利潤への參

加へと誘引しつゝある。すべてこれらの事情は、一つになつて、シュルツェ・ゲーヴァニッツの意見によれば、社會問題の平和的解決に向つて道を拓くものである。

同様の見解を彼は他の自己の著述『Der Grossbetrieb—ein wirtschaftlicher und sozialer Fortschritt』(『大經營——經濟的及び社會的進歩』)に於ても述べてゐる。

『富める者は益々富み、貧しき者は益々貧しくなるといふことは、まづたく正しくない、事實上は丁度その反對が行はれてをり、このことはイギリスにとつては統計的に證明されてゐる。産業的勞働給與者が社會的及び政治的關係に於て第一位を戦ひとる時分には、彼等に續いて新しい中間階級が擡頭し始め、それは最初經濟的に、次で政治的に鞏固になりつゝあるのである』(二二二五頁)。シュルツェ・ゲーヴァニッツの議論及び結論はイギリスに關するものである。彼は、他の諸國に於ては諸關係はこれと異つて形成されてをり、譬へば、ドイツに於ては、『中間階級は尙ほ著しく減少しつゝある』事を承認してゐる。しかし彼はこの事實を簡單にドイツの未發達をもつて説明し、またかゝる方法をもつて、彼がイギリスに關して斷言しうると考へてゐるところのものが、時と共に、ドイツの爲めにもまた自己の完全なる意義を獲得するに至るであらうことを指摘してゐる。

こゝにはシュルツェ・ゲーヴァニッツの議論と結論とが如何に一面的で傾向的であるかを示すべき場所がない。尊敬すべき貴重なる同志、貴下は勿論それをも私よりも遙かによく知つてゐる。今日イギリスに於て新中間階級が形成の時期に際會してゐることを證明せんと欲した研究家達の中の丁度ま

た一人である、ジー・アイ・ゴーションは、一八八二年の十二月にロンドン統計學會でなされた自己の演説においてかう言つてゐる、『統計學者にとつて侮辱的である（一切を證明しうべき數字）に關する断定は、決して虚偽を語らない數字が、何等か不正なることを證明せんが爲めに改竄されるかも知れないといふことだ。數字はそれ自身では決して嘘を吐かない、しかし何人も正に統計學的材料のやうに、かくも容易に特殊な目的の爲めに歪められることの出来る、かくも正確なそして信頼するに足る材料は他に存しないことを承認しなければならぬ。』私はシュルツェ・ゲーヴァニッツの上述の著述を繙く場合、いつもゴーションのこれらの言葉を思ひ出すのである。しかし私は今これ以上詳細にそれに立ち停まることをせぬであらう。私は唯だ、ベルンシュタインが彼よりも數年以前にシュルツェ・ゲーヴァニッツによつて語られたことを繰返してゐるに過ぎないことを貴下に示すことだけを欲したのである。

しかしシュルツェ・ゲーヴァニッツも絶対に新しい何物も語らなかつた。既に彼以前に二三のイギリス統計學者、譬へば、すでに上述されたゴーションの如き、同様にまた二三のフランスの經濟學者譬へば、ポール・ルロア・ポリューが、彼の『富の分配と社會状態の最小限の不平等への傾向についての試論』、パリ、一八八一年、に於て同一の主題に觸れてゐる。私によつて引用されたシュルツェ・ゲーヴァニッツの著述は、専門的に且つ最も精密な方法でポール・ルロア・ポリューによつて完成された古い主題の新しい變形以外の何物でもないことを誇張なしに言ふことが出来る。かくてベルンシュタ

インはブルジョア經濟學者のみを反趨してゐるのである。何故に我々はこれらの經濟學者に對してではなく、正に彼に對して感謝の意を表さなければならぬか？ 何故に我々は彼等ではなく、彼ベルンシュタインが我々を考慮に目醒ましたと言はなければならぬか？ 否、尊敬すべき貴重なる同志よ。若しも眞にこの際我々の側からの感謝の義務について言はなければならぬならば、我々は正しくあらうではないか、そして然るべき宛名によつて我々の感謝を贈らうではないか。それを一般に、『經濟的調和』のすべての心醉者達及び崇拜者達に、第一には、云ふまでもなく、不死のパスチアに贈らうではないか。

ベルンシュタインは屢々『科學的社會主義を科學的に導く眞面目なる試みがまだ稀である』ことについて遺憾の意を表明した、そして自己の『社會主義の諸問題』に於て『既に證明された社會民主黨の理論および要求の辯難的批判』に着手しつゝ、彼は傲慢にも、『一切の理論的勞作はこれまで承認されて來た命題の（辯難的）批判に含まれる』こと、従つて、『若しも（*Neue Zeit*）が社會民主黨の理論的機關であることを欲するならばこの（辯難的）批判を回避することは出来ない』と宣言してゐる。『その上、——と彼は附加へた、——如何なる迷妄が會て（證明されたる眞理）でなかつたか？』そこで彼の『理論的勞作』の結果は如何なるものであつたか？ 『經濟的自己發展の原則』の重要性といつたやうな若干の町人的考察と——それから……科學的社會主義の敵の理論的見地への決定的な轉向である。ベルンシュタインは我々に最近のブルジョア經濟學の『眞理』を提供して、しかもその際

「マルクスの理論を、偉大なる思想家がそれに止まつたところのその點以上に發展させてゐる」のだと考へてゐる。何といふ不思議な自己陶醉であるか！ ベルンシュタインについては、ファウストがワグネルについて語つたことを繰返すことが出来る、即ち

彼は貪慾なる手をもつて寶を探し

雨に濡れしよぼれた蛆を探し當てゝは喜んでゐる。

スツットガルト黨大會の閉會に際して、同志グライリツヒは、ベルンシュタインを辯護して、なかんづく、次のやうに言つた、「私は我々の事業が批判の爲めに唯だ利益することだけが出来るのを深く信じてゐる。ドイツ社會民主黨は自己の偉大なる思想家マルクス及びエンゲルスから偉大なる遺産を受取つた。しかしこゝでも我々は最後の眞理ではなくして、常に新らしい事實に照應させられなければならぬところの科學を問題として持つのである。」何物もこれ以上正しいことはあり得ない。しかし果して同志グライリツヒは、眞實に、マルクス及びエンゲルスによつて我々に殘された偉大なる遺産が、ブルジョア經濟學者の教義との折衷的混合から何物かを利益することが出来るかと考へてゐるのであるか？ 果して、事實において、彼はこれらの教義の無批判的な反趨以外の何物でもないものを批判と名付けうるのであるか？ がベルンシュタインのところでは我々は、かゝる無批判的な反趨以外の何物をも發見しないではないか。唯だこの無批判的な反趨によつて彼は我々に自己の雨に濡

れしよぼれた蛆を供することが出来たに過ぎない。

序でもつて私は、我々の敵の教義に對するかゝる無批判的な態度を取つたものが一人ベルンシュタインのみでないことを注意して置かう、尤も正にベルンシュタインに於てそれは特に明瞭に現はれたのであるが。尙ほ我々の學識ある他の同志も、餘所ながら、マルクス自身にさへも彼等は「批判的に」對しうるといふことの證據の中に満足を見出してゐる。この目的をもつて彼等は彼の理論をブルジョアの敵によつて與へられた歪められた形態に於て取り上げ、次ぎにこれらの敵のところへ借りて來られた論證の助をかりて、誇らしげに自己の「批判」を研ぎすましてゐるのである。

貴下は、勿論、尊敬すべき貴重なる同志、かゝる種類の「批判」によつて利益しうるのは最早決して社會主義學說ではなくして、精々「批判者」諸君が教養あるブルジョアの間で獲つてゐるその人氣に過ぎないことを承知してゐる。

マルクスの理論は窮極的な永久的眞理ではない。これは正しい。しかしそれは我々の時代の最高の社會的眞理である、そして我々がこの理論を新たに出現したバスターア及びセー者流の「經濟的調和」の小金に替へるべき根據を有しないのは、同じ方向に於て爲された試みを眞面目なる批判として歓迎し、それらに自己の賛意を表すべき根據を有しないのと同様である。

尊敬すべき貴重なる同志、この寄り道を許されたい。私は今やベルンシュタインへ、即ち正に最近有名になつた「終局的」に關する挿話へ立ち戻るであらう。



ペルンシュタインが終局目的に對する自己の無差別的態度を表明した後、彼は自己を説明し正當化するの必要を見出した。しかしこれらの説明と辯解とは何物をも齎らさなかつた。それらを讀んだ時私は益々、すべての著述家がかたく依據せねばならぬ既に試験済みの規則の利益を信するに至つた、それは、先づ最初に自己の論文の訂正をなし、そして唯だその後、に於てのみそれを印刷に附すべきであるといふことである、何となれば論文の印刷後になされた訂正は、殆ど事態を改善せぬからである。それと同時に私は、何が本來ペルンシュタインにこの明かに何等の論理的意義をも有しない、といふよりは、謂ゆる味も素氣もない論文を書かせるに至つたかと自分に訊いて見た。初め、私は彼が自己流に、ペルンシュタイン流に、若しも私が謬つてゐないならば、レツシングに屬してゐる有名な金言を改作したのかと思つた、「若しも世界の創造者が一方の手には全眞理を載せ、他方の手には——それへの希求を載せ、そして私にそのどちらかを選ませるならば、私は出來上つた眞理を取るよりも眞理への希求を選ぶであらう。」その後 (Zum Sozialen Frieden) 『社會平和に關して』なる書物を繕くに至つて、その有名な文句の出所が全く別であることを發見した。

シュルツェ・ゲーヴァニッツに従へば、舊きイギリス經濟學は勞働立法に敵對した、またそれが成年者の個人的自由を制限するものであつた限りに於て、敵對せざるを得なかつた。しかるに個人的自由

のこの種の制限は工場法の不可避的な結果であつたのであり、それは、逆に、勞働者階級の政治的影響の増大と共に發達せねばならなかつたものである。これらの諸條件はイギリスに於て大陸社會主義の、理論の採用と普及のために地盤を準備した。尤も『勞働者の状態は絶望的であるといふ主張』が、排除された結果として、この理論は本質的な變化を蒙りはしたが、『社會主義は正にこれによつて自己の尖鋭さを失つて、と更にシュルツェ・ゲーヴァニッツは續けてゐる、立法的要求の基礎づけの爲めに利用されつゝある。この際、終局目的として、すべての生産手段の國家化が採用されようとも、或は否認されようとも、本質においては、無差別である、何となればこの要求は革命的社會主義にとつて必然であるにしても、近い目的を遠い目的よりも前に立てるところの實際政治的な、それにとつては否であるからである。(Zum Sozialen Frieden) 『社會平和に關して』第二卷、九八頁)。

イギリスの『實際政治的』社會主義の代表者には、シュルツェ・ゲーヴァニッツによれば、ジョン・スチュアルト・ミルも屬する、彼は『エンゲルス及びマルクスの精神に於ける』社會主義者ではないが、しかし經濟的活動に對する國家の思ひ切つた干渉を許し、『成年男子に對しても或る場合には保護を擴張することの必要を擁護したところの最初の經濟學者』である (Zum Sozialen Frieden) 『社會平和に關して』第二卷、九九頁)。私はかゝる標章の『實際政治的』社會主義者として現時エツアルド・ペルンシュタインもまた進出してゐることを斷言する者である。シュルツェ・ゲーヴァニッツはジョン・スチュアルト・ミルの『社會主義的見解』の發展の歴史を、彼の自叙傳に依據して叙べてゐる。

る。我々は自分の側において、それと全く同様にエツアルド・ベルンシュタインの發展行程を、彼自身の説明を注意することにより、またそれを『實際政治的』社會主義者にとつての終局目的の大ならざる意義に關するシユルツエ・ゲーヴァニッツの、上に引用された議論と關聯させることによつて、想像することが出来る。

イギリスに於ける社會生活の發展行程がエンゲルス及びマルクスの見解を顛覆でもしたかのやうなシユルツエ・ゲーヴァニッツ及びその他の調和論者の見解を我が物とした後に、ベルンシュタインは同じシユルツエ・ゲーヴァニッツによつて叙べられた『實際政治的』社會主義への牽引を感じてゐる、その見地からすれば、終局目的、——すべての生産手段の國家化、——は、眞に、何らか殆んど全く空想的ではないにしても、無差別的なものである。所で今や、かゝる社會主義の精神に貫かれてベルンシュタインは公然終局的に對する自己の新しい態度について説明を急ぎ始めた、その際終局目的に關するシユルツエ・ゲーヴァニッツの上に引用された意見は單に彼の思想的傾向ばかりでなく、同様にまた彼の表現方法をも決定した。かくて事態は全く明瞭となる、最初高い程度に背理的に見えるところの有名な句が、極めて明白なまた極めて決定的な意味を受取る。成程ベルンシュタイン自身はこの意味に驚いてゐる。それは彼の説明と辯解とが證明する。スツットガルト黨大會への彼の手紙もそれを示してゐる。その中で彼は言つてゐる、『「共產黨宣言」によつて現代社會の發展に與へられた診斷は、それがこの發展の一般的傾向を特徴づけた限りに於ては、正しかつた。』しかし手紙のその

後の内容はこれらの言葉との明かなる矛盾の中にある、假令ベルンシュタイン自身はそれに氣付かず或は氣付くことを欲しないとしても、依然としてこの矛盾は何人にとつても、我々の事業の味方にとつてもまたその敵にとつても、疑ひなき所である。貴下はそれをスツットガルトに於ける演説に於て特に強調した、曰く、『彼（ベルンシュタイン）は、有産資本家の數は増加しつつある、従つて、我が我々の見解を打ち立てたところの基礎は正しくない、と我々に説明する。然り、若しもこのことが正しいならば、我々の勝利の瞬間は常に非常に遠方へ押しやられるばかりでなく、我々は、一般に目的に到達しないであらう。』と。

同じ精神を以て同志リーブクネヒトはかう言つた、『ベルンシュタインの議論が正しいならば、我々は自己の綱領と自己の一切の過去とを葬り去ることが出来、その時我々はプロレタリア黨であることを止めるであらう。』

他方に於て、『社會民主黨の鬭争と社會革命』なるベルンシュタインの論文の發表の後間もなく、教授ユー・ブルフは書いた、『彼の判斷の重要性は評價され過ぎることはない。これは現代の社會主義的學說に對する平手打であり、それに對する公然たる宣戰布告である』（*Illusionisten und Realisten in der Nationalökonomie*）『國民經濟學における幻想家と現實家』社會科學雜誌 1898, Heft 4, Seite 251）。

私は絶對に、その見解を彼が以前宣傳したところのその黨と擲り合ひをするベルンシュタインの權

利を非議するものではない。何人も自己の見解を變更することが出来る。しかし彼は彼の見解の中に行はれた變化が本質的な意義を有しないことを信じさせようと努力すべきではなかつた。彼は彼の新見解が不可避免的にシュルツェ・ゲーヴァニッツ氏及びその一味が宣傳しつゝある『社會的平和』に導くことを知りかつ理解しなければならなかつたのである。一言にして言へば、ベルンシュタインは社會民主黨と戦ふ権利を有した、しかし彼は名乗りを上げて戦ふべきであつた。しかし彼はそれをしなかつた故に、それに對して彼は感謝ではなくして、痛烈な非難に値する。文藝復興期及びそれ以前にすら、古代の哲學者達がキリスト教徒であつたことを證明しようとした學者があつた。彼等が實際において證明したところのものは彼等の望んだものではなくして、全然證明しようとも思はなかつたもの、即ち正に、彼等自身がキリスト教の見地を棄て、異教徒になつたことであるのは自明である。何等か類似のことがベルンシュタインを擁護した我々の『學者たち』にも起つた、彼等は、ベルンシュタインが忠實に社會主義に（「エンゲルス及びマルクスの精神に於て」）停まつたことをではなくて、彼等自身がブルジョア『社會政策家』の見解に感染したことを證明した。國際的社會民主黨はかゝる『學者たち』を監視しなければならぬ、さうでないとい彼等は多くの害惡を彼に與へるかも知れない。

## 三

ベルンシュタインの場合はこのことについて考へることを欲するすべての者にとつて極めて教訓的

である、——そして唯だこの意味に於てのみ私は貴下と共に、尊敬すべき貴重なる同志、ベルンシュタインが我々の感謝に値すると言ふであらう。社會民主黨員から『社會政策家』への彼の轉向の歴史は常に我々の黨のすべての思慮ある人々の注意を惹き付けねばならぬであらう。同志リーブクネヒトはこの轉向をイギリスの諸條件の影響によつて説明した。「マルクスの如き頭腦は、——と彼は言つた、——自己の『資本論』を書く爲めに、イギリスに滞在しなければならなかつた、ベルンシュタインにとつてはイギリス・ブルジョアジーの巨大なる發展は威嚇的である。』しかし果してイギリスに住んで、イギリスのブルジョアジーの影響の下に落ちない爲めには、眞にマルクスたることが必要であるか、ドイツ社會民主黨の中には、イギリスに住んでも、矢張り社會主義に（「マルクス及びエンゲルスの精神に於ける」）忠實にとどまつたところの多くの同志を見出すことが出来るやうに私には思はれる。否、原因はベルンシュタインがイギリスに住んでゐることにあるのではなくして、彼が『科學的に導く』べく着手した科學的社會主義を拙劣に我が物としたその事情にある。私は多くの者にこれが信ぜられないことに見えるであらうことを知つてゐる、それにも拘らずそれはさうなのである。

（*Neue Zeit*）に於ける私の論文「ベルンシュタインと唯物論」の中で私は、如何にこの人の哲學的知識が驚異的に貧弱であるかを、また如何に、概して、唯物論についての彼の表象が誤れるものであるかを示した。私が今（*Neue Zeit*）の爲めに書いてゐる論文に於ては、私は如何に拙劣に彼が唯物史觀を我が物としたかを示すであらう。それ故今は私は貴下に、如何に驚異的に彼自身がそれに對し

て『批判的』に武装したところの破綻の理論を理解しなかつたかに注意を向けられんことを希ふであらう。

彼は次の如く我々に向つて『社會民主黨に於て現在優越を示してゐるところの現代社會の發展行程の解釋』を述べてゐる。

『この解釋に従へば早かれ晩かれ至大の力と規模との經濟的恐慌が、それによつて作り出される窮困によつて、資本主義的經濟組織に對し甚だしく人心を激昂させるであらう、そしてこの組織の支配の下にあつては、所興の生産諸力を一般的幸福の爲めに指導することが不可能であることを國民大衆に信ぜしめるであらう、その結果はこの組織に反抗する運動をして打勝ち難い力を獲得せしめ、そしてその壓力の下にかくの如き組織は宿命的に崩壊し去るであらう。換言すれば、打勝ち難い偉大な經濟的恐慌が全般的な社會的恐慌にまで擴大するであらう、その結果は唯一の意識的にして革命的なる階級としてのプロレタリアートの政治的支配、及びこの階級の支配に際して遂行される社會主義的な意味に於ける社會の完全なる改造であらう。』

尊敬すべき貴重なる同志、貴下もまた早かれ晩かれ階級闘争の不可避的な結果として到來しなければならぬところの社會的『破綻』を、同様に考へてゐるかどうかを言つてほしい。果して貴下も、かかる『破綻』は唯だ廣大な、そしてその際全般的なる經濟的恐慌の結果としてのみ起り得るといふ意見であるか？ 恐らくは否と考へる。私は貴下にとつてプロレタリアートの未來の勝利は、必須的

に鋭いかつ全般的な經濟的恐慌と結付けられてゐないと考へる。貴下はこれまで一度もかくも圖式的に問題を考察されたことはなかつた。また、私が思ひ出しうる限りでは、他の何人も問題をこんな風には理解しなかつた。成程、一八四八年の革命運動には一八四七年の恐慌が先行した。しかしこのことから決して、恐慌なくしては『破綻』が無意味であるといふことにはならぬのである。

そして、強力な産業的昂揚の時期に於ては階級闘争の極度の尖鋭化を期待することは困難であるといふこと、このことは正しい。しかし誰が我々に將來に於ける不斷の産業的昂揚を保證するか？ ペルンシュタインは現代の國際的な交通手段の爲めに尖鋭なかつ全般的な恐慌は不可能となつたと考へてゐる。それがその通りであり、事業の沈滞は、既に一八六五年にフランスの經濟學者 *Bathie* が言つたやうに、部分的に過ぎぬ——『*l'engagement des produits ne sera que partiel*』と假定しよう。

しかし誰一人我々が經驗したばかりのあの怖ろしき『*trade depression*』不景氣の反覆を否定せぬではないか。果してかくる不景氣は最も明瞭にまた驚異的に、現代社會の生産諸力とその生産關係を凌駕したことを證明しないであらうか？ また、果して労働階級には、實際、この現象の意味を理解することがそれほど困難であらうか？ 産業的不景氣の時代が、失業、貧困及び窮乏を作り出すことによつて、階級闘争の最も激烈な尖鋭化を助成すること、それは極めて明瞭にアメリカが我々に示すところである。

ペルンシュタインは凡てこれらの考察のそばを通り抜けてゐる。未來に對する一切の我々の期待を

彼は尖鋭なかつ全般的な經濟的恐慌との關聯の中に置き、そしてかゝる恐慌は將來に於て恐らく發生することは出来ないであらうと言つた後、彼は既に一切の『破綻の理論』を止揚しえたものと考へてゐる。彼は我々に自分の雛形を開いて見せ、そしてそれからこれらの雛形が全く雛形的であることを證明してゐる。そしてそれから彼はこれらの安價な勝利の爲めに粗雑な歡びに來てゐる。これは彼が『獨斷論者たち』を教へてゐるその調子から見ても明かである。

貴下は、勿論、尊敬すべき貴重なる同志、非常に多數の同志がスツットガルト黨大會に於て、バルヴィスがベルンシュタインと論争したその調子を難詰したことを記憶してゐる。私も亦、若しもバルヴィスが別の調子で論争したのであつたら、ベルンシュタインは沈黙を守る口實を有しなかつたであらうと思ふ。その時全世界はベルンシュタインの思想の驚くべき貧弱さを明かに見ることが出来たであらう。それ故に私も亦、バルヴィスが自制しなかつたのを遺憾に思ふ。しかし同時に私はまったく彼の憤慨を理解する。私の極端な理解によれば、彼はまったく當時の事情によつても正當化されてゐたのである。その上、バルヴィスを難じた人々の誰もが、ベルンシュタイン自身の不快な調子に注意を向けなかつた。それは自惚れの、ひとりよがりの衒學主義の調子であつた。私は『ドイツ及び一部分イギリスの社會民主黨の獨斷論者』へのベルンシュタインの教訓を讀んだ時、かう自分に言つた、若しもサンチヨ・パンサが縣知事にはなく、社會科學の教授に任ぜられたならば、そして若しも彼の常識が不意に曇らされたならば、彼は他のどんなかの調子ではなく、正にベルンシュタインの調子

を張上げるであらう、と。私は知つてゐる、*de gustibus non est disputandum*——趣味は色々である——しかし私はかゝる調子は多くの者に熱烈な、痛烈な調子よりも遙かに反感的であると考へる。

貴下、尊敬すべき貴重なる同志よ、ベルンシュタインが『社會主義の諸問題』なる多くを約束する標題を撰んだところの諸論文のその連續講義の無内容に驚かされたことを認めてゐる。しかも、それにも拘らず、貴下は、これらの無内容な論文が我々をして考慮せしめたと言つてゐる。貴下は豫めベルンシュタインに好意を感じてゐる、そしてそれ故に貴下は非常に正しくないのである。

貴下はスツットガルトで言つた、『ベルンシュタインは、彼の論文が我々の勝利の確信を弱め、鬭争しつゝあるプロレタリアートの手を繋縛すると云つて非難された……若しもベルンシュタインの論文が實際、それ或は他の人々の確信を動搖させたのであつたら、それはかゝる人々についてはさう残念がるに及ばないこと、彼等の確信は非常に深いものでなかつたこと、そして彼等は我々に脊を向ける爲めに第一の機會を利用したことの證明たるに過ぎぬであらう、そしてかゝる場合我々は、各人が危険に曝されるであらうところの破綻の時機に於てではなく、既に今日に於て發生したことを喜ぶことが出来る。』

何人をベルンシュタインの論文は混亂させることが出来たか？ 一時的にもせよ、ベルンシュタインの新見地に立つた人々のみであることは明かである。この新見地への移行は必然的にすべての論理的に思想しつゝある人を舊い社會民主黨の綱領との完全なる分離に導かなければならなかつた。しか

しかゝる種類の戦線の變更は何人によつても懲罰なしには行はれることが出来ない、それは單に一時的に過ぎないにせよ、不可避免的に彼の精力を弱めなければならぬ、その上ベルンシュタインの見地をとつた人々の精力は、自己の勝利を信じてゐる社會民主黨に固有なるものとは殆んど共通なるものをもたぬのである。彼等は必然的に我々とは異なる闘争を理解しなければならぬ、が従つて、勝利に對する彼等の確信も本質的に我々のとは異ならなければならぬ。それ故に、我々の黨に必要な精力は一時的にもせよベルンシュタインに追隨した人々の數に直接關聯して弱められたと言はなくてはならない。貴下と同様に、私も亦、國際的社會民主黨がかゝる人々の忠誠に特殊の意義を附すべき根據を有しないこと、彼は寧ろ、彼等が彼の爲めに嚴肅な試練の時が報ぜられる前に彼の隊列を見棄て、くれることを希望すべき一切の根據を有することを思ふものである。私の意見によればかゝる人々に關する貴下の嚴かな判決は完全に根據あるものである。しかし私には、貴下は不徹底である、——若しも貴下が徹底的であることを欲するならば、これらの人々がその影響に落ち込んだところの人間について——即ちエツアルド・ベルンシュタインについて、一層嚴かに判決を下さなければならぬであらうと思はれる。

私は決してドイツ社會民主黨の内事に干渉して、貴下がベルンシュタインの論文を《*Neue Zeit*》に掲載すべきであるかどうかを決定しようとは思はない。私はそんなことは考へてもゐない。しかし貴下自身、尊敬すべき貴重なる同志、スツツトガルトに於て全世界の社會民主黨にとつて至大の意義を

有する問題が討議に附せられたことを知つてゐるではないか。そしてそれ故にのみ私は貴下にこの手紙を書く決心をしたのである。貴下はベルンシュタインとの論争は、本來、今日始まつたばかりであると言つてゐる。私はこれには必ずしも同意することが出来ない、何となればベルンシュタインによつて提起された問題はバルヴースの諸論文によつて著しい程度においてその解決に近付けられたからである。これは萬國のプロレタリアートへのバルヴースの大なる貢獻をなすものである。しかし問題はそこにあるのではない。最も重要なことは、新たにベルンシュタインと論争を開始するに當つて、我々が私によつて述べられたリーブクネヒトの言葉を記憶しなければならぬといふことである。即ちベルンシュタインが正しいならば、我々是我々の綱領と一切の我々の過去とを葬り去ることが出来るであらう。我々はこの上に立つて主張した隠すところなく我々の讀者に、今や問題は正に、誰が誰によつて葬られるか、社會民主黨がベルンシュタインによつてか、それともベルンシュタインが社會民主黨によつてか、に關聯して進んでゐることを説明しなくてはならない。私は個人的にこの論争の歸結を疑はないしまた一度も疑つたことがなかつた。しかし、尊敬すべき貴重なる同志、自分の手紙を終るに際してもう一度貴下に次の如き質問を提出することを許されたい、眞に我々は、殘酷な打撃を社會主義學說に加へ、またこの學說を團結的な『反動的大眾』の歡喜の爲めに葬り去らうと努めてゐる（意識的であらうが無意識的であらうが、同じことである）人間に向つて感謝しなければならぬか？ 否、否、千遍も否。かゝる人間は我々の感謝に値しない！

貴下に眞に忠實なる

ゲ・ブレハトハフ。

五〇

## カントに背く Cant 又はベルンシュタイン氏の 遺言書

(エ・ベルンシュタイン。史的唯物論。エル・カンツエリ譯。  
第二版。エス・ペテルブルグ。一九〇一年)。

身まかりぬ、カシヤノウナよ、可哀さうな女よ……………

ニエクラーソフ

死は速かに馬を走らせて来る

ゲー・アー・ピユルゲル

ベルンシュタイン氏は彼が曾て所屬したマルクス學派のために死んだ。今はもう彼に對して腹を立てることは不可能である。死者に對しては腹を立てないものである。今は彼を憐んでも無益である。憐んでもどうにもならない。しかし我々は矢張り故人に最後の負債を返さなくてはならない。我々は全文明世界の社會主義的集團の中に多くの騒動を惹き起したところの、ロシア語に翻譯され今やペテルブルグに於て第二版が出た彼の著書に數ページを献げなくてはならない。

この書物に於てベルンシュタイン氏がマルクス——エンゲルスの理論を『批判的究明』に附してゐることは周知のことである。我々は自分の側から此處でこの『究明』の結果に關して若干の批判的指示をなすであらう。

ベルンシュタイン氏は言つてゐる、「マルクス主義の基礎の最重要なる要素（即ち、マルクス主義の基礎をなす最重要なる要素、エル・カンツェリは同志ベルンシュタインの著書を非常に悪く翻譯してゐる——デー・ペー）全體系を貫徹してゐるその基本的法則とも言ふべきは、史的唯物論なる名稱をもつて呼ばれるその特殊の歴史理論である。」これは正しくない。歴史の唯物論的説明は、確かに、マルクス主義の最も主要なる特殊の特徴の一つではある。しかしこの説明は矢張りマルクス——エンゲルスの唯物論的世界觀の一部をなすに過ぎぬ。彼等の體系の批判的究明はそれゆゑこの世界觀の一般哲學的根據の批判から始められなければならぬ。しかるに方法は疑ひもなく凡ゆる哲學體系の精髓をなす故に、マルクス及びエンゲルスの辯證法的方法の批判は、自然彼等の歴史理論の『究明』に先行しなければならぬ。

マルクス主義の『基本的法則』に對する自己の誤れる見解に忠實なベルンシュタイン氏は唯物史觀の批判から始め、唯だ自己の書物の第二章に於て辯證法的方法の評價に移つてゐる。我々は、反對に

各々の嚴肅なる體系に於ける方法の決定的意義に對する自己の見解に忠實にとゞまるであらう、そして辯證法から始めるであらう。

何をそれについてベルンシュタイン氏は言つてゐるか？

彼はそれに若干の價値を認めることを辭せない。それどころではない。彼はそれが歴史科學に有益な影響を及ぼした事を認めてゐる。彼の言葉によればエフ・ア・ラングが自己の『労働問題』に於て、その基本的命題——對立による發展と彼等の融和——を有てるヘーゲルの歴史哲學は、殆ど人類學的發見であるといひうると言つたのは全く正當であつた（三九頁）。しかし彼は、——その同じラングと共に、——『個人の生活に於けると同様、歴史に於ても亦、對立による發展は思辨的構成に於ける如くしかく容易にまた極端に、しかく精確にまた均齊的に行はれぬ』と考へてゐる（同頁）。マルクス及びエンゲルスはそれを悟らなかつた、そしてそれ故に辯證法は彼等の社會政策的見解に悪き影響を及ぼしたのである。成程、科學的社會主義の創始者たちは思辨的構成を好まなかつた。確信的なる唯物論者として、彼等はヘーゲルにあつて『頭で』立つてゐたところの、即ち逆立ちせる、『辯證法を顛倒すべく』努力した。しかしベルンシュタイン氏は、かゝる課題はしかく容易には解決しうるものでないと考へてゐる。「常に現實に見られるやうに、經驗的に確立された事實の地盤を棄て、それに無關係に思想し始める時にのみ、我々は派生的概念の世界に落ち込むのである、若しも我々がかゝる場合ヘーゲルによつて確立された辯證法的方法に従ふならば、我々は、それに氣が付く前に、再



び「概念の自己發展」の搾木にかけられるであらう。こゝにヘーゲルの矛盾の論理にとつての大なる科學的危險性がある（即ち、こゝに——矛盾の論理の危險性がある、繰返して言ふが、カンツエリはベルンシュタイン氏を悪く翻譯した）（三七頁）。この危險に氣付かなかつた所からしてマルクス及びエンゲルスはそれから免れることが出来ず、それ故にまた一度ならず自分自身の方法によつて混乱の中に引入られたのである。現に、譬へば、「共産黨宣言」に於て彼等は、ドイツに於けるブルジョア革命は労働者革命の直接的な序曲として役立つことが出来るといふ思想を發表した。この豫想（「役立つことが出来る」）は誤れるものであつた、一八四八年のブルジョア革命は労働者革命の直接的な序曲とはならなかつた。何故にマルクス及びエンゲルスは誤つたか？ 何となれば辯證法に依據したが故である。少くともさうベルンシュタイン氏は言つてゐたのである。尙ほ他の例、若しも一八八五年にマルクスの小冊子（*Enthüllungen über den Kommunistenprozess*）（「共産黨事件の闡明」）の改版に際して、また一八八七年に、自己の小冊子（*Zur Wohnungsfrage*）（「住宅問題に關して」）に於てエンゲルスが、ベルンシュタイン氏の意見によれば、數年後に起つたドイツ社會民主黨内の「青年派」の有名な暴動に對する彼の鋭い否定的な態度に一致し難い思想を發表したとすれば、それもまた辯證法のせいである。諸君は信じられないか？ 自分で御覽になるがよい、「エンゲルスの性格にかくも相應しからぬこの曖昧さは、要するにヘーゲルから借りに來られた辯證法に基づくものである」（四四頁）。この句の中には、遺憾ながら、「曖昧さ」の痕跡すらもない。そして若しも、それを信じた後

に、諸君がベルンシュタイン氏に向つて、しかしそれならば何故に辯證法は曖昧さに傾くのであるかと訊くならば、次の如き説明を諸君は彼から受取るであらう、「然り——然り、否——否」の代りに（その然り——否、否——然り）、その對立物の相互轉移と量の質への轉化、及びその他の辯證法的美は常に承認されたる變化の意義についての明確な表象を妨げて來たとすれば、

若しも「辯證法的美」が常に現實の中に行はれた變化に關する明確な表象を妨げて來たとすれば、辯證法的方法は自己の本質そのものに於て誤れるものであること、従つて眞理を尊重しつゝ自然と社會生活との正しき理解に突進しつゝあるすべての者は斷然それを拒否しなければならぬことは明かである。この際、無解決のままに残るのは唯だ如何にして甚だ美しからざる辯證法的美がヘーゲルをして彼の歴史哲學に於て、ベルンシュタイン氏がランゲに續いて「殆ど人類學的發見」と認めてゐるところのものにまで導くことが出来たかといふ問題である。ベルンシュタイン氏が獅嚙みついてゐる「殆ど」なる言葉はこの場合何事をも説明しない、それは概念のない時言葉が間に合ふといふ古い眞理の新しい確證として役立つのみである。尤もこの「曖昧さ」はベルンシュタイン氏に、若しも彼が少しでも「辯證法的美」の害惡に關する自己の意見の正しさを證明しようと努めてゐるのであつたら、贈呈することが出来たかも知れぬ。しかし證明については彼は一言もいつてゐないのである。然り彼はどこからもそれを引き出して來ることは出来ない、彼は自分でも曾てヘーゲルを研究したことがあるなどは言へないでゐるではないか。が若しも彼が強いてそれを斷言しようとするな

ら、彼が……混亂してゐるのを示すのは非常に容易であらう。それ故にこそベルンシュタイン氏は自己の意見を證明しようと企てさへもしてゐないのである。彼は單にそれを、嘗に彼の言葉を信するばかりでなく、尙ほ彼の深遠な思想に驚嘆する無邪氣な讀者が常に見出されるであらうといふことを極めて確信的に考慮に入れて、言つてゐるのである。

## 二

Habent sua fata libelli (書物はそれ自からの運命をもつ)とローマ人は言つた。著述家も亦、時として非常に不思議な運命を有つ。ヘーゲルを例にとらう。今や彼の哲學を研究する骨折りをした人々が如何に少くないことか、しかもそれと同時にそれについて見當違ひの判断を敢へてしてゐる『批判者たち』が如何に多いことか！そしてそれらの輕率な人々は、若しも誰かベルンシュタイン氏の書物を、讀まずして、批難しようとしたならば、どんなに憤慨するであらう。どこからこの場合二つの尺度は來るのか？ 何故に偉大なるヘーゲルに關しては、誰もが小さなベルンシュタイン氏に關しては許し難いと言ふかゝる輕率が許されるのであるか？ That is the question (それが問題である)。若しもベルンシュタイン氏が、かくも幼稚にまたかくも不器用に判断してゐる對象を知つてゐるならば、彼は、勿論、自分でも辯證法に關する自己の意見が羞づかしくなるであらう。彼は、辯證法の『然り——否、否——然り』が、現實に對する冷靜な態度を妨げて、我々を『概念の自己發展』に引

渡すと考へてゐる。しかしこの罪を犯してゐるのは正にその方法がベルンシュタイン氏において『然り——然り、否——否』なる定式によつて特徴づけられてゐるところのその形而上學的思惟なのである。

ヘーゲルは言つてゐる、『青年には抽象に走ることが固有である、それに反して經驗を有する人間は、抽象的な『或は——或は』に熱中することなく、具體的な地盤に依據する。』これらの簡單な言葉をもつて、一方、辯證法と、他方、ベルンシュタイン氏の愛する『然り——然り、否——否』の定式による思惟との差異を充分満足に特徴づけることが出来る。

この最後の定式こそは、それへの執着が、ヘーゲルの意見によれば、青年に固有であるところの、『抽象的な或は——或は』ではないか。が『抽象的な或は——或は』が長く社會生活及び自然科学に於てさへも諸問題の正しい提起を妨害してゐたこと、それは今やすべての者が知るところである。我がロシアに於ては、故人のエヌ・ゲ・チエルヌイシエフスキイが極めて通俗的に、また極めて巧妙に研究對象に對する辯證法的態度の特性を闡明した。辯證法の見地からすれば、『決定判断は唯だ一定の事實についてのみ、それが依存するところのすべての事情を考察した上で、下すことが出来る……』譬へば、雨は有益であるかそれとも有害であるか？ これは——抽象的な問題である、決定的にそれに答へることは不可能である、時として雨は利益を齎らす、時としてそれは、稀にはあるが、害惡を齎らす、具體的にかう訊かなくてはならない、麥蒔きが終つた後、五時間ぶつ續けに強い雨が降つた

——それは麥の爲めに有益であつたか？ その時初めて決定的にかう答へることが出来る、然り、それは有益であつた、と。かゝる見地から、——チエルヌイシエフスキイの全く正當な説明によれば、——ヘーゲルの辯證哲學は社會現象をも觀察してゐるのである。戦争は災害であるかそれとも福祉であるか？ 「一般にこれに對して決定的に答へることは出来ない。如何なる戦争を問題にしてゐるかを知らねばならぬ……マラトンの會戦は人類史上に於ける最も有益な事件であつた。」しかしかゝる見地から現象を觀察することは、正に彼等の研究を具體的な地盤の上に置くことを意味する。それ故にこそ辯證哲學は、チエルヌイシエフスキイの言葉によれば、「それによつて所與の現象が生起したところの諸原因を考察せずして、善惡を判斷せる以前の一般的な文句、これらの一般的抽象的言説を不満足なるものと認めたのである。抽象的な真理は存在しない、真理は常に具體的である。」

ちよつと見ると、これはそれだけで明かであるやうに思はれる、しかしそれは唯だ、——意識的に、或は無意識的に、——辯證法的見地に立つた者、従つて「抽象的な或は——或は」(別言すれば——定式、「然り、然り、否、否」)を最重要なる思维方法と考へてゐない者にのみ明かなのである。譬へば伯爵エル・エヌ・トルストイに訊いて御覽なさい、我々によつて引用されたチエルヌイシエフスキイの戦争に關する意見は正しいか？ 彼は諸君に答へるであらう、それは全く正しくない、何となれば戦争は惡であるから、が惡は決して善であることが出来ないから、と。トルストイ伯はすべての問題を「抽象的な或は——或は」の見地から判斷してゐる、それはまた彼の結論から多少嚴肅な意義を奪つ

てゐる。思想家として、彼はまつたく辯證法に無縁である、またこれによつて、なかんづく、彼のマルクス主義嫌ひが説明される。残念なことには、チエルヌイシエフスキイ自身も屢々、「真理は常に具體的である」ことを忘却した。自己の經濟學に於て彼自身屢々、「抽象的な或は——或は」に傾いてゐる。しかしこの争ふべからざる事實は我々にとつては今のところ興味がない。こゝで我々に重要なことは、チエルヌイシエフスキイが(自己の『ロシア文學のゴッゴリ時代概説』に於て)辯證法的見解と抽象的判斷との非共在性を如何によく理解し、また如何に簡單明瞭に説明したかを讀者に思ひ起させることである。

無政府主義者たちは社會民主黨員に訊ねる、諸君は個性の自由を認めるか？——認める、とマルクス主義者は答へる、しかし條件的に認める、何となれば一人の人間の無條件的自由は彼を圍繞するすべての者の無條件的隷従を意味するからである、即ち自由をそれ自からの對立物へ轉化せしめるからである。かゝる返答は無政府主義者に氣に入らない、彼等は恐らく、マルクス主義者を自由の敵と考へ、自分の側から、無制限的な、即ち無條件的な個性の自由を宣言するであらう。自由のそれ自からの對立物への轉化は彼等の眼には單なる詭辯として、或は、——思ふに、彼等の中の誰か々今日ベルンシュタイン氏の用語に通じたならば、表現するであらうやうに、——ヘーゲルの辯證法的美の一として、現れる。自由についての無政府主義的教義は骨の髄まで「抽象的な或は——或は」(或は自由或は專制)の精神に滲み込まれてゐる、それは全然ベルンシュタイン氏の愛する定式「然り、然り

否、否」の上に打立てられてゐる、それに反して社會民主黨員は自由の問題を具體的見地から觀察する。彼等は抽象的な眞理は存在しないこと、眞理は具體的であることを知つてゐる。この意味に於て彼等は辯證法の精神に貫かれてゐる。

勿論、ベルンシュタイン氏自身は好んで自由についての無政府主義的教義を批難して、抽象的眞理のあり得ないことに同意する。そして彼がこの意味に於て立言する限り、その限りに於ては彼自身辯證法の見地に移つてゐる。しかし彼はそれを無意識的に爲してゐる、その結果彼を征服してゐる概念の混亂から脱けられないのである。モリエールのジュルダン氏は散文的な言葉の存在を夢にも知らないでも、相當の散文で語ることが出来た。しかし辯證法的方法の無意識的使用のみをなし得る人々が辯證法について議論をなす場合、彼等はそれについて愚劣以外の何物をも語り得ない。

具體的眞理の探求は辯證法的思惟の特徴をなす。チエルメイシエフスキイは、ヘーゲル以來「現實を説明することが哲學的思惟の本質的義務となつた」と言ひ、また「こゝからして以前には最も無遠慮にそれを自分自身の一面的な偏見に都合のいゝやうに歪曲して、録に考へもしなかつたところの現實に對する至大の關心が現はれたのである」と言つて、その同じ思想を表現してゐる。

若しもさうであるならば、——がそれは實際さうなのであるが、——空想から科學への社會主義の發展に於ける辯證法の役割を理解することは困難でなす。

十八世紀のフランス啓蒙學者は社會生活を善と惡、理性と愚昧との抽象的對立の見地から觀察した

彼等は絶えず「抽象に走つた。」彼等がその中に最大の無意味を見たところの、それが社會關係の一種獨特なる理性的體制であり得た時代があつたことをいつか容認することを肯じなかつたところの、封建制度に對する彼等の態度を想起すれば充分である。空想的社會主義者に於ては時として十八世紀の抽象的思惟に對する強烈な不満が認められる。彼等の中の或者は、歴史についての自己の判斷に於て、辯證法の見地に立つ爲めに、時として抽象的な定式「然り、然り、否、否」を棄てゝゐる。しかしそれは彼等にあつては唯だ時として過ぎない。彼等の大多數は最も多くの場合に於て、社會生活に關する自分達の議論に於て、「抽象的な或は——或は」に満足することを續けてゐた。この「或は——或は」の精神によつてすべての彼等の體系は滲み込まされ、また正にこの「或は——或は」が彼等の體系に空想的性質を附與してゐるのである。空想から科學になる爲めに、社會主義は必然的にこの思惟方法を克服して辯證法的方法にまで發展しなければならなかつた。マルクス及びエンゲルスはこの必然的な變革を社會主義に於て爲し遂げたのである。しかし彼等がそれを爲し得たのは、彼等が豫めヘーゲル哲學の學派を通過したが故のみである。彼等自身も喜んで彼等が非常に多くのものを辯證法的方法に負うてゐることを認めた。しかしベルンシュタイン氏にはそれがさうでなく、それが好都合である。彼は我々に社會主義の空想から科學への轉化は辯證法に抗してであつて、それのお蔭ではなく、行はれたと説明してゐる。これは、勿論、甚だ決定的である、しかし曾てエル・チホミイロフ氏によつて彼の小冊子「何故に私は革命家たることをやめたか」の中に語られたところ

の、——ロシア文學は獨裁のお蔭によつてであつてそれに抗してではなく、發達した、といふ有名な思想と同程度に非論證的である。

ベルンシュタイン氏はヘーゲル及び彼の學徒が嚴密に規定された諸概念を、形而上學として、輕視したといふことを固く信じてゐる。讀者はすでにチエルヌイシエフスキイの言葉から、如何に慎重な態度を現實に對してヘーゲルの辯證哲學が要求したかを知つてゐる。しかし現實に對する慎重な態度は嚴密に規定された概念なくしては不可能である。それゆゑベルンシュタイン氏はこの場合にも偉大なる思想家を理解しなかつたと豫想しなければならぬ。その通りでもあるのだ。そして、それを信する爲めには、ヘーゲルの大「エンサイクロペヂア」の第八十項を通讀すれば（そして、勿論、理解すれば）充分である、それはかう説いてゐる、

項。

「悟性の活動としての思惟は、相互に排斥し合ふ堅固な定義に依據する。これらの制限されたる抽象は彼には鞏固に存在してゐるものと思はれる。」

項への補遺。

「悟性的思惟には何よりも先づ正當な價値を認めなければならぬ、そしてそれと全く同様に、悟性的思惟なくしては理論の領域に於ても、實踐の領域に於ても、如何なる堅牢なまた決定的なものにも來たり得ないといふことに成立つ彼の功績を認めることが必要である。認識は對象が彼等の一定の差別に於て把握されることから始まる。かくて、譬へば、自然の研究に際しては個別的な物體、勢力、種類等々が區別され、そしてこの自己の孤立性の中に固着させられる。科學の今後の進歩は悟性的見地から、すべての殘餘のものから完き深淵をもつて區別されたものとして悟性が固着させてゐるこれらの現象の各々を、他の現象への推移の過程に於て、發生と死滅の過程に於て研究する理性の見地への推移の中に求められる。」

言葉の背後にそれに結付けられた概念を見うる者は、ヘーゲルの今日では不思議な用語に當惑することなく、彼によつて指示された研究の道が正にそれに従つて現代の科學、——譬へば、自然科學、——が最も輝かしい自己の理論的獲得に到達したところのその道であることに同意するであらう。

ヘーゲルは悟性の權利を（従つてまた、精確に規定された概念をも）無視してゐないばかりでなく、精力的にその權利を、「悟性的なること」からは極めて遠いやうに思はれる如き領域に於てさへも、即ち哲學に於て、宗教に於て、藝術に於て、主張してゐる。彼は凡ゆる成功的な劇作は一系列の精確に規定された性格を前提するといふことについて精妙な意見を述べてゐる。が哲學に關して言へば、それは、彼の言葉によれば、何よりも先づ思想の精確さ (Präzision) を要求する！

註1 G. W. F. Hegels Werke. Bd. IV, SS. 150-151.

しかしベルンシュタイン氏はヘーゲル哲學の眞の性質と何の係りがあるか？ 彼は、一般的には『エンサイクロペディア』と、また部分的には——その任意の頂と何の係りがあるか？ 彼は彼のところには常に彼の誤謬を發見する場合にすらも拍手するところの讀者が見出されることをよく知つてゐる。彼はマルクスを「批判してゐる」！ 彼はマルクス主義的『獨斷』を破壊しようとする企圖してゐる、今日巨大なる名聲を獲得する爲めには全くそれだけで充分である。勿論、批判しつゝあるものを研究することを妨げない。しかしそれ無しにでも済ますことが出来る……

ベルンシュタイン氏は自己の常識に望みを懸けてゐる、しかし常識は自己の職能の限界を越えない時にのみ信頼するに足る同伴者である。ベルンシュタイン氏がどの點まで言及したかは、我々によつていま吟味されつゝある著書にはないが、既に著書の出版後に『ノイヒットNeue Zeit』に掲載された彼の論文の一つに含まれてゐる次の如き彼の考察が示してゐる。

エル・フォイエエルバッハに關する自己の有名な著述に於てエンゲルスは、辯證法の眼には世界は過程の總括として現はれ、その中であつては物及びその觀念的形象、即ち概念は不動に止まらずに、不斷の變化の中に存すると言つてゐる。原則的（prinzipiell）にはベルンシュタイン氏も「勿論、」

この命題を正しいものと考へてゐる。しかし彼は、如何なる範圍に於てそれが自己の合法性を保持するか、また如何に不斷の變化なる言葉を解すべきかを知らないのである。彼の意見に従へば、あらゆる與へられた人間の有機體が蒙るところの變化も、畢竟その中から全然異なる種類の存在を作り出すことは出来ない。かゝる深遠な思想にはサンチヨ・パンサ自身も羨望を禁じえないであらう。しかし果してベルンシュタイン氏は、ヘーゲル及びヘーゲル學徒が一瞬間と雖もこの深遠な、古いそして尊敬すべき眞理を見通がすことが出来たと考へてゐるのであるか？ まるでベルンシュタイン氏流の「批判者」の出現をでも豫想したもののやうに、ヘーゲルは自己の聽講者たちの注意をば、凡ゆる與へられた現象の發展は、その中に可能性（an sich）として包含されてゐるものゝみを現實的なものにすることが出来るといふ點に促した。その例として彼は植物を指して、植物は變化するが、しかし自己の胚種の性質に相應して變化するのであつて、「單なる、何物にも相應せざる變化の中に消え去るのではない」と言つた。このことの後でベルンシュタイン氏の深遠な意見が必要となるかどうかを判断せよ。

註1 《Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie》 Erster Theil, Hegels Werke, Bd. III, S. 34-35.

ペルンシュタイン氏は、マルクスは歴史運動の進展の速度を誇張して考へたと断言してゐる。このことは資本主義社會の發展に對するマルクスの見解に適用されるとき正當である。しかし何故にマルクスはかゝる誇張に傾いたか？ ペルンシュタイン氏はこゝでも辯證法を罪してゐる。そしてまた辯證法の影響のこの方面が彼には最も有害なそして最も危険なものと思はれてゐる。正にそれがペルンシュタインをも「辯證法的美」から後退りさせてゐるのである。しかし、残念なことには、それも彼の想像の中に存在するに過ぎない。

ヘーゲルによれば、否定の論理的過程は時間を超越して行はれる。しかるに自然の一現象の他によつての、又は一社會組織の他によつての否定の現實的な過程は、自己の進展の速度において、自分自身の本性により、及びその中であつてそれが行はれるところの具體的諸條件によつて規定される。デューリングとの自己の論争に於て及び「エル・フオイエルバッハ」なる著述に於て、エンゲルスは宇宙の發展を、辯證法的過程として、指示してゐる。彼自身の言葉によれば、極めて長期に亘る年代を要したところのこの過程の速度を彼は誇張したか？ 我々はさう思はない。しかし假令かゝる過誤が彼に萬一起つたとしても、その場合彼において罪しうるのは全く辯證法ではなくして、何等か他の事情自然科學的知識の不足か、對象に對する不注意なる態度か、或はまた何か類似のことであるであらう。

かゝる過程の速度に關する彼の判断への辯證法の影響はこの場合、譬へば、支那の皇后の顔色が彼に及ぼす影響と全く同様に取りに足らぬものであつたであらう。

こんどは歴史の領域から、他の例をとらう。自己の『Misère de la Philosophie』『哲學の貧困』に於てマルクスは、自己の辯證法的方法をブルードンの抽象的思惟に對立させながら、『ドイツに於て最初の分業——都市の農村からの分離が確立される爲めには三世紀を必要とした』と言つてゐる。この場合歴史的發展行程の速度は誇張されてゐるか？ こゝにも如何なる誇張もないやうに思はれる。若しもそれがあつたとしても、辯證法はこゝでは全然、まつたく無關係である。

第三の例、それは我々に同時代の社會生活に關係する。ラッサールは、周知の如く、辯證法的方法の決定的な味方であつた。しかしこの辯證法的方法の斷然たる味方は、『土地所有及び資本家的所有』(des Grund und Kapitaleigentums)の漸次的な廢除のためには一〇〇乃至二〇〇年を要すると考へた。ペルンシュタイン氏の今日の氣持から判断すれば、この期間も彼には短か過ぎるであらうことを期待することが出来る。多分、ペルンシュタイン氏はいま、ロッドベルツと同様に、上述の廢除のためには五〇〇年以上を要すると考へてゐるのもあらう。それは彼の勝手である。しかしマルクスは、確かに、ラッサールは社會の根本的な再建のために必要以上の時間を要求してゐると言ふであらう。結果は、辯證法的方法の重要性を認める點に於て完全に一致したヘーゲル學徒が、彼等に同時代の社會發展の速度を非常に異つて評價しえたといふことになる。がこのことから、若しも或る何

びとかの辯證法の支持者が事實に於てこの速度を誇張したとしても、それは決して辯證法の影響によつてではなく、何等か他のことによつて説明しなければならぬといふことが出て来る。

ベルンシュタイン氏は言つてゐる、「我々は何を我々が考へてゐるかを知つてゐる、また我々は同様に充分に、如何に我々が考へてゐるかも知つてゐる。しかし我々は決して、我々が考へるといふことがどうして起るか、如何にして外的な印象から、神経の亢奮から、又は我々の脳細胞の状態の變化及び交互作用から意識が発生するかを知らないであらう。」

我々は決して、如何にして我々の意識が発生するかを知らないであらう、といふことは正しい。しかし問題は全くそこにあるのではなくして、この我々の不可知が唯物論に對する反駁として役立ち得るかどうかにあるのである。エフ・ア・ランゲ流の『批判的』思想家、及びデュボア・ライモンの如き生理學者さへも、然り——と考へた。これらの行句の筆者は——否と考へる。我々はこれをベルンシュタイン氏に對する駁論に於てラメットリーの著述からの拔萃によつて證明した。ベルンシュタイン氏はこの論文の故に我々に對して非常に腹を立ててゐる、しかし、——讀者が直ぐにそれを信じうるであらうやうに、——彼は全然我々の反駁を理解しなかつたのである。

『これを説明しようとして企てたのである、——とベルンシュタイン氏は續けてゐる、——意識能力の或る分前を、モナドの教義の意味に於ける靈活性の分前をこれに歸せしめることによつて。』

實際、——企てたのである。企てた人々の中には、我々が自己の論文に於て指摘した如く、唯物論

者ラメットリーもあつた、彼の教義をライプニッツのモナドの教義と比較することはそれにしても非常に危険なことではあるが。ベルンシュタイン氏は本來ラメットリーについては何事も言つてゐない、しかし彼は一般に『これ（彼によつて上に指摘された説明の企圖）は——我々の思惟方法及び完璧な世界觀に對する欲求が我々をそれに驅り立てる所の思考法、豫想である』と考へてゐる。

諸君は理解するか？ 若しも——然りであるならば、我々は心から諸君を祝福する、何となれば諸君はこれらの行句の筆者は勿論のこと、何を言つてゐるのか明かに解つてゐないベルンシュタイン氏自身よりも幸福であるからである。これは豫想以上ではない。成程、その通りである！ ベルンシュタイン氏は唯物論と絶縁しようと思ひ立つた時初めてこのことに氣が付いたのである、しかし事を理解した人々は誰も『これ』を何等か他のものであると言つた者はなかつた。

しかし『これ』は——單なる豫想であるといふことから何が生じなければならぬか？ 唯物論は無力であるといふことであるか？ こゝに一切の問題があるのである。しかるにこの問題に對してはベルンシュタイン氏の以前の『批判的演習』に於ても、我々によつて吟味されつゝある著書に於ても回答の一「原子」をさへも見出しえないのである。

先きへ進まう、『私がこの事情を指摘して、そして純粹唯物論は結局において觀念論に歸着すると述べた論文は、ブレハーフ氏に (Neue Zeit) (四四號、一六年、第二卷) に於て、一般に私の無智及び特にエンゲルスの哲學的見解に對する理解の完全なる缺除を非難しつゝ、私を攻撃するよき動



機を興へた。私は最早ブレハーノフ氏が勝手に私の言葉を、私が全然觸れなかつたところの對象に振ぢ曲げたことについては言はないことにする。——私は唯だ彼の全論文が、恰もエンゲルスがブレハーノフ氏の質問に對して次ぎの如く答へたといふ宣言に盡きてゐることを語るに止める、『それでは貴方はスピノーザ老人が、念ひ及び廣がりとは同一本體の二屬性以外の何物でもないと言つた時、正しかつたと考へてゐるのですか？——曰く、『勿論、スピノーザ老人は全然正しかつたのである。』

これらの行句の筆者は、實際、エンゲルスの（従つてまたマルクスの）哲學を、彼との最も近親な關係に於て數年を送つたところのベルンシュタイン氏が如何に悪しく理解したかを見て、非常に驚いたのである。ベルンシュタイン氏の『カントに還れ』の呼びかけに對する答へとしては我々は彼に哲學の研究に戻るべきこと（Zurück ins Studierzimmer）を請うた。我々はベルンシュタイン氏を攻撃する動機を探さなかつた。若しも我々の驚きが或種の鋭さをもつて表現されたとすれば、それはベルンシュタイン氏に對する我々の以前の關係によつて説明される。彼は常に我々には制限された人間であると思はれてゐたが（このことは我々の最も近い同意見者の多數が説明しうるところであるが）、しかし我々は矢張り彼をマルクス學派に所屬するものとして考へてゐた、だから當時彼が唯物論について書いたところの眞に子供らしい愚劣さに非常に驚かされたのである。當時我々の痛烈な批判は或種の讀者には不當であるやうに見えたかも知れない。今日は恐らく何人も、全然知識を喪失してゐない限り、我々を誇張したと言つて責める者はないであらう。今やベルンシュタイン氏の哲學上の無智は

最も明瞭に現はれた、で今や我々は彼に教科書に戻るやうに勧めることをさへしないであらう、我々は教科書が彼の爲めに書かれてゐないのを見る。

純粹唯物論は、結局において、觀念論に歸着する！ しかしかゝる場合にはフイヒテ及びヘーゲルの哲學は「結局において」ラメットリー若しくはホルバツハの哲學に歸着する！ これを是認しうるのは唯だ、唯物論も、觀念論も、ホルバツハも、ラメットリーも、ヘーゲルも、フイヒテも理解しない者のみであらう。觀念論は疑ひもなく、唯物論との一つの共通の表徴を有つてゐる、即ち現象の「元的説明に向つての努力である。しかしこの努力の結果として唯物論に實現されてゐるところその方法は、觀念論に於けるその實現の方法と對蹠的に對立的である、そしてそれ故に「結局において」唯物論は觀念論に激しく背馳するのである。

「カントに還れ」と呼びかける以上、ベルンシュタイン氏は唯物論が進んでゐる道がそのいつれの意味に於ても正しくないことを示すべきであつた。それをしないで彼は唯物論の觀念論への「歸着」をしてそれは何といふ不器用な、幼稚な歸着！ に止めてしまつた。批判の驚くべき力強さと深刻さであることよ！

こんどはスピノーザについて。エル・カンツエリはベルンシュタイン氏の著書のこの部分を劣惡に翻譯した。ベルンシュタイン氏に言つてゐる、彼の『カントへの復歸』（それを彼は彼の同意見者スツルーウエ氏さへも認めてゐることを決して知らなかつたしまた知らないのであるが）を機縁として

書かれた我々の全論文は、彼によつて引用されたエンゲルスとの我々の談話に歸着する、と。これは嘘である。

哲學の領域に於てベルンシュタイン氏よりも遙かに學識あるドイツの同志の一人が、*「Zur Neue Zeit」*に於て、自然科学的唯物論は批判に堪へない、また遙かに有力であるスピノーザの哲學的教義に結付けることが遙かに容易なマルクス——エンゲルスの理論を彼に結付けることは無駄であるといふ意見を發表した。ベルンシュタイン氏が、なかんづく、この同志の論文に依據したが故に、我々はそれにも答へることを必然と考へたのである。我々はマルクス及びエンゲルスが決して、スピノーザ主義者の同志が自然科学的と呼んでゐるところの唯物論には、即ちフイヒテ及びモレシヨットの唯物論には依據しなかつたことを述べた。更に進んで、ラメットリー及びデイデローの著述に基づき、我々は十八世紀のフランス唯物論が本質に於て變形されたスピノーザ主義以上でなかつたことを述べた。同じことを我々はフ、オ、イ、エ、ル、バ、ツ、ハに關しても述べた。その後で初めて、科學的社會主義の創始者であるマルクス及びエンゲルスに移つて、我々は——彼等の哲學的見解とフ、オ、イ、エ、ル、バ、ツ、ハの見解との血縁關係を指摘した後に、——彼等の唯物論もスピノーザ主義の一種であるといふ自己の確信を陳述したのである。そして、最後に、——この確信の根據の一つとして、——我々はエンゲルスとの自己の談話の一節を引證したのである。ベルンシュタイン氏はこの談話の傳達に我々の論文全體が歸着するといふのである。これらの彼の言葉は何に歸せらるべきであるか、正義觀の缺乏にかそれとも理解の薄

弱にか？

『スピノーザがこれらの二屬性を歸せしめてゐるところの本體は、——とベルンシュタイン氏は續ける、——神である。いづれにしても、スピノーザは神と自然とを同一視してゐる、これによつて既に非常に以前からスピノーザが神の否定者と考へられ、彼の哲學が無神論として非難されて來たのである、形式的にはそれは汎神論として現はれてゐるに拘らず……スピノーザは純粹に直觀的方法によつて上述の及びその他の屬性を有する無限の本體、『神』の概念に到達した、彼にとつて合法的思惟と存在とは同一である。この意味に於て彼は或種の唯物論者に似てゐる、しかし彼を哲學的唯物論の代表者と呼ぶことは言葉の自分勝手な解釋であるだらう……若しも唯物論なる言葉の下に一般に一定の何かを理解しなければならぬとすれば、それは唯だ最後にして唯一の事物の基礎である物質についての教義のみであるであらう。しかしスピノーザは明かに自己の本體、『神』を非物質的と呼んでゐる……何人も、勿論、スピノーザの追隨者となることは勝手である、唯だその時彼は最早唯物論者ではないであらう。』

これがベルンシュタイン氏が我々の歴史的調査報告に對して答へたところの全部である。それは僅少である。しかしながら、この僅少のものに或る意味に於てラテン語の表現 *non multa, sed multum*. (澤山のものよりも、何か大事なもの) が適用され得る。

スピノーザは、彼にとつて合法的思惟と存在とは同一であるといふ意味に於て、或種の唯物論者に

似てゐる。よろしい。では、存在と思惟との同一性を承認してゐる唯物論者が存在するのであるか？といふことになる。しかしこれは完全な出鱈目である、そして若しもベルンシュタイン氏が、本來存在と思惟の同一性なる言葉が何を意味するかを理解するならば、彼は、勿論、決してこの同一性を如何なる唯物論者のところに於ても発見し得ないであらう。彼はその時、存在と思惟の同一性の承認が唯だ觀念論に於てのみ可能であることを見出すであらう。そしてその時、——それは對象の理解の新しいそしてまた同様に極めて小さくない利益であるが、——彼は純粹唯物論は結局において觀念論に歸着するとは言はなかつたであらう。しかし彼は言つてゐることを理解してゐないのである、そしてそれ故に彼は、敬愛する公衆の面前で「頭や鼻やその他の身體の部分を切斷すること」を賞演しようとして約束した「魔術師」(ゲ・イ・ウス・ペンスキイの小説『貧苦は歌ふ』)の文學語の使用に於て不器用で無茶であつたのと同様に哲學上の用語の使用に於て不器用で無茶なのである。

若しもスピノーザが存在と思惟の同一性を認めたとしたならば、彼は、「純粹」觀念論者であり、即ち正に彼が非ざりしところのものであつたであらう。彼の唯一の本體は——同時に物質的でもあれば精神的でもあるのだ。ベルンシュタイン氏の言葉によれば、スピノーザはそれを非物質的なるものと「明かに呼んでゐる。」非常によく彼はスピノーザを理解したものである！ヘーゲルを理解したのと殆ど同様に！

註1 《Die Ethik von Spinoza》, neu übersetzt von J. Stern, II Th. SS. 77 und 80 を参照せよ。

すべてこれらのベルンシュタイン氏の誤謬はかゝる程度にまで明瞭であり、またかゝる程度にまで許し難いものである、それらは哲學の領域に於けるベルンシュタイン氏の完全なまた決定的な無智を證明するものであつて、結果は讀者の側に、果してそれに立停まる價值があるであらうかといふ問題が起りうるほどである。しかし一瞬間と雖もかゝる問題に對して否定的な回答に傾くなら、誤謬を犯すことになるであらう。

#### 四

ベルンシュタイン氏の退却によつて喜ばされたブルジョアジイは今や大いにこの「批判者」を稱揚してゐる、彼等は彼の「批判的」勝利について聲高く喇叭を吹き、彼の議論の細心な研究は我々の時代の特徴づけの爲めに多くの最も興味ある心理學的「證據」を提供するであらうと吹き立てゝゐる。その上、ベルンシュタイン氏の唯物論からの脱退とその「カントへの復歸」欲求とは決して哲學的頭腦の單なる誤謬ではない(若しもベルンシュタイン氏の哲學的頭腦について語ることが出来るとするれば)、否、それらは彼の最近の社會政策的傾向の自然的な不可避的なかつ明確な表現として現はれたのである。これらの傾向はブルジョアジイの前衛的層との接近なる言葉で表現され得る。『ブルジョアジ

—と呼ばれるところのものは、—と彼は言つてゐる、—極めて種々な利害を有する種々な層より成る複雑な階級である。これらの層は彼等が利害を等しくしてゐる間、若しくは彼等が一樣に脅威を感じてゐる間は一緒になつてゐる。與へられた場合に於て、問題は勿論、唯だ最後のもの、即ちブルジョアジーが、そのすべての要素にとつて一樣に社會民主黨が—一つには彼等の物質的利害、二つには彼等のイデオロギー的利害、即ち彼等の宗教、愛國主義、暴力的革命の慘害から國を守らうとする彼等の希望にとつて、—脅威的であるといふことの故に、同種の反動的大衆を形成してゐることにのみ懸かる』(二四八—二四九頁)。この小さな抜萃はベルンシュタイン氏によつて企圖されたマルクス主義の再吟味の心理の理解に鍵を與へる。ブルジョアジーのイデオロギー的利害、—何よりも先づその宗教、—を『脅威しない』爲めに、ベルンシュタイン氏は『批判』哲學の見地に『立戻つた』のである。ブルジョア『愛國主義』を『脅威』しない爲めに、彼はマルクスの謂ゆるプロレタリアートは祖國をもたない、といふ命題を反駁し、實現の政治家の學派に屬する眞の『爲政者』の調子をもつてドイツの外交政策について論議し始めたのである、最後に、ブルジョアジーのその他の偏見に觸れない爲めに彼は『Zusammenbruchstheorie』(『崩壊理論』)(それは序でに言ふが、彼自身が一部分は彼によつて悪く理解され、一部分は歪められたマルクス及びエンゲルスの言葉から捏ね上げたものなのであるが)に敵對して、『階級××はより低い文化の徴候であり、……退歩、政治的隔世遺傳として現はれる』ことを證明しようとしたのである。ベルンシュタイン氏を理解しようとする者は無智

と概念の混亂以外に何物もない彼の理論的歸結にも増して、一切の彼の理論的歸結と過誤がよつて以て説明されるところの彼の實踐的努力を明かにすることが必要である。人によつて、その哲學も定まる、—と正當にもフイヒテが言つてゐる。

註1 自己の著書に於て彼は、尤も、『カントへの復歸』なる表現を彼が今や『ランゲへの復歸』なる表現に變更したことを語つてゐる。しかしこれは何等事態を變ずるものではない。

註2 すでに古代の哲學者達も唯物論の偉大なる文化的貢献の一つがどこにあるかを理解してゐた。ルクレチウスは雄辯にこの自覺を自己のエピクルス禮讚の中に表現した、『地上の人間生活が天上から自己の頭を突出して怖しげな相貌をもつて人間を嚇したところの迷信の重荷の下に意久地なく壓迫されてゐた時、その時初めてギリシヤ人がそこへ自分の眼を向けそして反抗し始めたのである、彼こそは神々の宮殿をも、雷鳴をも威嚇的な天空の炸裂をも恐れなかつたところの人間である』云々。

『宗教は民衆の阿片である、—とマルクスは『Deutsch-Französische Jahrbücher』『獨佛年誌』に書いた、—幻覺的、幸福としての宗教の廢棄は彼の眞實の幸福の要求を意味する……宗教の批判はそれゆゑに我々の涙の谷の批判として現はれる。』

かゝる言葉は、勿論、自分自身のために多少の幻覺的、幸福を保障する意味に於て宗教的『阿片』を

必要とするブルジョアの俗人共のみならず、同様に又、自分自身を宗教的偏見から解放しながらも、しかも、國民大衆に、唯だ彼の侵犯から有産階級の眞實の幸福を保障する爲めにのみ、幻覺的幸福を供給しつゝあるより才能あるかつ果敢なブルジョア・イデオログ達にも氣に入られることは出来なかつた。正にこれらの諸君が特に鋭く唯物論に反對し、特に高聲に、彼等の反唯物論宣傳の眞性質を曝露しつゝある革命家の『獨斷論』を批難しつゝあるのは當然である。

興味ある小冊子『Reform oder Revolution』(『改革か革命か』)に於て、カー・フォン・マツツフなる、樞密顧問官、國際救護委員會委員、等々、等々、であるところの、約言すれば、全く『尊敬すべき』人が、『若しも我々の發達がこれまでと同様に進むものとするれば、將來我々の祖國は社會革命に脅されるであらう』(『Vorwort』, S. 1)と云ふ自己の確信を發表してゐる。この革命を免れる爲めには、彼の意見によれば、全般的な改革が必要である (eine Gesamtreform auf staatlichem und sozialem Gebiet)。この要求に彼の著書は獻げられてゐるのである。しかし全般的な社會改革は彼の綱領に於て『革命的勢力』(die Mächte des Umsturzes)に對する鬭争を排除しない。革命的爆發が起らない前に、これと精神的武器をもつて (mit geistigen Waffen) 鬭争することが必要であり、そしてこの鬭争に於ては自己の力を何よりも先づ第一に唯物論に向けなければならぬ。しかしフォン・マツツフ氏は、他の者達に比してより成功的に鬭争をなしうる者は自から唯物論的汚穢から淨化することを努むる、『革命的勢力』に對する反對者達であらうと考へてゐる。『我々が鬭争をしなければならぬ』

敵は、何よりも先づ我々自身の周圍に於ける唯物論である。——と彼は説いてゐる。社會民主黨は全く唯物論的である。このものは神と永遠とを否定してゐる (Sic)。しかしこの教義は誰から借りて來られたものであるか？ それは高きより低きに下つたのではないか？ 我々の時代の教養ある人々の最大多數は自分達の父祖の信仰に脊を向けた……『教養ある世界の一部は全く無神論的である。』<sup>1)</sup>が無神論の社會的結果は戰慄すべきものである。『若しも神も、死後の生活も、永遠もないならば、若しも死と共に靈魂の存在も亦熄むのであつたら、他の一部が餘剩を享樂してゐる時に苦惱しつゝある人類の一部の一切の貧困、一切の窮迫は二百倍も三百倍も不當なるものとなるであらう。如何なる根據に基づいて少數が一切の苦澁から自由である時は、國民の十分の九が生活の苦しい重荷をその肩に擔はなければならぬのであるか？』<sup>2)</sup>

註1 Op. cit., S. 222.

註2 Ibid., S. 222—223.

この問題に對して無神論者は少しでも満足させるやうな解答を與へない。しかし正にこゝにこそは無神論の社會的危險性が横はつてゐるのである、即ちそれは勞働大衆の中に革命的感情を教育し覺醒する。そして正にそれ故にこそ我々の時代の政治のわが樞密顧問官、等々、等々、等々は教養あるプ

ルジョアジールに向つて懺悔と唯物論に對する闘争を傳道してゐるのである。フォン・マツソフ氏は物の解つた人である。彼は、眞に労働階級に同情しながらも、同時にそれに劣らず「批判哲學」に熱中してゐる凡ての『唯物論者』よりも、遙に物の解りがいい。これらの人々は唯物史觀を支持してはゐる。しかし彼等は、我々の時代の教養あるブルジョアジールの中に認められる唯物論に對する否定的態度と、新カント主義の普及の社會的、——即ち、究極に於て、經濟的——原因とが指摘されるや、大なる驚愕に打たれるのである。

## 五

しかしベルンシュタイン氏へ戻らう。彼の著書の最後の章は、Cant wider Cant (カント對カント)なる標語をもつて飾られてゐる。この標語の意味を説明しつゝ、ベルンシュタイン氏はケーニツヒベルグの哲學者の精神は彼によつて社會民主黨の中に確立せんとしつゝあるそして黨にとつて大なる危険性を形成しつゝある陳腐となれる見解の條件性との闘争の爲めに呼寄せられてゐるのであると言つてゐる。「狂氣の發作は、——と彼は言つてゐる、——それを私は此事によつてペー(ブレハーフ)氏のところに呼び起したのであるが、社會民主黨には新しいカントが必要であるといふ確信を私に固めさせた、彼は自己の批判の武器を差し向けて何故に外觀的な唯物論が最大の、従つてまたそれ故に最も容易に迷ひ易いイデオロギーであるかを證明するであらう、——理想に對する輕蔑、發展の全能

な力として物質的諸要因を認める事が、常に事實上それを宣傳しつゝある人々がかかるものとして承認しました承認しつゝあるところの自己欺瞞であることを證明するであらう。」(三三〇頁)。讀者は、どういふ譯でこの場合外觀的な唯物論なのであるか、またどういふ譯でこの場合自己欺瞞、しかも尙ほ『事實上』全く意識的なる自己欺瞞なのであるか解らない。が事は極めて簡単に説明される。ベルンシュタイン氏の意見によれば、自己欺瞞は、經濟的要因を『全能』であると認めてゐる人々が同時に『事實上』理想に無縁ではない場合、不可避的である。既にこの一事からして、如何に今やベルンシュタイン氏がカレーエフ氏に近く、また如何に、従つて、唯物論の眞面目な批判から遠いかがわかるのである。このことを完全に信する爲めには、ベルンシュタイン氏によつてマルクス及びエンゲルスの歴史の見解の評價に献げられたページを一讀することが必要である。これらのページの通讀に際しては眞に髪の毛の逆立つものがある。しかし場所の不足により、我々はこゝでそれを吟味することをせぬであらう、唯だ熱心な讀者の爲めに、それらについてはカー・カウツキイによつて彼の著書(Bernstein und das sozial-demokratische Programm) (『ベルンシュタインと社會民主黨綱領』)の中に語られてゐること、及び我々によつて『共產黨宣言』の新版への序文の中に語られてゐることを注意して置かう。こゝでは我々は唯だマルクス主義の、尤も哲學史的ではない、哲學的『批判』に關する次の如き珍奇を指摘するに止めよう。ベルンシュタイン氏は言つてゐる、『唯物史觀』なる表現の中には豫め一般に唯物論の概念に結付けられてゐる凡ての誤解が含まれてゐる。哲學的若しくは博物學的

唯物論はまったく決定論的である、所がこのことはマルクス主義的歴史観については言ふことが出来ない、それは経済的基礎としては、國民生活の諸形態への無條件的に決定的なる如何なる影響をも認めぬのである』(二三—二四頁)。決定論者は——生活の諸形態への無條件的に決定的なる影響を生活の経済的基礎と認める所の者のみであるといふことになる。これは——無智と無理解のヘルクレスの杖である。しかしこれで全部であるのではない。その後、カウツキイが『*Neue Zeit*』に於て、決定論なしには現象の科學的説明がありえないことを述べると、わが『批判者』は取り急ぎ、本來唯だ物質の作用によつて心理現象を説明するにある唯物論的決定論に對して反對なので、彼、ベルンシュタイン氏は、同様にまた他の根元の作用をも認めるものであることを宣言した。かくてベルンシュタイン氏は安全に二元論の平和な港へ到着した、その入口は「人間は精神と肉體より成る」といふ類に飾られてある。これは——再びロシアの讀者によく知られてゐるカレ、エフ主義である。しかしこのカレ、エフ主義は、ベルンシュタイン氏がそれに「復歸」しようとしてゐるそのカント主義にすらよくは結付いてゐないのである。カントは斷然かう斷言してゐる。『*alle Handlungen der vernünftigen Wesen, sofern sie Erscheinungen sind, in irgend einer Erfahrung angetroffen werden, stehen unter der Naturnothwendigkeit* (理性的存在の凡ての行爲は、彼等が現象であり、すづれにしても經驗に於て我々に出合はれる限りに於ては、自然的必然性に從屬してゐる)』(『*Prolegomena*』第五三項)。諸現象が自然的必然性に從屬してゐるといふことは何を意味するか？ それは正に彼

等が唯物的に説明されることを意味する(『*Kritik der Urtheilskraft*』『鑑賞性の批判』第七八項を參照せよ)。従つてベルンシュタイン氏は常に唯物論者に反對するのみでなく、同様にまたカントに對しても反對してゐることとなる。そして凡てこれはブルジョアジのイデオロギイの利害を脅威しない爲め、即ちブルジョアの Cant に背かない爲めなのである。カントに悖る Cant——正にかゝる標語をこそベルンシュタイン氏は撰ばねばならなかつた。

註I 序でに一つ注意して置かう。ベルンシュタイン氏は、歴史の一元的説明なる我々の表現に賛成してゐない。彼にあつては *monistisch* (一元的)なる語が *simplicistisch* (素朴的)と同等なるものと思はれてゐる。何故に正に歴史の『一元的』説明が必要であるかに關する長たらしい説明に入らない爲めに、我々はニエートンの言葉を藉りて言ふであらう。『*Causas rerum naturalium non plures admitti debere, quoniam et verae sint et eorum Phenomenis explicandis sufficient.* (自然界の物に就ては多くの原因を許容してはならない、ただ眞なる原因、現象を説明するに足る原因のみを許容すべきである。)(ベルンシュタイン氏は、若しも社會的及び究極に於て經濟的關係の發展が所謂精神的要因の發展の根本原因をなすものでないならば、この最後のものは自己發展をなすこととなり、そしてこの精神的要因の自己發展は、それに對してわが『批判者』がヘーゲル辯證法の危險なる誘惑の一つに對すると同様に自分の讀者を警戒してゐるところの『概念の自己發展』の一種に過ぎないことを理解してゐないのである。

若しもベルンシュタイン氏が宗教と呼ばれるブルジョアジーの『イデオロギー的利害』の一つを脅威しない爲めに唯物論を斷念したとするなら、辯證法に對する彼の拒否はその同じブルジョアジーを『暴力的革命の恐怖をもつて』脅威することを欲しないことによつて呼び起されたのである。我々は上に確かに彼が自分でも場所及び時間の條件を考慮せざる『抽象的、或は——或は』を批難する事を辭するものでないこと、そしてそれ故に彼自身無意識的に辯證法的方法を使用してゐる事を語つた、これは全くその通りである、しかし今や彼は唯だ辯證法が『然り——然り、否——否』の定式に従つて思惟しつゝある『革命家たち』の疑はしき急進主義との闘争に於て恰好なる武器として現はれる場合及びその程度に於てのみ、辯證法の具體的な地盤の上に無意識的に立つてゐることを附加へなければならぬ。これは正に凡ゆる俗人共が辯證主義者となるところの機會である。しかしその同じベルンシュタイン氏が、——全世界のすべての俗人達と共に、——辯證法に關してあらゆる種類の愚劣を並べ、その上に最も譯の解らぬ批難を、——それが社會主義の領域に於て革命的突進の強固化と發展を助長しうるやうに彼に思はれる毎に、——浴びせかけようと用意してゐるのである。マルクスは言つてゐる、ドイツの俗人共が辯證法に熱中したのは、彼等が唯だそれをその神祕化された形態に於て知つてをり、そしてそれが彼等の保守的傾向を辯護する爲に役立つと想像してゐた善良な舊き時代に於てであつて、しかしその眞の性質を知り、それが一切の存在をその推移的方面から觀察すること、それが何物の前にも立止まることなく何物をも怖れないこと、約言すれば、それがその本質に

於て批判的であることを理解するや否や、斷然それを拒否し去つたのである、と。辯證法に對する全く同様の態度を、我々は自己の全心理に於てドイツの俗人主義の生みの子供であるベルンシュタイン氏に見るのである。それ故にこそドイツの俗人共は彼の『批判』を歡喜の聲高い持続的な叫聲をもつて迎へたのであり、それ故にこそ彼等は彼を偉大なる人々の列に加へたのである。漁師は遠方から漁師を見分ける。

『暴力的革命の恐怖』をもつてブルジョアジーを『脅威』しない爲めに、ベルンシュタイン氏は辯證法に反抗し、彼自身によつて捏つち上げられた『Zusammenbruchstheorie』(『崩壊理論』)に對して武装した。それと同時にかつ依然として同じ目的をもつて彼は民主主義のビンダルとして進出した。

『民主主義は、——と彼は言つてゐる、——若しも階級そのもの、事實的廢棄でないとしても、原則上階級支配の廢棄として現はれる』(二三五頁)。我々は民主主義の一切の卓越とそれが労働者階級に與へるところの一切の利益をよく承知してゐる。しかし我々が民主主義の爲めにすら眞理を歪めることを欲しないであらうことは、我々がアレクサンドル・マケドンスキイの爲めにさへ椅子を壞さぬであらうと全く同様である。民主主義が階級支配を止揚するといふこと、それはベルンシュタイン氏の思ひつき以上ではない。それは本來的に階級なる概念が關係してゐるところの、即ち經濟的領域に關係してゐるのだが、その領域内においてはそのままそれを存在させて置くのである。それは唯だ上層階級の政治的特權を止揚するに止まる。そして正にそれ故に、それは一階級の他階級に對する、——ブル



ジョアジのプロレタリアートに對する、——經濟的支配を止揚しないのであり、それは同様にまたプロレタリアートとブルジョアジの相互闘争をも、苟もその場合に合目的なものとして現はれ得る一切の手段を盡して闘争するプロレタリアートの必然性をも除去しないのである。「人類について」判斷する場合、捉はれない人は誰でも、「暴力的革命の恐怖」は、それ自身としては、何等望まじきものをその中に含んでゐないことに同意する。しかし何人も、反革命的傾向によつて眩まされなかつた人である限りは、同様に、民主主義的憲法がまったく革命的爆發と革命的獨裁とを不可避的なものにするところの、階級闘争のさういふ尖鋭化を防衛しえないことを認めざるをえない。だからベルンシュタイン氏が階級獨裁はより低い文化の徴候として現はれるであらうといふ考察をもつて革命家達を嚇しても無駄であらう。我々の時代の巨大なる社會問題、人間による人間の經濟的搾取の廢棄に關する問題は、——以前の時代の一切の社會問題が解決されたと同様に、——唯だ力によつてのみ、解決される。成程、力は尙ほ未だ暴力を意味しない。暴力は力の發現形態の一つであるに過ぎない。しかしプロレタリアートが自己の革命的力を發現しなければならぬその形態の選擇は、彼の闘争意志ではなくして、諸事情の如何に係はるのである。より確實にまたより速かに敵に對する勝利に導くところのその形態が、よりよいのである。で若しも「暴力的革命」が與へられた國に於てまた與へられた情勢の下にあつて最も合目的な行動方法であるとしたら、哀れな理論拘泥主義者——裏切り者でないまでも、——として現はれるのは我々がベルンシュタインのところへ出遭はれる「低級なる文化」

「政治的退化」等々の原則的考察をそれに對立させようとする者であるであらう。白兵戦は若しも欲するならば、それが行はれる何處に於ても動物的「退化」として現はれる、格闘しつゝある二個の間は嚙合つてゐる二匹の野獸を思ひ出させるではないか。しかし誰が、「トルストイ教徒」を除いて、害惡に對する格闘による一切の抵抗を原則的に批難するであらうか？ また果して眞面目な人間であるなら、トルストイ教徒が暴力を批難してゐるそれらの論證を眞面目に首肯しうるであらうか？ あらゆる思索しつゝある人間にとつて、これらの論證は、ベルンシュタイン氏の愛する定式、我々が既に知つてゐるやうにヘーゲルの「抽象的な」或は——或は（暴力は或は惡であるか、或は善であるかどららかである）と全く同一であるところの「然り——然り、否——否」による思惟に對する思ひがけないカリカチュアであることは明かである。「暴力的革命の恐怖」は常に多かれ少かれ「慘憺たるもの」である。それはその通りである。それは何人も否認しない、しかるにベルンシュタイン氏はそれを避ける爲めに極めて拙い方法を選んだのである、彼はブルジョアジに向つて、まだ階級的利己主義に落込んでしまはないその要素に向つて、現代の社會主義運動を阻止しようとするのは人本主義と文化に對する最大の罪惡であることを示すべきであつた。彼の宣傳が成功的なものとなるに連れて、それはブルジョアジによつて示されるプロレタリアートの運動への抵抗を弱め、またそれによつて「暴力的革命の恐怖」の可能性を弱めえたであらう。然るにベルンシュタイン氏はそれとは異つて行動することを選んだ。彼はブルジョアジを安心させる特殊の目的をもつて彼によつて「再吟味

された』マルクス主義の宣傳をもつて進出したる後、労働者の階級意識を眠り込まさうと始めた。この方法はブルジョアリーの著しい部分が、ベルンシュタイン氏によつて『再吟味された』所謂『マルクス主義』の普及なるものが、どれほどマルクスの古い革命的教義に比して彼等の爲めに有益であるかをよく理解した意味で成功せるものであつた。ブルジョアリーのこの部分はベルンシュタイン氏を一種の啓示のごとくに迎へた。しかし社會主義の爲めには彼は死んだ、そして、勿論、最早決して復活することはないであらう。どんなに聲高く彼が、社會主義者たちは彼を理解しなかつたといふこと、及び本質に於ては、彼は曾てさうであつたのに比して殆ど變化しなかつたといふことを叫ぼうとも、それは正に、努力あまつて智慧たらずである！

## 六

ベルンシュタイン氏は絶えず自分自身の概念の不明瞭の中に迷ひ込んで自分自身の矛盾の中にこころがらかつてゐる。にも拘らず、彼の議論にはその周囲に彼の思想が集まつてゐるところの論理的中心が存する。この中心として現はれてゐるのが所得についての教義である。

「全く、——と彼は言つてゐる、——現代の發展は財産所有者数の相對的または絶對的減少をさへ立證してゐると考へることは正しくない。財産所有者の数は『多かれ少かれ』ではなくして、單により以上に増大しつゝある、即ち絶對的にまた相對的に増大しつゝある。若しも社會民主黨の行動及び期待

が財産所有者の数の減少に懸かるのであつたら、彼は、確かに安らかに眠り込むことが出来るであらう、しかしそれは全く正しくない。社會的富の遞減ではなくして、その増殖に社會民主黨の希望は結付けられてゐるのである」(九〇頁)。

マルクスも、エンゲルスも、及び彼等の學徒の中の何人も自己の希望を社會的富の遞減には結付けなかつた。かゝる『結付き』を斷たうとしてゐることによつて、ベルンシュタイン氏は何のことはない風車と戦つてゐるのである。しかし總てのマルクス主義者たちは、社會的富の増殖は資本主義社會に於ては社會的不平等の増大と財産所有者の数の減少によつて伴はれることを信じてゐる。若しもベルンシュタイン氏にしてその反對を證明することに成功したのであつたら、彼はマルクス主義に致命的打撃を加へたものと認めねばならないであらう。そしてその時、實際、『社會革命』に關する凡ゆる議論は『空論』になり終るであらう。しかし困つたことには、ベルンシュタイン氏は自分自身の無理論以外、全然何もをも證明しないのである。彼が自己の大膽な斷定を辯護する爲めに引いてゐる論證は、殆どまつたく、適度の所得は人口よりもより速かに増加するといふことに歸着する。このことは——争ふべからざる事實である。しかしこの争ふべからざる事實は何物をも證明せぬ。若しも社會所得が適度の所得數より尙ほ速かに増大するならば、この數の増加は全く社會的不平等の増大と兩立するのである。我々はこのことをベ・スツルーウエ氏に對する、専門的に社會的經濟的不平等の『鈍ぶり』に關する問題に献げられた論文の中に證明した。我々は讀者にそれを一讀されんことを乞ふて、こゝ

には二三の部分的な注意をなすに止めよう。

第一に、社會的不平等の増大と兩立的である適度の所得数の増加は如何なる場合にも所有者数の絶對的減少をも、——況んや——その相對的減少をも證據立てるものではない。財産と所得とは——二つの全く異なる概念である。

第二に、土地所有の分配に對するベルンシュタイン氏の引證も彼の適度の所得数の増加に對する指示の信用しがたいのと同様に不正確である。次は多數の中の一例である。

彼は、ドイツに於ては中農經濟群は一八八二—一八九五年の期間に殆ど八パーセント、また彼等によつて占められてゐる面積は九パーセント増加したと言つてゐる(一一〇頁)。しかし一國に於ける經濟總數及び全耕作面積が知らされてゐない時に、經濟の絶對數若しくは經濟の一範疇の面積の増加に關する材料は如何なる意味を有するか？ が若しもこの事情を注意するならば、即ち經濟の總數に於けるまた總面積に於ける中農經濟の割合を觀察するならば、ドイツに於てこの範疇の經濟によつて占められてゐる面積は、全く取るに足らぬ増加を示したに過ぎないことが解るであらう。一八八二年にはそれは總土地面積の一・九〇パーセントであつた、が一八九五年には——一二・三七パーセントであつた、増加は従つて二分の一、一パーセント以下である。しかしこれは我々がドイツの全土地面積について言つてゐるのである。が本來的の農村經濟的土地面積に關して言へば、上掲の範疇の經濟は一八八二年には一二・二六パーセントであり、一八九五年には一三・〇二パーセントであつた、増加

は〇・七五パーセントを越えないのである。これは増加なる文字をこの場合用ふることが不思議なくらゐに僅少である。

註1 ドイツ帝國の農業。一八九五年六月十四日の農業經營調査による(ドイツ帝國の統計、續編、一二二卷、一一頁)を見よ。

ドイツの農業の事情は、それについて判斷を下す場合、どうしても裸の統計的數字だけでは満足することが出來ず、各個々の經濟範疇の技術的並に經濟的特殊性と同様に、各々の與へられた地方の地理的特殊性を、同様にまた觀察される期間に行はれるこれらの特殊性の變化を考慮に入れることが必要であるほど、複雑なのである。

イギリスについて言へば、ベルンシュタイン氏は、その數が所によつては確かに海外的競争の影響を受けて増加してゐる小經濟主が、かしこに於て『ブリテンの奴隸』(British slaves)と呼ばれてゐることを、——その如き程度にまで彼等の經濟狀態が劣悪であることを、附加へることを忘れたしまた知つてもゐない。

註1 農業衰退の問題の調査のための王命委員會の最終報告書。London 1899, p. 36 を見よ。

マルクスの理論がこれらの『奴隷』の数の増加によつて反駁されないことは、それが加工産業の任意の領域に於ける Sweating System (苦汗制度) の發達によつて反駁されないと同様である。

ベルンシュタイン氏は同様にまた、アメリカ合衆國の東部に於ては小中經濟數が増加してゐると言つてゐる。これは再び正しくない。東部諸州に於ては小農場數は減少しつゝある、また一般に北米に於ては、レワツシヨールの言葉によれば、集中化の或種の傾向が認められるのである。<sup>1)</sup>

註一 L'agriculture aux Ehas-Unis Paris et Nancy 1894, p. 61-62. 最近のアメリカの國勢調査は、集中化がかしこに於ては農村經濟の領域に於ても著しきものあるを示した。

ベルギーの最近の統計學的材料も亦土地所有の集中化を示してゐる。<sup>1)</sup> 土地所有者數の相對的減少はこゝでは決定的な事實となつてゐる。

註一 ワンダーギルヤの《La propriété foncière en Belgique》及びそれについての『ザリヤ』第一號の我がの批評を見よ。

## 七

「現代イギリスの發展の歴史におけるシュルツェ・ゲーヴァニッツ氏の記述の一面性も、それに對しては當時私は極めて痛烈に反對をして置いたのであるが、彼の著述《Zum Sozialen Frieden》(『社會平和に關して』) においても、同様にまた《Grossbetrieb—ein wirtschaftlicher Fortschritt》(『大經營——經濟的進歩』) なる獨白においても、現代の經濟的意義の認識のために重要な意義を有する諸事實を彼に確認させることを妨げなかつた、とベルンシュタイン氏は言つてゐる。——私はこの中に何ら悪しきものを見出さない、また私がシュルツェ・ゲーヴァニッツ、同様にまたブレンタノ派に屬する他の人々によつて(ヘルクナーによつて、ジンツハイマーによつて) 引用された多くの事實に、私が以前に全く氣付かなかつたか又は不充分に評價してゐたところの諸事實に注意を向けたことを喜んで承認するものである。私はユー・ブッフの《Sozialismus und Kapitalistische Gesellschaftsordnung》(『社會主義と資本主義社會の秩序』) なる書物からも何かを學んだことを承認することを羞づるものではない。——プレハーフ氏はこれをブルジョア經濟學者の教義との(科學的社會主義の) 折衷的結合であると稱してゐる。恰も科學的社會主義の諸要素の十分の九が「ブルジョア經濟學者」の著述から採用されてゐないかのやうに、恰も一般に「黨派的科學」なるものが存在するものやうに」(三〇六及び三〇七頁)。

『黨派的科學』は、嚴密に言ふなら、あり得ない。しかし、殘念なことには、黨派的精神と階級的利己主義をもつて貫かれた、『學者』の存在は非常にあり得るのである。マルクス主義者たちがブルジョア科學について輕蔑的に語る場合、彼等は正にこの種の『學者』を念頭に置いてゐるのである。これらの『學者』の數に、ベルンシュタイン氏があまりにも多くのものを彼等のところで『學んだ』ところの人々、ユー・ブルフ、シユルツエ・ゲーヴァニツツ、及びその他多くの者が屬してゐる。科學的社會主義の十分の九がブルジョア經濟學者の著述から取られてゐるにしても、それらはベルンシュタイン氏がブレンタノ派及びその他の資本主義の代辯者達のところからマルクス主義の『再吟味』のための材料を取つてゐるのとは異つて取られてゐるのである。マルクス及びエンゲルスはブルジョア學者に對して批判的に對する術を知つてゐた、しかるにベルンシュタイン氏は彼等に對してさういふ態度をとることを敢へてしなかつたか又はさうすることを欲しなかつたのである。彼等に『學びつゝ』、彼は何のことはない彼等の影響に陥つて、そして自分では知らずに彼等の代辯的な議論まで我が物としてしまつたのである。彼は適度の所得數の増加に關する教義が、財産所有者數の絶對的並びに相對的增加に關するそれと同様に、客觀的な科學の嚴肅なる到達であるかの如く想像した、ところが事實はそれは代辯的思ひ付の一つなのである。若しもベルンシュタイン氏が科學的思惟に對する能力を具へてゐたならば、彼は我々が現在彼を見出す如きかゝる困難には落ちこまなかつたであらう、しかしその時は彼は自己の書物を書きもしなかつたであらう。

既に一八九八年の秋に我々は、ベルンシュタイン氏が單にブルジョア御用學者に批判的に對しえなかつた故にのみ、マルクスを『批判』し始めたのであるといふ思想を發表した。當時我々は多くの騒ぎを惹き起しさせたベルンシュタイン氏の『行動』——總てである、が終局目的は——無である」といふ文句がベルンシュタイン氏によつてシユルツエ・ゲーヴァニツツから借用されたものであるといふ興味ある事實をも指摘したのである。事實上我々に對して反駁をなし得ないところからして、ベルンシュタイン氏は野鄙な漫罵をもつて我々に答へた、我々はそれに答へる必要を認めない。我々は今やベルンシュタイン氏の不氣嫌を非常に尊重するものであり、我々がベルンシュタイン氏の退却を指摘してそして彼を曝露した最初の一人であつたことを誇るものである。『問題は誰が誰を葬るかにある——と、上掲の論文において我々は書いた、『ベルンシュタインが社會民主黨をか或は社會民主黨がベルンシュタインをか、』と。一八九八年には問題のかゝる提起は多くの我々の讀者たちにもあまりにも痛烈なるものと思はれた。今や革命的社會民主黨の隊列においてはこの問題は總てのものによつて正にかゝるものとして、がそれ以外にはなく立てられてゐるのである。事件の進展は我々の言葉の正當さを完全に立證した。ベルンシュタイン氏と個人的な論争に入ることには我々は以前にも興味を有しなかつたが、今もそれを有しない。しかし我々は次のごとき興味ある部分を指摘する誘惑に打ち勝ちえない。

註1 ザクセン労働者新聞 No. 253-255 『何の爲めに我々は彼に感謝するか?』なる論文において。序でながら、我々は今日に至るまで、何が爲めに本来カウツキイはスツットガルトの黨大會に於てベルンシュタインに感謝したのであるか理解することが出来ない。カウツキイの著書『ベルンシュタインと社會民主黨綱領』は感謝すべき何物もなかつたといふ我々の思想を完全に肯定してゐる。

註2 漫罵は我々の反對者にあつては論争の悪意ある方法によつて伴はれた。即ち、譬へば、ベルンシュタイン氏は階級を廢棄することが今日一層不可能であることを證明しようと欲する。この目的をもつて彼は、恰も、階級の廢止は『唯だ或種の、我々の時代から見て極めて高度の、生産力の發展段階においてのみ』可能となるであらうと言つてゐるかの如きエンゲルスを引證してゐる(三二五—三二六頁)。結果は、エンゲルスによれば、我々によつて到達された生産力の發展段階は未だ資本主義の除去のためには不十分である。といふことになる。事實においては、エンゲルスは全く反對のことを言つてゐるのである、『それ(階級の撤廢)は、生産、生産手段及び生産物の高度の發展を前提とする……ある特別な社會階級が、音に餘計なるものとなるばかりでなく、經濟的にも政治的にも又智的にも發展の障害になる。この點に到達したのである……』(我等の傍點) Dührings 《Umwälzung der Wissenschaft》 dritte Auflage, S. 304 XXV)ブルシニヒニを嚇すまいとする自己の努力においてベルンシュタイン氏は既にあまりにも熱中しすぎてゐる。

ベルンシュタイン氏は彼に向けられた我々の注意を、我々が資本主義社會における労働者の状態をもつて『絶望的なるもの』と考へてゐるといふ意味に理解した、そして、『そのものゝ概念によれば科

學が、労働者の状態を凡ゆる條件の下において偉大なる轉換までは絶望的であると考へることを要求してゐるかの如き人間と論争することを欲しないと宣言した(三〇九—三一〇頁)。見よ、如何に嚴格であるか! しかしこの嚴格なベルンシュタインの著書において我々は次の如き個所を發見するのである。

マルクス及びエンゲルスの教義の中において『反駁しえざるものとして残るのは誰だ次のことだけである、即ち、現代社會における生産能力は實際の、購買能力によつて規定される生産物に對する需要よりも遙かに強力であるといふこと、幾百萬の人間が、彼等の爲めに充分の住宅、食料、及び衣服を創り出すべき手段を豊富に領有してゐるに拘らず、粗悪なる住宅に住み、悪しき服装をなし、不充分に營養をとらされてゐるといふこと、産業の各種部門におけるこの不適合の結果として現はれるのが生産過剰であるといふこと……それ故に労働者による勤勞の獲得の中に著しい不正が存在し、その結果として彼等の状態が、益々激しく彼等が無残な隷從に陥れながら、或る場所に於ては過度労働を、他の場所に於ては——失業を創造しながら、最も高い程度において、不安定なるものとなりつゝあるといふこと、これである』(一四五—一四六頁)。

エル・カンツェリは、例によつて、ベルンシュタイン氏を悪く翻譯した。この最後の者は、彼の翻譯者が彼に語らしめてゐる如く、労働者達は益々大なる隷從に陥ちるのではなくして、無残な隷從の中に維持されると言つてゐるのである。しかし正しい翻譯においてさへもベルンシュタイン氏の思想は

彼自身を打ちかへしてゐる。實際のところ、果して労働の生産性の驚嘆すべき成長に拘らず、我々がベルンシュタイン氏において讀むごとき經濟状態と殘虐なる隷従の中に止まつてゐるところの、資本主義社會におけるこの階級の狀態は絶望的ではないだらうか！絶望的であること及びこの絶望的な状態からプロレタリアートを導き出すことは唯だ生産の資本主義的方法の除去、社會革命によつてのみなし得ることは明かである<sup>1)</sup>。ベルンシュタイン氏は自己の新しい世界觀において甚だ拙く辻褄を合はした。

註1 マルクスは資本主義社會に於ける労働者の状態を、その著しい改善が可能であるやうな、さういふ場合にすら『絶望的』であると認めたであらう。『よりよき衣服、食物、待遇、及び多額の貯金も、——と彼は言つてゐる、——賃銀労働者の隷従の状態と搾取とを、隷従のそれと同様に、殆ど絶滅しないのである』(『資本論』第一卷、サンクト・ペテルブルグ、五三四頁)。ベルンシュタイン氏自身も、隷従の状態はマルクス主義的な意味において、全く隷従制度が廢止されるまでは、『絶望的なもの』として止まることを理解するであらう。だが、『絶望的』なる言葉は我々に屬するものではなく、ベルンシュタイン氏によつて我々に歸せられたものに過ぎないことを注意して置かう。資本主義社會における労働者の状態に對する我々の見解はベ・スツルムウエ氏に對する第二の論文の中に語られてあり、かつ我々によつて基礎づけられてある。

ベルンシュタイン氏は意味深く尋ねてゐる、「世界市場の範圍(即ち、規模、我々は再びカンツェリが非常に悪く我々によつて研究されつゝある書物を翻譯したことを繰返さざるをえない——ゲー・ペー)の擴大は通信と運搬のために必要な時間の非常なる短縮と相俟つて、強めないであらうか、停滯の緩和の可能性を強めないであらうか、更にまたヨーロッパ産業諸國の甚しく増大せる富は、現代信用の弾力性及び産業カルテルの發生と相俟つて、——それは、少くとも、長期に亘つて、一般的な情勢に對する地方的若しくは部分的停滯の影響を、以前と同様の全般的な事業(即ち、産業——ゲー・ペー)恐慌が、信すべからざるものと考へられなければならない程に、減少せしめないであらうか(一二六頁)。

生活はこの問題に回答を與へた、去年の半ばから文明世界は一般的産業恐慌を経験しつゝある、その接近はベルンシュタイン氏が自己の著書を書いてゐた時すでに幾人かのブルジョア事業家によつて豫想されてゐた。

註1 一九〇一年に書かれた。

## 八

シェークスピアの一侍従が狂氣になつたオフエリヤについてかう言つてゐる。

彼れの言葉には意味の半分もありません。

何もかもが無氣味で、——唯だ空な響ばかりで御座ります。

しかしその取り止めなさも、

それに注意するほどの者には物を思はせます……

同じことをベルンシュタイン氏の著書についても言はなくてはならない、凡てが無氣味で空虚な音響以外に何物もない、しかし正にこの音響の空虚そのものが注意深い讀者を憂鬱な物思ひに沈ませるのである。一切の理論的な問題においてベルンシュタイン氏は弱者の中の弱者であつた。如何にして彼は長きに亘つて自己の黨の最も優秀なる理論家の一人たるの役割を演ずることが出来たか？ この問題は考慮するに値する。しかもそれに對して多少とも満足なる回答を見出すことは容易でないのである……

それに劣らず重要なもう一つの問題は、ベルンシュタイン氏の諸見解の中には今や唯だ社會主義の

微弱な痕跡のみが残つたといふことである。事實において、彼は革命的社會民主黨によりも、遙かに『社會改革』の小ブルジョア的支持者に近い。しかるに彼は「同志」として止まり、また黨から去るやうに、要求されてゐない。このことは今や萬國の社會民主黨の間に非常に廣く行はれてゐる、意見の自由に對する誤れる見解によつて説明される。「どうして人をその見解の故に黨から除名することが出来るか？ それは異端の故に彼を迫害することを意味するであらう」と言ふのである。斯様に判断する人々は、意見の自由は必然的に離合集散の自由によつて補はれなければならないこと、そしてこの最後の自由は、見解の相違の故に分裂する方がいゝやうな、人々をも一緒に行かせるやうな或る偏見が支配するところには存在しないことを忘れてゐるのである。しかしこの正しからざる判断をもつては唯だ一部分、ベルンシュタイン氏がドイツ社會民主黨から除名されない事實が説明されるに過ぎぬ。主要の原因は彼の新見解が他の社會民主黨員の可成り著しい數によつて分け持たれてゐるといふことにある。我々がこの論文において言及しえざる諸原因によつて日和見主義は萬國の社會民主黨の隊列の間に多くの支持者を獲得した。そしてこの日和見主義の普及の中に現在黨を脅威しつゝある總ての危険の中の最も主たるものが含まれてゐるのである。自己の綱領の革命的精神に忠實に踏みとどまつた社會民主黨員は、——彼等も、幸ひなことには、殆ど到る所においてまだ多數を形成してゐるのであるが、——若しも適當の時期にこの危険との闘争のために斷然たる手段を取らないならば、取返しつかぬ誤りをなすことゝなるであらう。ベルンシュタイン氏は、それ自身としては、恐しくない



ばかりでなく、哲學するサンチヨ・パンサとの宗教的な相似によつて滑稽そのものである。しかし『ベルンシュタイン主義』はあり得べき没落の徴候として、極めて怖るべきものである。

尙ほ又、ベルンシュタイン氏は書いてゐる、『ブレハーンフ氏の論争方法を適當に照明する爲めに、私に、ロシアに於て活動しつゝあるロシア社會民主黨員のより大なるではないとしても、大部分が私に近い見地に斷然合一したこと、またこの意味において二三の私の『無内容』の論文がロシア語に翻譯され單行本として普及されてゐることを述べなければならぬ。』次ぎにかゝる現象は恐らく我々を歡ばさないであらうといふ意地悪い意見が続いてゐる。我々の個人的感情の問題と同様、如何にして我々の論争方法がロシアに於て活動しつゝある社會民主黨員のベルンシュタイン氏との接近の事實、——この事實が正しいものであるにしても、——によつて特徴づけられ得るかの問題は措いて、我々は、ベルンシュタイン氏が、明かに、ロシア社會民主黨の所謂『經濟主義的』傾向を問題にしてゐることを注意して置く。何人も、ロシアに於て一時的成功を収めたところのこの傾向が、今やベルンシュタイン氏の中に背教者以上のものを見出してゐない我々の同意見者によつて克服されてゐることを知つてゐる。しかし今日に至るまでも、恐らく、『經濟主義的』傾向の存在を氣付かずにそれ故にそれを否定したところの、ロシア（國外）社會民主黨の一出版物があつたことは、必ずしもすべての者に知られてゐない。この出版物の編輯局は爛眼であつた！

註I この箇所はエル・カンツエリの翻譯には落ちてゐる。それはロンドンに於て出版されたベルンシュタイン氏の著書のロシア譯の一―二頁の註の中に見出される。

ベルンシュタイン氏の劣悪な著書の劣悪なロシア譯は既に二『合法』版を重ねた。思ふに近く、第三版も現はれるであらう。それに驚いてはならぬ。あらゆる種類のマルクス主義の『批判』及びあらゆる種類のをれの變種は、——苟もそれがブルジョア精神に貫かれてゐる限り、——必ず我々の合法的マルクス主義者の、それ自身マルクス主義のブルジョアの變種であるところの、その部分に氣に入るのである。

一九〇一年八月

## エフ・エンゲルスの『科學的社會主義の發展』の 翻譯への序文

エンゲルスの小冊子『科學的社會主義の發展』のロシア譯は今や第三版が出ようとしてゐる。第二版は一八九二年に出た。當時國際社會主義文献の中にはまだ、社會主義的學說が一般に科學と名付けられることは出来ないといふ意見は現はれてゐなかつた。今やかゝる意見が非常に聲高く述べられ、讀者の或る部分に相當の影響を及ぼしつゝある。それゆゑ我々はこゝで、科學的社會主義とは何か、またそれが空想的なそれとどう異つてゐるかの問題を觀察することは時宜をえたものであると考へる。しかし先づ『批判者』諸君の中の一人の意見を聞くことにしよう。

一九〇一年五月十七日『社會科學研究のためのベルリン大學々生聯盟』(Sozialwissenschaftlicher Studentenverein zu Berlin)に於てなされた報告で、ベルンシュタイン氏はこの問題を、異なる形に考へてではあるが、提起してゐる。『科學的社會主義は可能的であるか?』(Wie ist wissenschaftlicher Sozialismus möglich?)。自己の研究の結果において彼は否定的な解答に到達した。彼の言葉に

よれば、如何なる『主義』も『科學である』ことは出来ない、『主義の意味するところは世界觀、傾向、思想若しくは要求の體系であつて、決して科學ではない。あらゆる眞實の科學の基礎は經驗である、それは自己の建物を蒐集されたる知識の上に建てる。社會主義は未來の社會秩序に關する教義である、そして正にそれ故にその最も特徴的な性質は科學的に確立されえない。』

註一 Ed. Bernstein, 《Wie ist wissenschaftlicher Sozialismus möglich?》 Berlin 1901, S. 35.

さうだらうか? 見て見よう。

先づ『主義』と『科學』との關係について言はう。若しも如何なる『主義』も科學たりえないと言ふベルンシュタイン氏が正しいならば、譬へば、ダーウイン主義もまた科學でないことは明かである。しかしかゝる場合、ダーウイン主義とは何であるか? 若しも我々がベルンシュタインの理論に忠實であることを欲するならば、我々はこの教義を『思想體系』に歸せしめなければならぬであらう。しかし果して思想體系は科學たることが出来ないか、また果して科學は思想體系ではないのであるか? ベルンシュタイン氏は、明かに、否——と考へてゐる。しかし彼は單に誤解によつて、單に彼自身の『思想體系』の中に恐しい混亂が君臨してゐる故に、さう考へてゐるのである。

科學が自己の建物を經驗の基礎の上に打ち建てること、それは今日如何なる常識ある生徒も知ると

ところである。しかし問題は全くそこにあるのではない。それは、正に何を科學は經驗の基礎の上に打ち建て、るかにある。これがこれに對しては唯だ一つの答だけがありうる、經驗の基礎の上に科學は一種の普遍化（『思想體系』）を打ち建て、それがこんどは諸現象の或る一定の豫知の基礎となる。しかし豫知は未來の時に關係する。それ故決して總ての未來についての考察が科學的基礎を奪はれてゐるのではないのである。

若しも現在に未來を孕むといふ古い思想が正しいならば、現在の科學的研究か何等か神祕的な豫言若しくは何等か氣儘なかつ抽象的な判斷を基礎としてではなく、正に「經驗」を基礎として、科學によつて集積された知識を基礎として、未來について判定をなしうる可能性を我々に與へなくてはならぬ。

若しもベルンシュタイン氏が彼によつて提起された科學的社會主義の可能性の問題を眞面目に考察することを欲したのだつたら、彼は何よりも先づ、我々によつて表示された思想が社會現象に對する適用において正當であるかそれとも不當であるかを豫め決定しなければならなかつた筈である。最も短かい考慮が彼に、この場合それは他の如何なる場合に於てよりも正しいことを示すであらう。このことを確信したる後に、彼は、それらを利用することによつて未來の社會秩序の特徴を豫知しうるやうな、現在の社會關係に關する知識のさういふ蓄積を、現代の社會科學は有つてゐるかどうかを観察しなければならなかつたのである。若しも彼がかゝる蓄積は存しないしまた決して存しないであらう

ことを見出すなら、科學的社會主義の可能性に關する問題は自から否定的な意味に解決されるであらう。が若しもベルンシュタイン氏が、かゝる蓄積は或は既に存在し、或は時と共に蒐集されうることを信するならば、彼は不可避的に上述の問題の肯定的な解決に到達しなければならない。しかし如何に彼がこの問題を解決しようとも、その時彼には誤れる研究方法のお蔭でこれまででぎこちない淺薄な『思想體系』の霧の中に止まつてゐるものが、充分明瞭にされるであらう。すなはち彼は、科學的社會主義の存立の可能性は唯だ、社會現象の科學的豫知の可能性が明かなるものとなる場合にのみ證明されうるであらうといふこと、即ち科學的社會主義の可能性に關する問題の解決の前に、先づもつて、社會科學一般の可能性に關する問題を解決しなければならぬことを發見するであらう。がそれを發見した後、ベルンシュタイン氏は、恐らく、彼によつて取上げられてゐる對象が「驚くべき廣汎さ」を持つてゐること、そしてその説明のためには科學と『主義』との無意味なる對比以外、如何なる他の分析方法をも持合はさない者には多くをなし得ないことを見出すであらう。

しかし我々は我々の著者に對して不公正である。彼の有する分析方法はかゝる區別立に限られてゐるのではない。現に、譬へば、彼の報告の三三―三四頁において我々は尙ほ、科學は認識以外に他の如何なる目的をも有しない、それに反して『政治的及び社會的教義』は或る一定の實踐的任務を解決しようとするといふ思想に出遭ふ。ベルンシュタイン氏の報告に伴つて起つた論争において、出席者の中の誰かこの思想に關して、醫學は治療の實踐的目的を有する、それにも拘らずそれは科學と認

められなければならないといふことを彼に指摘した。これに對して我々の報告者は、治療は醫術の任務であつて、それは何れにしても醫學の基礎知識を前提とする、しかし醫學はそれ自身治療にはなくして、治療の方法と條件の研究に向つて突き進むのであると答へた。これに尙ほベルンシュタイン氏はかう附加してゐる、「若しも我々が概念のこの區別を模型として (als typisches Muster) 取るならば、我々は、どこで科學が終り、どこで技術若しくは教義が始まるかの最も複雑せる場合にも容易に定義を下すことが出来るであらう。」

註1 上掲書、三四頁。註。

我々はベルンシュタイン氏によつて推薦されてゐる「概念の區別」を模型にしよう、そしてかう判斷しよう、社會主義においては、醫學における如く、二つの方面、科學と技術を區別することが必要である、科學としての社會主義は社會主義的革命的な手段と條件とを研究する、「教義」としての若しくは政治的技術としての社會主義は、獲得された知識に依據して、上述の轉換を實現することに努力する。そして我々は附加へる、若しもベルンシュタイン氏が我々によつて彼の例に倣つてなされた區別を「模型」にするなら、彼は容易に、社會主義體系において正に何處に科學が終り、また何處に教義及び技術が始まるかを理解しうるであらう。

ロバート・オーエンは「ブリテンの公衆」に向つて、彼の著書 (New views of society or Essays upon the formation of human character) (社會に對する新見解又は人間性の教化についての試論) への緒言となつてゐる覺書きの一つに於て、かう言つてゐる、

「私は諸君の注意を促す、親友達及び同國人達よ、何となれば諸君の最大にして最重要なる利害が、諸君の前に提供されてゐる試論において觀察されつゝある對象と密接に關聯してゐるが故である。諸君はそれらの中に現存する害惡の記述とそれの治療の手段の提供とを見出すであらう……改善は根本的に考慮され且つよく立てられたる計畫を要求する……けれども、害惡の原因の指摘は既に大なる進歩として現はれる。その後の第一歩は藥劑の發見でなければならぬ……私の生涯の事業は正にそれの發見と實驗とであつた、そして私は、經驗の示すところによれば、その適用において全く信頼するに足り、その效果において全く疑ひないところの藥劑を發見した故に、私は今やその恩澤にあづからんことを諸君に勧める強い希望を持つのである。しかしこの「社會に對する新見解」が基礎を置いてゐるところの諸原則は正しいものであるといふこと、その背後には何等の誤謬も潜んでゐないといふこと、及びその公表に私を突き動かしたのは全く純粹な意志であつたことを信ぜられたらう」云。

註1 イギリス版の原本が手元にない所から、我々は次の標題のもとに一九〇〇年にライプチヒにおいて出版

反ベルンシュタイン論

されたオスワルド・コールマン教授のドイツ譯によつて引用する、『社會の新しい見解。人間の狀態を次第に改善す計畫の發展の序論としての、人間性の教化に關する四論文』。我々によつて引用された箇所は第六頁にある。

これらの言葉は偉大なるイギリスの社會主義者の思想の道行きをベルンシュタイン氏によつて提供されつゝある『概念の區別』の見地から分析する充分の可能性を我々に與へる、エル・オーエンが現存する害惡の研究から及びその原因の發見から始めたことは明かである。彼の勞作のこの部分は、醫學において病原學と名付けられるものに該當する。それから彼は彼の興味を惹いた社會的疾病的治療の手段と條件との研究に移つた。非常に効果あるものと彼に思はれた藥劑を發見して、彼はそれを實驗に供した。このことは彼の治療法と名付けうる。彼の實驗が全く満足すべき結果を上げた後に初めて、彼はそれを全『ブリテンの公衆』に提供すべく決心した、即ち、換言すれば、醫學的實踐に着手すべく決心した。以前には彼は醫學に従事した、今の彼は醫學を實行し始めた。こゝに——完全なる並行がある、若しもベルンシュタイン氏が科學としての醫學の存立の可能性を承認するなら、彼は勿論、彼が自分自身の『概念の區別』に忠實であることを欲する限り、社會主義の科學の存立の可能性をも亦同様に承認しなければならぬ筈である。我々がロバート・オーエンにおいて彼自身の言葉に基づいて了解したところの研究の同じ道程が、彼と同時代のフランスの社會主義者達においても容易

に認められうる。その例としてフリーエだけをでも示さう。彼は、人々に富みかつ幸福になる術をもたらしたと言つた。彼の説のこの部分は醫術に該當する。しかし彼は自己の教義のこの實踐的部分を何に基礎づけたか？ 彼の言葉に據れば、彼がそれらを遂に長期に亘るか？ 注意深い研究の後に發見するまでは人々に知られずにおた道德吸引の法則の上にある。こゝに於て我々は最早技術ではなくして、學說に、『體系化された知識』に、即ち科學に當面する。フリーエも亦、彼の技術が彼の科學的發見に基礎を置いてゐることを執拗に繰り返した。ベルンシュタイン氏がこれらの發見に對してフリーエ自身、または彼の學派によつて考へられてゐた如き大なる意義を附する必要がすこしもないことは自明である、しかしそのことは何ら事態を變ずるものではない。ベルンシュタイン氏は、勿論、現代のすべての醫學上の學說の誤りなきことを信じなければならぬとは考へてゐない、しかしそれは彼をして、醫術は一事である、醫學はまた別の一事である、従つて醫術の存在は常に醫學の存立を排除しないばかりでなく、それどころか、自己の必須條件としてそれを前提するといふ確信に到達することを妨げなかつた。何故に社會主義に於ては技術と科學との間のかゝる關聯があり得ないのであるか！ 何故に社會的・政治的『教義』としての社會主義の存立は、科學としての社會主義の存立を排除するのであるか？

註1 譬へば、彼が自己をケプレル及びニュートンと比較してゐる。Manuscripts de Fourier, Paris, 1851, P. 4

を見よ。同様にまた彼の追隨者達によつてなされた、彼の教義の解説の中の任意のものを参照せよ。それらの中の各々に於て社會改造の實際的計畫はいづれもフリーエの理論的發見に依據して居る。

これらの間にベルンシュタイン氏は答へてゐない。彼がそれに答へない限り、彼によつて提供された「概念の區別」は、科學的社會主義の不可能性に關する彼の思想を確證せずして、反駁するであらう。がそれに答へることは彼は、それに答へるべき何物も有しないといふ單純な原因によつてなし得ない。勿論、醫術と社會主義との比較の理論的合法性は疑はれうるしまた疑はれねばならぬであらう。しかし正にそれを我々の著者は疑つてゐないのであり、疑ふことさへ出來なかつたのである、何故かといふに社會生活に對する彼の見地は少しもかゝる比較を排除しないからである。

かくて、ベルンシュタイン氏によつて提供された「概念の區別」は實に我々に科學的社會主義の不可能性を確信させなかつたばかりでなく、その反對に、エル・オーエン、フリーエ及びその他の空想家達の社會主義すら、少くとも一部分、科學的社會主義であつたといふ思想を受容れることに傾かしたその結果として我々には、それのお蔭で我々が今日まで、マルクス——エンゲルスの社會主義學説は社會主義の歴史において劃時代的なものと考へてゐたその「概念の區別」が不明瞭になつて來る。ひとり我々にとつてこの「區別」が不明瞭であるばかりではない。ベルンシュタイン氏にあつても同様にマルクス——エンゲルスの教義はその中にフリーエ、オーエン及びサン・シモンの教義に比して遙

かに大なる科學的要素を含んでゐるとはいへ、しかし、より小なる程度においてではあるが、科學的要素と並んで空想的要素をも含んでゐる、だから彼等の間の差異は質的よりは寧ろ量的性質である。

(これによつては特に二二、二二、二八、二九、三〇頁を見よ。)

ベルンシュタイン氏の報告においてかゝる意見は全く自然である、若しも科學的社會主義が一般に不可能であるならば、マルクス主義も亦、多かれ少かれ空想的の混在が附物であるところの、それらの「主義」の一つであることは明かである。しかし科學的社會主義の不可能性に對するベルンシュタイン氏の確信は、正當に解釋される時、對蹠的に正反對の結論に導くところの、即ち我々をして科學的社會主義は、科學的醫學と同様に、全く可能であることを承認させるところの、さういふ前提に基礎を置いてゐるが故に、我々は、「批判者」君の論理的矛盾の中に完全に迷ひこまない爲めに、彼によつて紡ぎ出された議論の糸を棄て、自分の側において、かう自問することにする、最後にそれでは如何に科學的社會主義は空想的なそれと異なつてゐるか？

これに答へる爲めには、社會主義の二つの形態のそれ々々の特徴を規定しなければならぬ。本小冊子の一四頁においてエンゲルスは言つてゐる、「空想家達の世界觀はその後永く十九世紀の社會主義思想を支配しかつ部分的には今日においても尙ほ支配しつゝある——凡てのイギリスの社會主義者及び、ごく最近に至るまで、凡てのフランスの社會主義者、同様にまた、ワイトリングを含めての、初期のドイツ共產主義者は皆なそれを奉戴してゐた。社會主義は、彼等の觀念によれば、絶對

眞理、理性及び正義の表現であつて、従つてそれがそれ自身の力によつて全世界を征服しうるやうにそれを発見することだけが必要なのであるが、絶対眞理は時間、空間及び人類の歴史的發展に依存しないが故に、何時どこでそれが発見されるかは、最早まつたく純粹の偶然に屬する。」

この箇所に関してベルンシュタイン氏はエンゲルスの誇張を責めてゐる、「私は彼に同意することが出来ない、——と彼は言つてゐる、——彼等（空想家・社會主義者）の意見によれば彼等によつて見出された眞理の発見の時間及び場所は歴史的發展から獨立の偶然に屬すると彼が言ふ時。かゝる一般的な形で語られたのでは、この命題は歴史に對する彼等の見解を不當に描出するのである。」

註1 Ibid, S. 30. 註。

若しもベルンシュタイン氏も少しよく空想的社會主義の文献に通じ、も少し深く空想家社會主義者の基本的な歴史の見解を考へて見る骨折りをなしたならば、彼は自分でも、エンゲルスの言葉の中には誇張の影すらもないことを見出しえたであらう。

フリーエは、彼が道徳的吸引の法則を発見することに成功したと固く信じてゐた、しかし彼は曾て自己の理論を、フランスの社會的發展の成果として、觀察することを知らなかつた。彼は一度ならず驚きをもつて、何故に人々が數百年前若しくは數千年前にすら、彼が、遂に成遂げえたところのそれら

の發見に到達しなかつたかと自問した。そして彼は人々の盲昧と、及び偶然性の力とを指摘するだけで自分に答へることが出来た。この點に關して彼は極めて特徴的な議論を『偶然の暴虐』について書きさへもした、そこでは彼は「この大なるしかも輕蔑された力は殆ど完全にすべての發見を制約する」ことを證明してゐる。彼の言葉によれば、彼自身これに大なる犠牲を自己の『吸引に關する發見』(dans la découverte du calcul de l'attraction) に於て献げた。彼は、ニュートンと同様に、林檎によつて彼の思想に驅り立てられた。「この、光榮に値する林檎に對して、パリのフェヴリエ料理店では私と一緒に食事をした或る旅行者が十四スウを支拂つた。私は當時これと同様のまたはこれよりも良質的林檎が半リヤルドで、即ち百個に對し十四スウ以下で賣られてゐる地方からやつて來たばかりであつた。同一の氣候の二つの地方に於けるこの價格の相違が私を強く驚かした、そして産業的機構に根本的缺陷のあることを思はせた、こゝからして四年の後に私を産業群の並列の理論の發見に、またその後ニュートンによつて氣付かれなかつた、全般的運動の法則の發見に導いたところの研究が發生したのである……その後私は、その中の二個は彼等が原因となつた不幸によつて有名となり（アダムの林檎とパリスの林檎）、他の二個は科學を豊富にしたことによつて有名になつたところの、四個の林檎を數へらることを知つた。この有名な四個の林檎は歴史において特別のページに値しないであらうか？」

註1 Les manuscrits de Fourier, p. 14. 同様2 Oeuvres Complètes, t. 4, Paris 1844, p.p. 3, 4, 5 参照せよ。

註2 Ibid, p. 17.

これは既にこれだけでも可成りに表現的であると思はれる。しかしこれはまだ全部ではない。フーリエの理論において偶然は、四個の林檎に關する幼稚な思想を基礎としてそれに割當てることが出来るよりも尙ほ一層廣汎な役割を演じてゐる、即ち偶然によつて、この理論においては、人間の見解の全歴史的發展及び人間の偏見の全運命が決定される。若しも人々がかくも長い間文明に對する自己の歡喜を頑強に持ち續けて來たとしたら、——とフーリエは言つてゐる、——それは何人もベーコンの忠告に従ふことをせず、各々の職業の諸惡及び諸缺陷の批判的な分析をなさなかつた故である。1) 何故に何人もベーコンの忠告に従ふことをしなかつたか？ 極めて簡單である、何となればそれに従はなければならぬといふ考を人々に起させるやうな偶然が起らなかつたからである。それ自身一般的な規則からの例外であるに過ぎないところの、人類の眞實の運命からの一偏向に過ぎないところの事物の現存的秩序は「運命の一般的な目的を深く考へ (oublierent de spéculer sur l'universalité de la Providence)」、それが人間的關係の爲めに制定しなければならなかつた法典を探索することが必要であるのを忘れた詭辯家達の輕率』のお蔭で、必要以上に持續的なものとなつたのである。2)

註1 Oeuvres Complètes, t. 4, p. 121.

註2 Manuscrits de Fourier, p. 78.

この後で讀者は自から、上に我々によつて引用されたエンゲルスの言葉の中に一滴の誇張でもが含まれてゐるかどうかを判断することが出来る。

他の偉大なる空想家達においては偶然性の歴史的全能に對する信仰はフーリエについての如くそれほど明瞭に表現されてゐないし、恐らく、それほど大ではないのである。しかし如何なる程度までそれが彼等の中の最も冷靜なロバート・オーエンにおいてさへ力強いものであるかは、彼が自己の社會主義的計畫を、本質的に人間による人間の擄取を維持することに關心を持たされてゐるこの世界の強者達に提供したといふ單純な事實が示してゐる。かゝる提供は人間性の教化に關するエル・オーエンの全教義に甚だ相應しからざるものであつた。この教義の直接的なかつ明確な意味によれば、この世界の強者達は如何にしても、その影響の下に彼等自身の見解が作り上げられ、またその存立と密接に彼等の最も本質的な利害が關聯してゐるところの、その社會秩序の廢除に際して發議權をとり得ないのである。しかもそれにも拘らずロバート・オーエンは疲れることなくまた注意深く、詳密なる計算、精確なる計畫、及び美事な見取圖の助をかりて、ヨーロッパの君主達に、「合理的」な社會組織が如何に成立つかを説明したのである。この意味において彼は、すべての空想家・社會主義等と等しく、偉大な



るフランス啓蒙學者達の血縁の兄弟であつた、彼等のところから（主としてエルヴェシユースのところから）彼は殆ど全部自己の人間性の教化に關する教義を借りて來たのであり、彼等もまた、彼と同様に、比較を絶する善き運命に相應しい頑強さをもつて、王冠を戴ける「立法者達」に向つて、如何にしてまた何によつて人類の幸福は保證されるかを説明したのであつた。彼等は雄辯に「專制君主」を震撼した、しかも彼等は開化的、專制主義に對する自己の希望を頑固に持ち續けてゐた。この矛盾は眼を突いたし、勿論、彼等自身の注意を免れなかつた。彼等は皆なそれを意識してゐた——或者はより大なる、他の者はより小なる明白さをもつて、何れにしても彼等は皆な正に偶然性に對する希望によつて自からを慰めてゐた。こゝに大きな壺があり、その中に非常に多くの黒球と二三の白球があり、そして諸君が球を一つ々々取出すと假定せよ。各個々の場合において諸君が黒球よりも白球を取出すことが遙かに少ないことは言ふまでもない。しかし、この動作を相當の回数繰返した後、諸君は必ずや、最後に白球をも取出すであらう。王冠を戴ける「立法者」についても同じことである。各個々の場合においては王座の上に善き「立法者」よりも惡しき「立法者」を見出す機會は遙かに多いのである。しかし、最後に、善き「立法者」も現はれる。この者が「哲學」の豫定してゐるところの一切を行ふ、そしてその時理性が勝利をうる。

かくフランスの啓蒙學者達は觀察してゐた、そしてこの、本質において、深く悲觀的な彼等の「哲學」の完全なる無力の承認を意味するところの見解は、彼等の一般的歴史觀と緊密なる因果關係にあ

つた、周知のごとく、確信的な唯物論者であつた十八世紀のフランス啓蒙學者達でさへもが、歴史に對する觀念的見解を懷いてゐた。歴史運動の根本的原因として彼等が考へてゐたのは知識の發達及び一般に人類の知性的發展であつた。そしてこの意味において空想家・社會主義者達は完全に彼等と一致してゐた。即ち、譬へば、エル・オーエンは、社會に暴威を揮つてゐる害悪は人間性の教化に對する人々の誤れる見解によつて發生する、ところがこの誤れる見解は、こんどは、人々が自身自身の本性を知らないことによつて條件づけられる、と言つてゐる。この結果として社會的害悪の除去も、唯だ單に人々の間における彼等の本性に關する理解の普及に期待しなければならなかつた。エル・オーエンは、かゝる理解が必ず彼等の間に普及されるであらうことを固く信じてゐた。「人間は經驗によつて知識を獲得し、また自分自身の本性の諸法則への服従の道によつて幸福を獲得する爲めに創られてゐる。」——と彼は死の數箇月前に書いた。しかし經驗は知識ではないか。何によつてその多かれ少かれ急速な蓄積は條件づけられるか？ 何故に或る歴史時代に於ては人類が知識の巨大なる寶庫を獲得し、それに反して他の時代には、屢々比較にならぬほどの長期に亘つて、彼等の古い貯蓄に全く取るに足らぬ破片をだけ附加へ、また時として貯蓄そのものをも喪失するのであるか？ この歴史的現象の科學的説明のために極めて重要な問題に對して、オーエンは答へなかつた。また答へることが出来なかつた。これに對しては一般に、歴史に對する觀念論的見解を抱懷してゐる人々は答へてゐない。また答へることが出来ない。そしてそれは當然である。それに答へる爲めには、彼等は何によつて人

類の知性的發展は條件づけられるか説を明することが、即ち、従つてこの發展を歴史的過程の根本的原因としてではなく、他の、より深く横はつてゐる、歴史の觀念論的解釋の無力を承認することになる原因の結果として觀察することが必要である。かゝる承認に到達しない者は、必ずや偶然性に對して歴史的事件の説明においてまた未來についての自己の考察において極めて廣汎な場所を與へなくてはならない。偶然性は彼のために、彼が歴史上の人物の、意識的活動によつて説明しえざる、一切を説明してくれる。偶然性の引證は、人間意識の發達がそれから獨立の諸原因によつて條件づけられるといふことの承認への無意識的または必然的な第一歩である。それ故にこそ十八世紀の啓蒙學者達及び社會主義者・空想家達がかくも屢々偶然性を引證したのである。フリーエの『四個の林檎』は今日においてはフランス啓蒙學者達の球を充たされた壺と同様に滑稽である。しかし『壺』も、『林檎』も歴史に對する觀念論的見解の特殊性の中に自己の充分なる基礎を有してゐた、そしてかゝる見解を奉じてゐた政治および社會改革者達及び革命家達は、他の俗人共以上により屢々『壺』にも、『林檎』にも、その上に尙ほ多くの意表外な事に訴へざるをえなかつたのである。事實において、若しも知識蓄積の歴史的過程が究極において社會生活の行程並びに社會關係の發展と何ら必然的關係を有せざる一聯の偶然的現象によつて條件づけられるのであつたら、知識の一般的寶庫へのあらゆる個々の積重ね、それ或は他の思想家達によつて爲される各々の發見は、——それにはそれ或は他の社會改造の計畫の立案者も屬するのであるか、——不避可的に偶然性の贈物と考へられなければならない。が若しも眞

理の發見が偶然性に依存するならば、その普及、その社會生活への多かれ少かれ急速なる具體化も亦同じ『巨大なるかつ輕蔑された力』に支配されるべき筈である。こゝに——今日我々を驚かしてゐるところの啓蒙學者及び社會主義者のこの世界の強者達との交渉が由來する。實踐は彼等において理論に、『技術』は——『科學』に、相應してゐた。

註1 Neue Auffassung etc., S.S. 65-66 を見よ、尤もこの思想は決定的に彼の著述の全部に亘つて繰返されてゐる。

註2 單行本の形式で出版された彼の傳記の第一卷の補遺に於ける、虚偽と罪惡の制度が眞と美の制度に前行すべきであるといふ幸福の獲得のための、事物の本性に於ける、絶對的必然性に就いて、なる標題を與へられた、非常に興味ある彼の覺書を見よ、XXX-XXXIII.

成程、社會主義者空想家達にあつては、既に時として、彼等によつて啓蒙學者達から相續された理論に對する強い不満、觀念論の狹隘な圈内から脱出して、より現實的な地盤の上に立たんとする努力が認められる。彼等は社會科學を創始せんと努力してゐる。こゝから凡ての彼等の『發見』は來てゐる。これらの發見の或るものは、言葉の完全な意味において著大なるものである。

彼等は歴史的過程の多くの最も重要な方面に、——譬へば、西ヨーロッパ社會の近代史に於ける階

級闘争の役割に、——明るい光を注ぎ入れた、そしてさうすることによつて社會現象の科學的説明を準備した。しかし彼等は正にそれを準備したのみである。史的觀念論は、その見地に十九世紀の前半のすべての社會主義者達は立つてゐたのであるが、社會生活に對する科學的見解を作り上げることに非常に困難した。科學的説明には唯だ合法的な現象のみが從屬する。諸現象の合法性は彼等の必然性の法則への從屬を前提する、しかるに史的觀念論は歴史運動を殆ど専ら人々の意識的な、従つてまた、自由なる活動の成果として觀察する。この矛盾が除去されない限り、社會生活の科學的説明は不可能であつた。所が當時の社會主義者達は嘗にこの矛盾を解決しなかつたのみでなく、然るべき精確さをもつてそれを定式化することさへも知らなかつた。その明確な意識と精確な定式化とを與へたものはシェーリングを代表とするドイツ哲學であつた。

註1 『共產黨宣言』への我々の序文を見よ。

シェーリングは、人間の行爲の自由は必然性を排除しないばかりでなく、反對に、それを自己の條件として前提することを指示した。<sup>1)</sup> シェーリングのこの深遠な思想は確實にまた詳細にヘーゲルの著述において發展させられた。普通の言葉に翻譯するならば、それは、人間の活動は二つの方面から觀察されうるといふことを意味する、第一に、彼は我々の前に、それ或は他の社會現象の原因として現

はれる。彼がかゝる原因として自己を意識してゐる限り、彼は、これらの社會現象を喚び起すかそれともそれを喚び起さないかは次第であると考へてゐる。そしてその限りに於て彼は自己の活動を意識的なまた自由なるものと考へる。しかし、所與の社會現象の原因の資格において我々の前に現はれる人間は、他方において、自己の影響によつて彼の性格の調和及び彼の意志の傾向を決定したところの、それらの社會現象の結果として、觀察されうるしまたされねばならない。結果として觀察される社會的人間は自由なる行爲者とは考へられえない、何となればその運動を規定したところのそれらの諸事情は彼の意志から獨立であつたからである。従つて、今や彼の活動は我々に、必然性の法則に從はされたところの、即ち合法的な活動として現はれる。かくて、自由は決して必然性を排除せざることをなす。この眞理の知識は極めて重要である、何となればこの眞理は——そしてそのみが——我々の爲めに社會生活の科學的説明への道を拓く故である。我々はすでに科學的説明には必然性の法則に從屬するところの現象のみが歸せられるべきであることを知つてゐる。若しも社會的人間が我々の社會現象の原因としてのみ知られるのであつたら、彼の活動は我々の表象にその自由の方面からのみ近づきうるものとなり、そしてそれ故にそれは永久に科學的説明にとつて近づきうべからざるものとして残るであらう。十八世紀の啓蒙學者達及び十九世紀の社會主義者達は、歴史に關する自己の議論において、社會的人間を社會現象の原因としてのみ觀察してゐた。このことは彼等が歴史に對する觀念論的見解を奉じてゐた故に起つたのである、知性的發展の中に歴史運動の最深の原因を見る者は

人々の意識的活動のみを考慮に入れる、しかるに意識的活動は我々が自由なるものと呼んでゐるところのその活動なのである。<sup>2)</sup>

註1 《System des Transcendenten Idealismus》, Tübingen 1800, S. 422 及び以下。エマ・ベリトフの『歴史に對する一元論的見解の發達の問題』一〇五頁及び以下を参照せよ。

註2 『必然性は、その對立物自由においては、正に無意識的なるものである、』と正當にもシェーリングは言つてゐる (I. cit., S. 424)。

必然性は自由を排除しない。のみならず、意識的なまたこの意味において自由なる人々の活動は、唯だ彼等の行爲が必然的である故にのみ可能的である。これは逆説と見えるかも知れない、しかしこれは——無條件的眞理である。若しも人々の行爲が「必然的」でないならば、それを豫知することは不可能であらう、が如何なる豫知もあり得ない所には、周圍の生活に對する意識的影響の意味における自由なる活動の爲めの場所もない<sup>1)</sup>。かくて、必然性は自由の擔保として現はれる。

註1 『私はそれら(私の同市民達の行爲)を唯だ、若しも私が彼等を、私を圍繞する世界の他のすべての現象と同様に、即ち既に私に知られてゐるか又は知られらうところの一定の諸原因の必然的結果として觀察し

うるならばといふ條件においてのみ豫知することが出来るであらう。換言すれば、私の自由は唯だ、その意識が私の近親者の自由なる行爲を惹き起す諸原因の理解によつて伴はれうる場合、即ち私がこれらの行爲を彼等の必然性の側から觀察しうる場合にのみ空論たらざるをうるであらう。それと全く同じことを私の近親者達は私の行爲についても言ふことが出来る。それは何を意味するか？ それは、あらゆる與へられた人物の自由な(意識的な)歴史的活動の可能性は、若しも自由なる人間行爲の基底に行爲者の理解しうる必然性が横はつてゐないならば、無に歸することを意味する。(エマ・ベリトフ、『歴史に對する一元論的見解』一〇六頁)。

すべてこれを既に偉大なるドイツの觀念論者達は美事に説明した、そして彼等が社會生活に關する自己の意見に於てその見地を護つてゐた限り、その限りに於いて彼等は科學の堅牢な地盤の上に立つてゐた。しかし正に彼等が觀念論者であつた故に、彼等は適當に自分自身の天才的な思想を利用することが出来なかつたのである。成程、彼等の哲學的理想主義は歴史に對する觀念論的見解に必然的に結付けられてゐたのではない。ヘーゲルは自己の『哲學史講義』において、勿論理性が世界を支配するのであるが、しかし彼はそれを彼が天體の運動を支配してゐる意味において、即ち合則性の意味において、支配するのであると述べてゐる。天體は一定の法則に従つて運動する、しかし彼等の運動は無意識的に止まる。同様にして、ヘーゲルによれば、人類の歴史運動も亦行はれる、それは或る一定

の法則に従属する、しかし人々はこれらの法則を知らない、そしてそれ故に歴史運動は無意識的であるといふことが出来る。人々は、彼等の思想が歴史運動の主要なる要因と考へてゐる時、誤つてゐるあらゆる與へられた時代の思想はそれ自身この時代の性質によつて規定される。その上ミネルヴの梟は夜のみ飛ぶ。人々が自分自身の社會關係に思をひそめ始める時、その時、これらの關係は既に自己の時代を終へて新しい社會秩序に場所を譲らうとしてゐるのだと確信をもつて言ふことが出来るのであり、この新しい社會秩序の眞性質が人には明かになるのは唯だ、彼にも亦舞臺から引下がる時が来るであらう時に於てのみである。

註1 エヌ・ベリトフ、第一卷、引用文、一〇一頁。

これらのヘーゲルの議論はかの粗朴な思想、——歴史の觀念論的説明の本質をなすところの、——即ち歴史運動は究極において理念の發展によつて條件づけられるといふこと、或は當時フランスの啓蒙學者達が表現した如く、世界は「意見」によつて支配されるといふ事からは極めて遠い。これらの議論の中には確かに少くとも、何をもつて歴史運動を説明してはならないかが示されてある。しかしこの中には、勿論、その眞實の原因に對する指示も亦存しない。またそれは彼等の中にあり得なかつた。假令ヘーゲルはフランス啓蒙學者達及び社會主義者・空想家達の素朴な史的觀念論からは遠かつ

たとしても、それは少しも彼の體系の觀念論的基礎を動かすものでない、がこの基礎は社會的・歴史的過程の全く科學的なる説明を妨げざるを得なかつた。ヘーゲルによれば全世界の發展の基礎には絶對理念の發展が横はつてゐる。この理念の發展によつて、彼においては、結局、全人間歴史も亦説明される。だがこの絶對理念とは何であるか？ それは、——既にフォイエルバッハが非常に美事に示した如く、——思惟の擬人化されたる過程に外ならぬ。結果は、一般的には世界の發展及び部分的には歴史發展が人間の思想の法則によつて説明されるといふこと、或は別の言葉をもつて言へば、歴史は論理學によつて説明されるといふことになる。どの程度までかゝる説明が不満足なものであるかはヘーゲル自身の著述を見れば解る。歴史運動は彼にあつては唯だ、それが論理學によつてではなく、社會及び、特に、經濟關係の發展によつて説明されてゐる場合にのみ理解しうるものとなつてゐる。即ち、彼がラケドモンは主として經濟的不平等の結果として没落したと言ふ時、この説明はそれだけで充分明瞭であり、また完全に近代史學の結論に一致する。しかるに絶對理念はこの場合まつたく何等の關係もない、そしてヘーゲルがギリシヤ及びラケドモンの運命を完全に解明する爲めにこの絶對理念に立ち向ふ時、彼は既に經濟への指示によつて説明されたところのものに絶對に何物をも附加へてゐないのである。

註1 彼《Grundsätze der Philosophie der Zukunft》§ 23 参照。

註 2 これについて詳細には一八九一年『ノイエー・ツァイト』に掲載された我々の論文《Zu Hegels sechsstem Todestag》を見よ。

ヘーゲルは好んで、觀念論は唯物論の眞理として自己を曝露すると繰返した。しかし彼の『哲學史』は正にその反對を證明する、それは少くとも歴史への適用においては、唯物論は觀念論の眞理として承認されねばならないことを示してゐる。社會的・歴史的過程の科學的説明のための眞直なそして確かな道を完全に続けることが出来るためには、研究家達は觀念論のあらゆる種類と絶縁して、唯物論的見地に移らなければならなかつた。それがマルクス及びエンゲルスによつてなされたのである。彼等によつて完成された唯物史觀は本小冊子において次のやうに特徴づけられてゐる。

『唯物史觀は次の命題から出發する、すなはち生産、および生産に次いで生産物の交換が、あらゆる社會的構造の基礎であること、歴史上に現はれた一切の社會において生産物の分配及び是れに伴ふ社會の階級的または身分的の構成は、何が如何に生産され且つその生産されたものが如何に交換されるかによつて定まること、これである。この見解に従へば、あらゆる社會的變動および政治的革命的窮極の原因は、これを人間の頭に、すなはち永劫の眞理や正義に對する人間の洞察の増進に求むべきではなくて、むしろ生産方法や交換方法の變動に求むべきであり、換言すれば——與へられた時代の哲學に求むべきではなくて、經濟に求むべきである。現存の社會關係が漸く不合理と見え、不公正

と見え、Vernunft Unsinn, Wehthat Plage geworden (理性が無意味となり、善が悪となつた)といふ考への起るのは、これはたゞ全く知らぬ生産方法や交換形態のうちに變動が行はれて、從來の經濟條件に合わせて作られた社會秩序が最早それに適合しなくなつたことの證據であるに過ぎぬ。上述のことからして、發見された害惡を除去するの手段も亦多かれ少かれ發展せる形において——これらの變動せる生産諸條件そのもの、中に存在しなければならぬことは明かである。人間の頭はこれらの手段を案出しえない、彼はそれを生産の與へられた物質的現象の中に發見しなければならぬ。』

若しも現存の社會關係の不合理及び不公正の意識がそれ自身社會的・經濟的發展の結果であるならば、理性及び正義に關する彼等の概念によつて條件づけられるところの人々の意識的活動の中にも、一種の合則性が見出されうることは明かである、この彼等の活動は窮極において經濟關係の發展によつて規定される故に、社會の經濟的發展の方向を明かにしたる上は、我々は正にそれによつてその諸成員の意識的活動が如何なる方向に向はなければならぬかを豫知するの可能を受くることゝなる。かくてこの場合、シェーリングにおけると同様、自由は必然性から流出し、必然性は自由に轉化する。しかしシェーリングが、自己の哲學の觀念的性質の結果として、この點に關して一般的な——非常に深遠ではあるが、——考察以上に進まなかつたのに反して、唯物史觀は我々にこれらの考察を『生きた生活』の研究のために、社會的人間の全活動の科學的説明のために、利用することを許すのである。

社會的人間の意識的活動をその必然性の見地から觀察する可能を與へつゝ、唯物史觀は正にそれによつて社會主義のために科學的地盤への移り行きの爲めの道を拓く。我々によつて引用された行句の中にエンゲルスは、社會的害惡の除去の手段は案出され得ない、即ち如何なる天才的思想家によつても考へ出されることは出来ない、が與へられた時代の變動せる經濟關係の中に發見されなければならぬと言つてゐる。かゝる發見が可能である限りにおいて、科學的社會主義もまた可能である。我々は従つて、ベルンシュタイン氏によつて提出された科學的社會主義の可能性に關する問題に對して非常に決定的な回答を持つのである。成程、ベルンシュタイン氏自身はあだかもかゝる回答の存在を夢にも知らないかの如くである。しかしそれは唯だ、この者が殆ど二十年間に亘つてその追隨者を以て任じて來た、それらの人々の教義の根本を全く理解しなかつたことを證明するに過ぎない。

考へ出すことの出来るのは全く存しないところのものである、發見することの出来るのは唯だ、既に現實の中に存するところのものである。それゆゑ經濟的現實の中に現代の害惡を除去する爲めの手段を發見するといふことは何を意味するか？ それはこの現實の發展そのものが既に未來の社會秩序の經濟的基礎を創造しまた創造しつゝあることを示すことを意味する。

空想的社會主義は抽象的原理から出發した、科學的社會主義はブルジョア社會の經濟的發展の客觀的行程を發足點とする。

若しも現代の社會的害惡の除去の手段が人間本性に關する一般的考察の基礎の上に考へ出されるこ

とが出来ず、現代の經濟的條件の中に發見されなければならぬとしたら、その發見もまた上述の諸條件からは獨立の、偶然事であり得ないことは明かである。否、この發見そのものが科學的研究によつて近づくべき合法的過程なのである。

唯物史觀の基本的命題は、人々の思惟は彼等の存在によつて規定されること、若しくは歴史運動の過程においては理念の發展行程は究極において經濟關係の發展行程によつて規定されることを宣言する。若しもさうであるならば、新しい經濟關係の發生は必然的に生活の變化せる諸條件に相應する新しい人々の出現を促さねばならず、また若しも或る天才的な人間の頭に或る新しい社會・政治思想が浮んだとしたら、若しも彼が、譬へば、舊き社會秩序の非存立性と新しきものによつてのその變更の必然性を見出したとしたら、それは「偶然に」生じたのではなくて、——社會主義者・空想家達が考へてゐた如く、——全く理解しうべき歴史的必然性によるものであることは明かである。そしてまたそれと全く同様にこの新しい社會・政治思想の普及、その天才的な人間の支持者達によつて分け持たれることは決して偶然的であるとは考へられ得ない、それが普及するのは新しい經濟的諸條件に適合してゐるからであり、また正に他のすべてのものよりも死滅しつゝある社會秩序の不利益をより多く經驗しつゝあるその階級または住民の層に普及するのである。新思想の普及の過程は同様に合理的な過程である。が新しい經濟關係に相應する思想の普及に次いで、早かれ晩かれその實現即ち舊きもの、廢除と新しい社會秩序の勝利が續く筈である故に、社會的發展過程の全行程、——その種

種なる方面とそれに固有な革命的契機とをもてる全社會進化は、——今や必然性の一角に於てのみ理解されうる事を意味する。そしてその時、科學的社會主義を、空想的なそれから區別するところの主要な特性が明瞭に我々の前に顯現する、科學的社會主義の信奉者は自己の理想の實現を、歴史的必然性の問題として觀察する、それに反して空想家は偶然性に自己の主たる希望を繋いでゐた。これに相應して社會主義宣傳の方法も變化する、空想家達は、今日は教養ある君主達に、明日は企業好きな且つ利潤に對して貪慾な資本家達に、明後日は非利己的な人類の友、等々に呼びかけながら、行き當りば、つたりに活動した。科學的社會主義の支持者達は整然たるまた徹底的な綱領を有するが、その深い基礎をなすものは唯物史觀である。彼等は社會のすべての階級からの社會主義に對する同情を期待しない、何となれば彼等は、與へられた革命思想に同情を表するその階級の可能性は彼等の經濟状態によつて規定されることを知つてゐるからであり、また彼等は、現代社會のすべての階級の中にあつて唯だプロレタリアートのみが、運命的に彼等を現存社會秩序との闘争に驅り立てゝゐるところのさういふ經濟状態にあることを知つてゐるからである。こゝでは、凡ゆる場合にさうである通り、彼等は社會的人間の活動を社會現象の原因と見る見解に満足してゐない、彼等の眼光は更に深く透徹して、この原因自體が經濟的發展の結果であることを見てゐる。こゝでも、凡ゆる場合にさうである通り、彼等は人々の意識的活動を、その必然性の見地から觀察してゐる。

註1 我々の服従に對する唯一の慰安は、時々現はれる英明の仁君である。然るとき不幸な者達は一瞬間彼等の災厄を忘れる。さう有名なグリムは十八世紀において論じた(デュクローからの引用、—— *Les Encyclopé-*

*distes*, Paris 1900, p. 160)。誰でも解るやうに、グリム及び彼の同意見者達の希望は偶然性に懸かつてゐた。

しかし我々は既に、社會主義者・空想家達がこの點においては十八世紀の啓蒙學者達と殆ど異らなかつたことを知つてゐる。成程、啓蒙學者達は君主達にのみ期待してゐたが、社會主義者・空想家達は有産者の中の普通の人間からも奇蹟を待望してゐた。この相違は變化した社會關係によつて説明される、しかしそれは歴史に對する同様の見解によつて條件づけられたる根本的な相似を排除するものではない。

『若しも貧困と奢侈、饑餓と飽滿といふ激烈な對立を伴ふ今日の勞働生産物の分配方法の革命に當面しつゝあるに對して、單にこの分配方法が不公正であり、やがては正義が最後の勝利を獲なければならぬといふ意識以外に何等よりよい保證を我々が有しないならば、それは餘りにもみじめであり餘りにも氣長な話である。千年の王國の到來を夢みた中世の神祕家も、階級對立の不公正といふ意識は既に持つてゐた。三百五十年の昔、新たな歴史の入口において、トーマス・ミュンツェルは、既にそれを全世界に向つて聲高く叫んでゐる。イギリス及びフランスのブルジョア革命において、同じ叫びが響き渡り、そして消え去つた。然るに今や若しも階級對立と階級差別との廢止を求める同じ叫びが、即ちかの一八五〇年に至るまでは惱める勞働大衆によつて冷淡に聞き流されたこの同じ叫びが、



今や幾百萬もの反響を見出したとしたら、若しもこの叫びが一國また一國を、しかもそれ／＼の國において大産業の發展すると同じ順序、同じ強さで席卷してゐるとしたら、若しもこの叫びが、これに對抗して同盟せる一切の勢力に反抗し得るのみならず、勝利を近き未來に確信し得るやうな、一つの力を一世代の間に獲得したとしたら、——抑もそれは何に由來するのであるか？ 曰く、一方には近世の大産業がプロレタリアートを作り出したからである、即ちそれ或は他の或る特殊な階級組織の廢止乃至はそれ或は他の或る特殊な階級特權の廢止ではなくて、實に階級一般を、廢止せんとするの要請を歴史上はじめて提起し得る一階級を、然りこの要請を遂行しなければ支那の苦力の境遇に没落するのほかなき状態におかれた一階級を、作り出したからである。そしてまた他方には、この同じ大産業がブルジョアジーなる一階級を作り出したからである、即ち、あらゆる生産手段および生活資料を獨占しながら、しかも好景氣やそれに續く恐慌ごとに、もはやその手におへなくなつた生産力を引續き支配しえなくなつたことを曝露するところの一階級、即ち恰もその強く塞ざされた安全瓣を機關士も開けえない蒸汽機關のやうに、社會を己が指導のもとに破滅に向つて突進せしめつゝあるところの一階級を作り出したからである。換言すれば、それは、近世の資本主義的生産方法によつて生み出された生産力やこれによつて作り出された財貨分配の組織が、かの生産方法そのものと激烈な矛盾に陥るに至り、しかもその程度たるや、近世社會全體の没落する場合はいざ知らず、さもない限り一切の階級差別を廢除するところの生産方法及び分配方法の革命が起らざるを得ないほどのものであるとい

ふことに由來するのである。被搾取的プロレタリアの頭のなかに抵抗し難き必然性をもつて、多かれ少かれ明かな姿で迫り來るこの明白なる物的事實にこそ、——然りそこはかとなき書齋裡の讀書者の正、不正の觀念にはなくて、この事實にこそ、近世社會主義の必勝性の基礎は存するのである。』

註1 《Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft》, dritte Auflage, S.S. 161—162.

さうエンゲルスはデューリングとの自己の論争において言つた。そしてこれらの彼の言葉の中には既に我々によく知られてゐる科學的社會主義の特殊性が鋭く現はれてゐる、合法的な社會的過程としてのプロレタリアートの解放運動に對する見解、唯だ必然性のみが自由の勝利を確保することが出来るといふ確信、これである。

註1 我がベリンスキイが、自己のヘーゲル心酔の初期において、暫く自由愛好的傾向から斷然絶縁した時、彼は正にそれによつて自己の理論的思想の深さの驚嘆すべき且つ反駁すべからざる證據を與へた。自由愛好的傾向に對する彼の拒否は正に、自由の勝利は歴史的必然性によつてのみ保證されうるといふ意識によつて喚び起されたのである。ロシアの現實においてかゝる勝利の客觀的不可避性の如何なる前兆をも見出しえないところからして、彼はそれに對する一切の希望を、歴史的に無意味なるものとして放棄したのである。後

年彼自身、彼は『否定の思想を發展せしめ』得なかつたと告白した。この思想がブルジョア社會への適用において科學的社會主義の創始者達によつて發展せしめられたのである。

一三六

テーヌは何處かで、完全なる科學は完き精確さをもつて概念の中に諸現象の本性と連続性とを再現すると言つてゐる。かゝる科學は各個々の現象に關して誤謬なき豫斷をなすことが出来る。そして社會科學がかゝる精確さを持つてをらずまた持ち得ないことを示すから容易なことは何もない。しかし科學的社會主義は曾てかゝる精確さに對する自負を表明したことはなかつた。彼の反對者達が社會學的豫斷は不可能であるといふ考察を彼に反對して推し進める時、彼等は二つの非常に異つた概念を、すなはち與へられた社會的過程の方向および一般的結果の概念と、この過程がよつて以て組成されてゐるところの個々の現象(事件)についての概念とを混同してゐるのである。社會學的豫斷は個別的な現象の豫斷に關する一切の場合に於ては、極めて大ならざる精確さを持つてゐるしまた常に持つてあらう、それに反してそれは社會的過程の一般的性質と方向とを決定しなければならぬ所では既に著しい精確さを持つてゐる。例をとらう。統計は、死亡數が一年の時季に關聯して動搖することを示す。與へられた國または與へられた地方におけるこの増減を知ることによつて、一年の或る時季から他の時季への移りかはりに當つて如何なる程度において死亡數が増加しまたは減少するかを豫言することは困難でない。この場合問題は與へられた社會的過程の一般的性質および傾向にあるのであつ

て、こゝでは極めて精確な豫言が可能である。しかし若しも我々が、正に如何なる個別的な現象の中に、譬へば、秋の到來と共に現はれる死亡の増加が現はれるかを知らうとするならば、若しも我々が正に如何なる人々が秋に死亡するかまたこれらの人々の死を伴ふところの根本的原因是に如何なるものであるかといふ問題を提起するならば、この問題に對して我々は社會科學からは永久に答を受取ることが出来ないであらう、そして若しも我々が依然としてその解決を迫るならば、我々は或る何等かの妖術者若しくは豫言者に向はねばならぬであらう。他の例。與へられた國の議會に、その所得が隣國の競争の結果として著しく低減しつゝある大地主の代表者、正にこれらの隣國において自己の商品を販賣しつゝある工業家の代表者、及び、最後に、自己の勞働力を賣ることによつてのみ生活しつゝあるプロレタリアの代表者があると假定せよ。かくして構成された議會に外國から輸入される麥に高い税をかけようとする法案が提出される。諸君はどう考へるか、社會學者は、異なる社會階級の議會における代表者達が如何にこの提案を迎へるかを豫知することが出来るかどうか？ 我々はこの場合社會學者は、——またひとり社會學者なる科學人のみならず、或種の政治的經驗および常識を奪はれてゐない人は誰でも、——誤謬なき豫斷をなすの完全な可能を持つてゐると考へる。「地主代表は、——と彼は言ふであらう、——全力をつくして上記の提案を支持するであらう、プロレタリアートの代表は同じく精力的にそれを否決すべく努めるであらう、そしてこの點において企業家の代表は彼等に劣らぬであらう、若しも地主代表が何等か他の領域における或るどんなかの重要な經濟的讓歩をもつ

て彼等の賛成を買ふことをさへしないならば。』この豫断は異なる社會階級の經濟的利害の分析を基礎としてなされるであらう、そしてそれは確かに、——少くともそれが地主およびプロレタリアに關する限りにおいては、——數學的結論の決定性と正確さを持つであらう。更に、——その中に代表された諸階級の各々が議會において占める投票數を知ることによつて、我々の社會學者は容易に且つ誤謬なく我々にとつて興味ある提案の運命を豫断しうるであらう。こゝでも彼の豫断は再び極めて大なる程度に正確さと確實さを持つことが出来る。しかし若しも諸君が、與へられた社會的過程の、——與へられた提案によつて惹き起された鬭争過程の、一般的な性質と方向に關する知識だけに満足せずして正に何者がこの法案に關して多數を制するかまた正に如何なる議會の光景が未來の辯士達によつて生み出されるかを事前に決定することを欲するならば、その時社會學者は諸君に向つて最早科學的な豫断をもつてではなく、多かれ少かれ機智に富める豫想をもつて答へるであらう、そして若しも諸君がそれに足れりとしなないならば、諸君は再び魔術にとりかゝらねばならぬであらう。第三の例。若しも諸君が十八世紀の偉大なるフランス啓蒙學者、——譬へば、ホルバツハナリ、——の著述を取るならば、諸君はその中にフランス大革命の一切の社會的綱領を發見するであらう。しかも諸君はその中においてフランス啓蒙學者達によつて全第三階級の名において提出されたところの、諸要求の實現過程を作り出したそれらの歴史的事件に關する一つの豫断にも出遭はぬであらう。どこからこの相違は來るか？ どこからであるかは——明かである、與へられた社會的過程の性質および方向は一事である。

その總和からそれが組成される個々の事件はまた別の一事である。若しも私がその性質と方向とを理解したとせば、私はその歸結を豫断することが出来る、しかしこの過程に對する私の理解がどんなに深からうとも、それは私にそれ／＼の個別的な事件を豫知する可能を與へぬであらう。社會學的豫断は不可能である、或は少くとも非常に困難であると言ふ時には、殆ど何時でも個別的な事件の豫断の不可能若しくは困難を言つてゐるのであつて、かゝる豫断が全く社會學の任務でないことを全然忘れてゐるのである。社會學的豫断は個々の事件ではなくして、それは譬へば、ブルジョア社會の發展過程のやうに、既に與へられた時機において行はれつゝあるところの、その社會的過程の一般的结果を自己の對象としてゐるのである。これらの一般的结果が豫め決定されうことはそれは上に引用されたフランス革命の例がよく示してゐる、その一切の社會的綱領は、我々が述べたやうに、ブルジョアジエの前衛的文學的代表者たちによつて、定式化されてゐたのである。

註1 自己の最近に發表された著書、《Les classes Sociales, analyse de la vie sociale》におつて、パリ大學の教授マウエル (Bauer) は社會學的豫断に對する同様の見解を發表してゐる。彼の著書は多くの點において興味あるものである。唯だ残念なことには、尊敬すべき教授は彼によつて展開されつゝある見解の歴史に殆ど通じてゐない。彼は、自己の『先驅者』たちの中に哲學者シェーリング及びヘーゲルをまた社會主義者マルクス及びエンゲルスを數へなければならぬことを夢想だにしてゐないやうに見える。

科學的社會主義は曰ふ、第一に、社會主義的理想の勝利は、自己の必須條件として或る一定の、社會主義者たちの意志からは獨立の、ブルジョア社會の經濟的發展行程を前提する、第二に、この必須條件は、今や現實に存在し、この社會に特有なる生産關係の性質によつて條件づけられる、第三に、現代の資本主義諸國の勞働階級における社會主義的理想の普及そのものがこれらの諸國の經濟的構造と發展とによつて煮き起されたものである、と。かくの如きは科學的社會主義の一般的思想である。そしてこの一般的思想は、社會學は決して上述の意味における完全なる科學とはならぬであらうといふ全く正當な考察によつて少しも反駁されることはないであらう。然らばかゝるものは無からしめよ！このことからどうなるか？社會學は完全な科學でこそないが、しかし科學的社會主義の一般的思想は依然として争ふべからざるものである、そしてそれ故にかゝる社會主義の可能性に對する疑惑は亦やはり根據なきものである。

科學的社會主義の可能性に關する論争においてブルジョアジエの理論家およびマルクスの『批判者たち』は屢々なほ次の如き證明を提出する。「若しも科學的社會主義が可能ならば、——と彼等は言ふ、——ブルジョア社會科學もまた可能である筈である、がそれは——無意味なる矛盾語である、何となれば科學は社會主義的でも、ブルジョアのでもあり得ないから。科學は——一つである、ブルジョア經濟學は、社會主義的數學と同様、無意味である。」

この論證もまた概念の混同に基づいてゐる。數學は社會主義的でも、ブルジョアのでもあり得ない、これはその通りである、しかし數學に適用して正しいものが、社會科學への適用においては誤りなのである。

直角三角形において二邊の平方の和は何に等しいか？斜邊の平方に等しい。さうであるか？さうである。常にさうであるか？常にさうである、斜邊の平方の二邊の平方の和に對する關係は變化しない、何となれば數學的圖形の特質が不變であるからである。何を我々は社會學において見るか？その研究の對象は不變にとゞまるか？否、とゞまらない。社會學的研究の對象となるのは社會である、が社會は發展する、そしてそれ故に、變化する。實にこの變化によつて、この發展によつてブルジョア社會科學の可能性が、科學的社會主義のそれと等しく創造されるのである。社會は自己の發展において或る一定の段階を通過する、それに社會科學の或る一定の發展段階が相應する。我々が譬へばブルジョア經濟學と呼ぶところのものは、經濟科學の一發展段階であり、我々が社會主義的經濟學と呼ぶところのものは、直接的にその後を續くところのその發展の他の段階である。そこに何の不思議があるか？何處にこの場合無意味なる矛盾語があるか？

ブルジョア經濟學は單なる迷妄から成つてゐると考へることは非常なる誤りであらう。決してさることはない！ブルジョア經濟學が社會的發展の一定段階に相應してゐる限り、その限りに對してそれは科學的眞理を内包してゐる。しかしこの眞理は正にそれが社會的發展の或る一定の段階にのみ相

應してゐる故に相對的である。しかるにブルジョアジの理論家たちは、社會は永久に自己のブルジョアの段階にとゞまらなければならぬものゝ如く想像して、自己の相對的眞理に絕對的意義を歸せしめてゐる。こゝに科學的社會主義によつて修正されるころの、彼等の根本的誤謬が包まれる、これの出現は社會發展のブルジョア期が自己の終末に近づきつゝあることを立證するものである。科學的社會主義、それは——ヘーゲルの所謂、そしてそれは、彼の言葉によれば、與へられた社會秩序の太陽が沈む時に初めて飛立つところの、ミネルワの梟そのものである。繰返して言ふ、何處にこの場合矛盾があるか？ 何處に無意味があるか？ こゝには常に矛盾も、無意味もないばかりでなく、ここに於て初めて科學的發展過程そのものを合法的過程と看做しうる可能性が受取られるのである。

註1 そして正にそれ故に研究家達の階級的ブルジョアの見地は、自己の時代において科學の進歩を妨げなかつたばかりでなく、その必須條件であつた。『共產黨宣言』への序文において我々はこのことを復位時代のフランスのブルジョア歴史家の例をとつて示した。

それはどうあらうとも、科學的社會主義の主要なる特性は我々にとつて今や充分の明確さをもつて決定された。その支持者たちは社會主義的理想が自己の昂揚的な性質のお蔭で全般的な同情を惹きつけ、そしてそれ故に勝利するであらうといふことに對する希望をもつては満足しない。否、彼等に

は社會主義的理想による全般的同情のこの吸引そのものが必然的な社會的過程であるといふ確信が必要であり、そしてこの確信を彼等は現代の經濟關係とその發展行程の分析の中から汲み取つてゐるのである。<sup>1)</sup> 現存の社會秩序の擁護者達は、必ずしも常に明確に意識してゐるわけではないが、この主要なる特質が社會主義學說の主要なる力ともなつてゐることを非常によく感じてゐる。それゆゑにこそ彼等の『批判』は正にこの方面に向けられるのである。彼等は通常、經濟の中に社會的發展の主要なる發條を見ることが出来ないといふ議論から始める、何となれば人間は胃のみから出來てゐるのではないからであり、何となれば彼は靈魂、良心、及びその他の不壞の寶庫を持つてゐるからである。しかし社會科學の最も主要なる根本的任務が何にあるかを理解しえないブルジョアジの現今の理論家たちの、完全なる無能力を立證するこれらの感傷的な議論は、彼等にあつては援軍の役割を演じてゐるのである。彼等の議論の主要なる力は現代の經濟的發展の方向についての問題に集中されてゐる。こゝで彼等は科學的社會主義のすべての命題を一つ／＼反駁しようと努めてゐる。<sup>2)</sup> そして彼等の努力は何等の結果をも齎さないのであるが、しかし彼等は絶えず自己の攻撃を新たにしてゐるしまた新たにせざるを得ない、何となればこゝでは彼等にとつて貴重なる社會秩序の實現そのものに問題があるからである。彼等は、若しも經濟的發展が實際科學的社會主義の追隨者たちが言ふ如く進むのであつたら、社會革命は不可避的であることを意識してゐる。がこの意識は科學的社會主義の可能性の承認と同じことである。

註1 或る二三の著述家たち、譬へは、シユナムラーの如きは、若しも社會主義の勝利が歴史的必然であるならば、社會民主黨の實際的活動は全く餘分であると言つてゐる。何故にそのまゝでも必ず到来するところの現象の發生に助力するのであるか？ しかしこれは哀れな滑稽な詭辯である。歴史的發展を必然性の見地から觀察する所から、社會民主黨は自分自身の活動をも、その總和が社會主義の勝利を不可避的なものにするそれらの必須條件の連鎖における必須の一環として觀察する。必須の環は餘分なものではあり得ない、それの除去は全連鎖を斷ち切ることとなるであらう。この詭辯の論理的薄弱は、上に我々によつて自由と必然性について語られたことを理解した者にとつては明かである。

註2 これについては『ザリヤー』第二―第三號に掲載された我々の論文『わが批判者の批判』を見よ。

我々は科學的社會主義の一特性を示した。デューリングとの自己の論争においてエンゲルスは更にもう一つのそれを示してゐる。この社會主義は剩餘價值の本質と發生との發見以來初めてその端初を受けたのであり、そしてその全體はこの發見の周圍に『集まつて』ゐるのであると彼は言つてゐる。社會主義運動の目的は一社會階級の他階級による、プロレタリアートのブルジョアジーによる搾取の廢除である故に、科學的社會主義が可能的となつたのは、科學が一般的には階級的搾取、また部分的にはそれが現代社會に現はれてゐるその形態の性質を決定することに成功した時以來である。このことが爲されなかつた間は、社會主義は多かれ少かれ漠然たる希求の領域を脱することが出來ず、事物の

現存秩序に對するその批判には、主要なるもの、どこにこの秩序の經濟的重心は存するかといふ、その理解が缺除してゐた。剩餘價值の發見はかゝる理解をそれに附與した。この發見の意義が如何に偉大であるかは事物の現存秩序の擁護者達が全力を竭してその眞實性を反駁しようとしてゐる一つの事情がよくそれを示してゐる。限界效用説が今や非常なる歡迎をブルジョア經濟學者の側から受けてゐるのは、正にそれが濃密なる雲霧をもつて労働者の資本家による搾取の問題を隠蔽してゐるからであり、かゝる搾取の事實そのものを極めて疑はしきものにさへしてゐるからである。

註1 ホーム・ハウネルクの『Positive Theorie des Kapitals』なる著書のイギリス譯が出た時、イギリス・ブルジョアジーの最大の機關紙『The Times』は彼を『搾取説 (Exploitation theories of the marxist school) に對する最良の解毒劑』として歡迎した。ブルジョア社會秩序は没落に傾きつゝある。これと並行してブルジョア科學の没落もまた行はれつゝある。ブルジョアの社會關係を辯護しつゝ、ブルジョアジーの理論家達は最も低級なる詭辯家の水準にまで落ち込みつゝある。

しかし剩餘價值の發見が社會主義史上いかに重要であらうとも、科學的社會主義は、若しもブルジョアの生産關係の、従つてまた、ブルジョアジーによるプロレタリアートの搾取の除去が、現代の經濟的發展の全行程によつて條件づけられる歴史的必然性として理解されなかつたならば、やはり不可

能的であつたであらう。

なほ數言。この小冊子への附録の一つにこの版においても、以前の版におけると同様、有名なる著書《Herr Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft》（「オイゲン・デューリング氏の科學の變革」）の中の「デューリングの『暴力論』の批判に献げられた三章が載せられてある。これらの章の中には、就中、新時代の文明諸國家における戦争技術の歴史の概要、同様にまたこの技術の發展と社會の經濟的發展との因果關係の分析が含まれてゐる。折衷主義に對する傾向を有する人々には、これらの章は『一面的』であるやうに見えるかも知れない。『すべてを經濟で説明することは出来な』』とかゝる人々は言ふであらう。それゆゑ我々は彼等の注意を自己の出現を軍事専門家に負うてゐるとする『Les maîtres de la guerre. Frédéric II—Napoléon—Moltke. Essai critique d'après des travaux inédits de M. général Bonnal par le lieutenant-colonel Rousset, professeur à l'école supérieure de la guerre』、『陸軍大學教授陸軍中佐ルツセ著、フリードリッヒ二世、ナポレオン、モルトケボンナル將軍の遺稿による論考。』と題された一著書に向けることを有益と考へる。この興味ある書物はエンゲルスによつて觀察されてゐるのと同じ對象に献げられ、そしてそれは殆ど全く同一の結論に達してゐるのである。『各々の興へられた歴史的時代の社會状態は、——と我々はその第四頁において讀む、——常に國民の軍隊組織に對してばかりでなく、尙ほ軍人の性格にも、能力にも、また欲求にも至大の影響を及ぼすものである。普通平凡の將軍は普通の方法を用ひ、普通的手段を實施し、そし

て彼等にとつて外的な事情が有利であるかまたは不利であるかによつて、勝利しまたは敗北する……偉大なる軍司令官に至つては、彼等は戰闘の手段方法を自己の天才に従はしめる、より精確には、彼等は、一種の本能的推測に導かれて、それらの手段をも方法をも社會進化の並行的法則に適準して變改してゐるのであつて、その戦争技術への決定的な影響は彼等のみがよく評價しうるところである。』これは極めて歴史の唯物的説明に近い、尤も引用されつゝある書物の著者は明かにそれについて少しの理解をも持つてはゐないのであるが、何故なら、若しも戦争技術の發展が社會發展によつて規定されるならば、が社會發展は——經濟的發展である、然らば、軍事的技術および單にこの技術のみでなく、同様に「軍人の性格、能力、及び欲求」も亦、究極において、經濟的發展によつて條件づけられることとなるではないか。自己の「二面性」によつて、あらゆる國民性の多くのそして多くのインテリゲンツ達を驚かしてゐるこの結論は、恐らく、戦争技術の發展が社會發展によつて、條件づけられることを承認することによつて、同時に、この發展がこんどは「科學、技術、及び産業の進歩によつて」（二頁）條件づけられることを承認してゐる我々の軍人の著者を驚かすことはないであらう。若しも彼が徹底的な思索の能力を奪はれてゐないならば、——が彼は、打ち見たところ、決してそれを奪はれてはゐない、——彼には社會的發展が經濟的發展の基礎の上に行はれ、經濟的發展は生産の發展行程によつて規定されるといふ歴史理論を理解することが甚だ容易であらう。

ボンナル將軍の出版されなかつた勞作を基礎として同じ著者によつてなされた、戦争技術の歴史

的概要は、我々がエンゲルスにおいて見るところの概要を甚だしく思ひ出さしめる。所々の類似はエンゲルスの反デューリング論がルツセ中佐の著書の發表よりも二三年前に出たといふ極めて單純な年代的考慮を除外して考へるならば、借物であると言へるほどに大なるものがある。ルツセ（若しくはボンナール將軍）がエンゲルスから借用したといふ反對の假定も亦同様に不可能であらう、偉大なるドイツの社會主義者の著述がこれらの學識あるフランスの士官達に全然知られてゐないことは保證出来る。問題は極めて簡單に、エンゲルスが軍事の精通者であつたこと、自己の歴史理論の基本的命題を社會生活の最も種々なる方面の研究に適用することの出來た徹底せる思想家であつたといふことによつて説明される。これらの基本的命題に導かれて、彼は明かに、ルツセ中佐の言葉によれば、天才的な軍司令官のみが見たところのものを、即ち戦争の技術に對する社會進化の決定的影響を、見ることが出來たのである。この部分的な場合は確信的に、正當に理解される場合、唯物史觀は實に「一面性」に導かないばかりでなく、それ以上であることは不可能であるほど、研究家の見解を擴大し尖鋭化することを示す。

我々はこゝで尙ほ謂はゆる常識の論理學に對する辯證法の關係についても語ることを欲した。しかし場所の不足はこの意圖を他の、より都合よき時期まで延ばし置くことを餘儀なくさせる。

一九〇二年七月

## 反シユミット論



## カール・マルクス及ゼフリードリヒ・エンゲルスに 反対するコンラッド・シュミット

讀者は、エツアルド・ベルンシュタインが「或る程度まで」カントに復歸しつゝあること、及び彼の復歸が「或る程度まで」コンラッド・シュミットの影響によつて惹起されたことを知つてゐる。然らばこの最後の者の哲學的見解は如何なるものであるか？

コンラッド・シュミット氏はこれらの自己の見解を、(一)《Ein neues Buch über die Materialistische Geschichtsauffassung》(『唯物史觀に關する新著』)なる標題で、一八九六年のベルリンの Akademiker (七月及び八月)に掲載された論文、(二)クローネンベルグの著書《Kant, sein Leben und seine Lehre》(『カント、彼の生活と學說』)に献げられた論文の中に説述した。この第二の論文は同じベルリンの新聞、一八九七年の十月一七日附の『Vorwärts』への第三附録に掲載された。

これらの二つの論文を我々はこゝで問題にするであらう。

若しもコンラッド・シュミットの言ふごとくであれば、マルクス及びエンゲルスは「認識論的觀念論」をそれがまだ決して顛覆されざるの時に顛覆されたものと宣言したのである。認識論的觀念論の

下にはカントの觀念論を理解しなければならぬ、これは自明のことである、ところがコンラッド・シュミットは斷然それを闡明してゐるのである。彼は言つてゐる、「ヘーゲルの辯證法的・進化論的……形而上學ではなくして、カントの『純粹理性批判』が觀念論の代表である。」

マルクス及びエンゲルスは實際カントの教義の敵であつた、そして正に次のとき根據においてさうであつたのである。

自己の注目すべき著述《Ludwig Feuerbach》(『ルードウィヒ・フオエルバッハ』)においてエンゲルスは、物自體の不可知に關するカントの教義はすでにヘーゲルによつて、が彼に次いで、かゝる深刻味をもつてではないとしても、フオイエルバッハによつて顛覆されたと言つてゐる。それに附加して彼はかう言つてゐる、「就中これらの哲學的考察は實踐そのものによつて、即ち經驗と産業とによつて最もよく論駁される。我々は我々の與へられた自然現象に關する理解の正しさを、我々自身がそれを喚び起し、それをその諸條件の中から發生せしめ、我々の目的に役立たせてゐることによつて證明することが出来る。かくてカントの物「自體」は終りを告げる。」

自己の著述「空想より科學へ」のイギリス譯への序文の中に於てエンゲルスは同様に、不可知論を批判しつゝ、論證してゐる。

『我々の不可知論者は、——と彼はそこで言つてゐる、——すべての我々の知識が、我々が我々の感情を媒介して受取るところの印象に基づくことを承認してゐる。しかし、——と不可知論者は訊ねる、

— どうして我々は、我々の感情が彼等によつて知覚される事物の正しい描寫を我々に與へることを知るのであるか？ そしてこの問に對する答として彼は我々に、彼が事物について或はその特性について語る場合、事實においてはそれをもつてこれらの事物若しくはその性質を意味してゐるのではない、彼はそれについては精確には何も知らないものであり、彼は唯だ彼等が我々の外的感情に起すところの印象を知るのみであると言ふ。これは、勿論、簡単な議論の力をもつてしてはどうにもすることが出来ないやうな見解である。しかし、人々は論證し始める前に、行動したのである。『初めに行ひありき。』そして人間の行爲はこの困難を、人間の知慧がそれを思ひ付く前に、除去したのである。『The proof of the pudding is in the eating』(「プディングの吟味は食つて見ることである。」)。

一たび我々がこれらの事物を、我々の外的感情が彼等の中に發見するところのそれらの性質に應じて使用するならば、我々は正にそれによつて我々の感情による知覚の正しさを誤謬を犯すことなき吟味に附するのである。若しもこれらの知覺が不正であるならば、與へられた物の與へられた使用の爲めの適合性についての我々の判斷も誤れるものでなければならず、そしてそれ故にこの物を我々の目的の爲めに利用せんとする我々の企圖は不成功に終らなければならぬ。若しも我々が我々の目的を達するならば、若しも我々が、物がそれについての我々の表象に適合してゐることを見出すならば、若しもそれが、我々がそれに豫定せるその使用の爲めに適切なものとして現はれるならば、それは、これらの範圍内においては物およびその性質に關する我々の表象が我々の外部に存在する現實と一致し

てゐるといふことの積極的な證明として役立つ筈である。』

かくて、『The proof of the pudding is in the eating』(「プディングの吟味は食つて見ることである。」) かくの如きはカントの教義に反對してまた不可知論に反對してエンゲルスによつて提出されたる主要なる論證である。

マルクスは一八四五年にフオイエルバツハに關する第二の論綱に次のごとく書いた時、本質上同一の論證に依據してゐたのである、『人間の思惟が對象を現實に存在する姿において認識しうるや否やといふ問題は、決して理論の問題ではなくして、一つの實踐的問題である。實踐によつて人間は自己の思惟の眞理を證明しなければならぬ、即ちそれが現實的な力を有し、諸現象の此岸に残在しないことを證明しなければならぬ。』

しかしコンラッド・シュミット氏はこの論證を最も薄弱なものとして考へてゐる。

『これは全く、——と彼は書いてゐる、外的自然の中に我々が聯關と合則性を見出し、そしてそれのお蔭で、合目的々に自然に反作用しうるところの事實、この事實が完全なる明瞭さをもつて、我々の自然の認識は現實の中に存在するところのものゝ認識であることを證明する、我々にはこの點に關して觀念論によつて提出される疑問を科學的に分析し覆へすべき何等の必要もない、我々は簡單にそれを空虚な思ひ付きとして、片づけ去ることが出来ると言ふのに等しい。』

他の箇所において彼はかう言つてゐる、『フオイエルバツハも、彼の影響を蒙つたマルクス及びエン

ゲルスも、根本問題の考察には入らなかつた、牡牛を捉へるに角においてしなかつた。』  
 コンラッド・シュミット博士がかう言ふことが出来たのは唯だ、彼自身が、カントの觀念論が如何なるものであるかを理解しなかつた故に、即ち唯だ、彼自身が牡牛を角において捉へえなかつたからに外ならぬ。

私は彼にこの問題を出来る限り簡単に説明することを努めよう。

現象とは何であるか？ それは——物自體の作用によつて喚び起されるところの我々の意識の状態である。さうカントは言つてゐる。この定義からは、與へられた現象を豫知することは物自體が我々の意識に及ぼす作用を豫知することを意味するといふことになる。今や訊ねる、我々は或種の現象を豫知することが出来るか？ 答、勿論、出来る。我々の科學および我々の工藝がそれを我々に保證する。しかしこのことは正に我々が前述の物によつて我々の上になされるであらうところの作用を豫知することが出来ることを意味するではないか。然るに若しも我々が物自體の我々に對する或種の作用を豫知するならば、それは我々に或種の彼等の性質が知られてゐることを意味する。が若しも我々に物自體の或種の性質が知られてゐるならば、我々はこれらの物を認識しうべからざるものと稱する權利を有しない。カントのこの「案出」は彼自身の教義の論理によつて擊破されて脱落する實にこのことをエンゲルスは自分のブツディングをもつて言はうと欲したのである。

彼の證明は數學の定理の證明と同様に明瞭で確實である。マルクス及びエンゲルスの理論的陣地は

近づき難い<sup>1)</sup>。しかもシュミット博士はそれを抜くべく全然試みてさへもゐないのである。彼は、かかる陣地を築くことは——觀念論を覆へすことではなくて、その考察を回避するものであるといふ意見に満足してゐる。私は誰が論争の對象を觀察することを「回避してゐる」か——マルクス及びエンゲルスであるか、それともコンラッド・シュミット氏であるかの判斷を讀者諸君にまかせる。

註1 これによつて私は決して、マルクス及びエンゲルスが初めて、カントに反對してこの證明を提出したものであると言はうとは思はない。本質的には、それを既にヤコービにおいて見出すことが出来る。しかしこのことは私にとつてこゝでは重要でない。私には唯だ、マルクス及びエンゲルスが資本主義を批判したのであつて、カー・シュミット博士が斷言してゐるやうに、『その觀察を回避した』のでないことを示すことが必要だけである。

多分、しかし何處でカントは、現象は物自體の我々に對する作用の所産であると言つたかと私に訊ねるであらう。『プロレゴメナ』の中の次の箇所が答を與へる。

『觀念論は、思惟する者以外に、他の如何なる存在もないといふ確信の中に成立つ、これに據れば我我によつて知覺される爾餘の物は、思惟體の表象、これらの存在以外の如何なる對象もそれに相應しないであらうところの表象に過ぎぬであらう。それに反して、私は主張する、物は我々に我々の外に

ある、我々の外的感情の對象として、與へられてゐる、しかしながら、これらの物がそれ自身如何なるものであり得るかといふことについては、我々は何も知らぬのである、我々に知られてゐるのは唯だ現象、すなはち我々の外的感情に作用して、我々の内部にそれが喚び起すところの表象のみである。それはかういふことを意味する、即ち、私は何れにしても、我々の外部に物體、即ちそれ自體としては全然我々に知られてゐないところの、しかしそれを我々が我々の外的感情に對する彼等の作用によつて我々の内部に喚び起される表象によつて知つてをり、またそれを我々が『物體』なる言葉をもつて——この我々に知られざる、しかも存在するところの對象の現象に、従つて、關係する言葉をもつて——現はしてゐるところの物が、存在することを認めるものである。これを觀念論と呼ぶことが出来るか？ これは彼に正反對である。<sup>1)</sup>』

註1 《Prolegomenen》, herausgegeben von J. H. von Kirchman, Heidelberg 1832, 39-40.

如何なる疑ひもこゝにカントによつて語られたことに關してはあり得ない、そしてそれがあり得ないならば、マルクス及びエンゲルスによつてなされた物自體の疑はしき非認識性に對する反駁もまた顛覆しえざるものとして残るであらう。これらの物を、彼等が我々の内部に喚び起すところのそれらの表象を介して認識することは、それは彼等を認識することを意味するではないか！『獨斷論者』、

唯物論者は曾て、物自體の認識の爲めに我々には彼等によつて我々の外的感情の上になされる作用以外、何等かの他の方法を持つてゐるとは言はなかつた。我々はこのことを充分に我々の論文『ベルンシュタインと唯物論』の中に示した。かしこに引用された引用文をこゝに繰返すことは無益である、しかしこゝに尙ほ二人の唯物論者の二つの短かい表明を引用するを妨げない。

ホルバツハは言つてゐる、『所與の物體が如何に我々に作用しようとも、我々は唯だそれが我々の内部に喚び起すところの變化によつてのみそのものゝ認識に達するのである。』

ラメットリーの《Abregé des Systèmes》(『體系の短縮』)においては我々は、我々は「外」物の唯だ若干の『全く相對的』な性質のみを認識しうるのであり、その上我々の感覺および表象の大部分は我々の器官に、これらの最後のものの中に行はれる變化に續いて直ちに變化するほどにまで依存してゐるのである、といふ興味ある意見に遭遇する。

『認識する』といふ言葉は、一般に、如何なるそれ以外の意味をも有しないことを記憶する必要がある。與へられたる物を識ることは正にその與へられたる物の性質を識ることを意味する。が物の性質とは何であるか？ それは正にそれが我々に對して間接的に或は直接的に作用するその仕方である。<sup>1)</sup>

註1 『物について識ることは、それが參加してゐるところのそれらの現象を基礎として思辨されうる以上ではあり得ない』Priestley [A free discussion on the principles of materialism] London 1778, 20. 物、屬

性、或は本質（好むごとく名付けよ）は唯だその我々に知られてゐる性質の列擧の中にのみ成立ちうる；  
 …若しも我々がすべての我々に知られてゐる性質を取去るならば、それについての表象を有しうるであらう  
 ところの何物も残らぬであらう、』同所、四六頁。

物自體は我々にとつて認識されざるものである、我々は唯だ彼等によつて我々の上に作られる印象のみを知つてゐると言ふことは、それは、若しも我々が物自體の我々に對する作用から引離されるならば、我々はどうして彼等が我々に對して作用しうるかを知ることが出来ないであらうと言ふのと同じである。若しも十八世紀の唯物論者たちが、我々は唯だ外面性、物の『外殼』を知るのであると言つたとしたら、それは彼等が本質において正に、私によつて上述されたことを言つたのである。がこれは——正しくない思想である、そしてそれを語つた唯物論者たちも、本質においては、假令それを意識してはゐなかつたとは言へ、自分自身の認識論に變更を加へてゐたのである。比較にならないほど美事にゲーテは表現した、

Nichts ist innen, Nichts ist draussen,

Denn was innen, das ist aussen!

内なる物なく、外なる物なし

何となれば内なる物は外なる物なればなり。

これこそは我々に興味ある對象に對する眞に唯物的なる見解である。

先きへすゝまう。物自體は我々に作用する、カントはそれを認めてゐる。對象に作用するとは——それによつて何等かの關係を有つことを意味する。従つて、若しも我々が——少くとも一部分——我々にたいする物の作用を知るならば、我々は——少くとも一部分——我々と彼等との間に存する關係をも知るのである。しかし若しも我々がこれらの關係を知るならば、我々には同様に——我々の知覺の媒介によつて——物自體の間に存する關係もまた知られてゐるのである。これは、勿論、『直接的』ならざる認識である、しかしそれは矢張り認識である、そしてそれが我々にある以上、我々は物自體の間に存する關係が我々の認識にとつて近付きえないと斷言すべき少しの權利をも有たぬのである。

物は我々の外的感情に作用して我々の内部に或る一定の感覺を喚び起す、カントはそれを認めてゐる。がこれは物が我々に感覺を起させることを意味するではないか。しかるにその同じカントが、原因性の範疇は、すべての爾餘の範疇と同様に、物自體には適用されないと言つてゐるのである。この場合彼は自分自身に明かに矛盾してゐるのである。

同様に激しく彼は自己に時間の問題においても矛盾してゐる。

物自體は我々に、明かに、時間内においてのみ、作用しうる、しかるにカントは時間を我々の直観の主観的形式に過ぎないと考へてゐる。

カントの教義の中には尙ほこれら以外の矛盾も存する、我々はこゝではそれらに觸れぬことにする。上に我々によつて語られたことは充分に、我々が、カント自身自己の『プロレゴメナ』の中に語つてゐることに全く同意して——物自體は我々の感覺の原因であるといふことを承認するであらう限り、矛盾を含むものとして残るであらう。

カント主義の或る二三の支持者はこの矛盾に氣付いて、そしてそれを除去しようと企てた。すなはち、譬へば、ラスキッツ博士は自己の著書『Die Lehre Kants von der Idealität des Raumes und der Zeit』(『空間および時間の理想的なることに關するカントの學說』) Berlin 1883 に於て、かう言つてゐる、『物自體にとつては時間も、原因性もないといふことは全く正當である、そして正にそれをカントは明かにしたのである。しかし誰が、物自體は我々の感覺の原因であると斷言したか？(我々はカント自身がそれを斷言したのを見た——ゲー・ペー。)カントの教義のこの誤れる解釋は屢々哲學者のところにおいてさへ出遭はれうる。物自體は、我々の意識に働きかけて、我々の感覺を喚び起すのであるといふことが絶えず言はれる、しかし Nounenon (眞實體) は、何か現實に存在するところのものに對立的なるものとして、如何なる作用をも現はしえないことは明かである。物自體はそれが好むところのものであり得る、我々の經驗にとつてはそれは全く無差別である。經驗は悟性と感性

との間の交互作用によつて發生する、そして物自體は常に我々の悟性の自分自身の限界に關する不明瞭なる表象以上のものではない、我々の經驗の性質に對してこの物は、鏡面上の反影が私の身體の運動に影響しないと同様に影響せぬのである。』

カント主義を救ふために、ラスキッツ氏は、カント自身との決定的な矛盾に落ち込んでゐる。この最後のものの全く明瞭な表象を存在しないところのまた存在しえないところのものであると説明することによつて。不思議な遣り方である！如何にしてラスキッツ氏はそれに駈け付けることが出来たか？

彼がそれに駈け付けることの出来たのは唯だ、カントに矛盾しつゝ、それと同時に彼がカント自身に依據することが出来たからである。

我々は既にカントが屢々自分自身に矛盾してゐることを述べた。譬へば、我々は彼の『純粹理性批判』において次の如く讀む、

「悟性は……感性を、この際自分自身の領域を擴張せずして、制限する、悟性は感性を、彼が唯だ現象にまで擴大するに過ぎないのに、物自體にまで擴大しようものと自己を考へる野望から警告する、かくて悟性は對象自體を思想する、しかし唯だ超越的客體としてである、それは現象の原因であつて、(それ自身は現象でない)、従つてまた量としても、現實としても、屬性としても考へられざるものである(それ故にこれらの概念は常に、その中において彼等が對象を規定するところの、感性的形

式を要求するのである。従つて、この客體に關しては、それが我々の内部にあるか或は我々の外部にあるか、全然知られてゐないのである……若しも我々がこの客體を、それについての表象の中に感性的要素を含まざるの故に、Noumenon (眞實體) と名付けることを欲するとせば、我々はそれに對して完全な權利を持つであらう。しかし我々は悟性の概念の一つをもそれに適用し得ざるが故に、この表象は我々として全く空虚なるものとなり、我々の認識の限界を定むる爲めにのみ役立つに過ぎない。<sup>501</sup>

註1 《Kritik der reinen Vernunft》 herausgegeben von Dr. K. Kehrbach. Reclam, Zweite Auflage. S. 235.

超越的客體は現象の原因である、しかし我々是我々の悟性の概念の一つをもそれに適用することは出来ない、すなはち、従つて、それには原因性の範疇もまた適用されえない。こゝに明かなる矛盾がある、しかし我々は暫くこの矛盾に觸るゝことをせぬであらう。彼が我々によつて上になされた『プロレゴメナ』からの拔萃において語つてゐることは、争ふべからざることである。これは何を意味するか？ 果して『プロレゴメナ』においてはカントは『純粹理性批判』におけるとは異なる見地に立つてゐるのであるか。

然りでもあれば、否でもある。『純粹理性批判』の見地は必ずしも常に一樣ではなかつた。この著述の第一版においてはカントは、我々の意識を除いては何物もそれに相應することのない、限界概念としての、物自體に對する見解に傾いてゐた、といふよりも、より嚴密に表現するならば、——カントは我々の意識の外なる物の存在に對して極めて懷疑的であつた。彼の見地は懷疑的觀念論の見地であつた。彼の支持者たちがこの點に關して彼を批難したところから、彼は自己の『プロレゴメナ』の中に上に私によつて引用された箇所を書き、また『現實的な』意味において自己の『批判』の第二版を改訂しようと試みた。これが證明としてはこの版への彼の序文と彼の『觀念論の顛覆』とを引證すれば充分である。しかしながら、彼にはこの改訂が成功しなかつた。第一版の見地は第二版の多くの箇所において透けて見える、また觀念論の顛覆そのものさへも『プロレゴメナ』の中に語られたことゝは反對の意味に解釋されうるのである。この事情のお蔭で、ラスキッツ博士はカント自身に依據しつゝカントに反對し得たのである。

これは争ふべからざることである。しかし自己の多數の矛盾に拘らず、カントが自己の『プロレゴメナ』の發表以來、すなはち一七八三年以來、自己の教義の觀念論的解釋に反對したこともまた同様に争ふべからざることである。我々は讀者がこの事實を記憶されんことを希望する。それは極めて重要である。

今やラスキッツ博士が自己のカント哲學の記述において到達した終局の結果が如何なるものである

かを見よう。

彼は言つてゐる、『全存在は主観および客観の二種類の存在に類別される。兩者ともに我々の意識の中にあり、兩者ともに同程度に現實性と確實性を具へてゐる。が我々の我れに非ざるとき存在がある。そしてそれをこそ我々は我々の外にある物と名付けるのである。これらの物は常に我々の意識の中に或る一定の秩序において排列されてをり、その結果として意識内において我々の我れに外的客體の世界が對立しうることとなるのである。』

註1 《Die Lehre Kants》S. 138.

讀者が尙ほよくラスキッツ博士の見地を理解しうる爲めに、我々は尙ほ次の行句に注意を拂はれんことを希望する、

『それは存在、現實的にして眞實なる存在が、精神的な性質をもつてゐることを意味する、そして他の如何なる存在もないのである……』

『あらゆる存在、我および非我なる存在は意識の一定の變化である、そして意識なくしては存在はなしのである……』

讀者は、勿論、我々がラスキッツを引用し續けてゐるものと考へてゐる。彼は誤つてゐる、最後の

二つの引用は我々によつてフイヒテからなされたのである。カント主義を救ふためにはすなはちその内的矛盾を除去するためには、ラスキッツ博士は主観的觀念論の動搖しつゝある見地を放棄しなければならなかつた。彼の新カント主義は多かれ少かれ意識的なる新フイヒテ主義に過ぎない。

註1 Fichtes Werke, II Band, S. 32. 3 Band, S. 2.

従つて、ラスキッツ博士はカー・シュミット博士と共に、觀念論の代表たるべきものは「純粹理性批判」であると言ひえないであらう。彼は觀念論はフイヒテの『哲學』において最もよく代表されてゐることを承認せねばならないであらう。條件的に、ねばならないであらうと言つて置く、何故なら彼はさうする勇氣を持合はしてゐないであらうからである、カントは、周知のごとく、彼の教義をフイヒテの『哲學』の意味に解釋することに反對した。従つて、彼は同様に我々によつてこゝに引用されたラスキッツ博士の著述に對しても反對することであらう。

註1 一七九九年八月七日附の自己の《Erklärung》によつて。

ラインホルドに與へた手紙の一つにおいてフイヒテはカントを《ein Dreiviertelkopf》(四分の三)



の頭)と名付け、カントにおいては聖靈の方がカントの個性よりも眞理に近いと言つてゐる。ラスキツツ一味の新カント派は、自分の番において、カントにかゝる特徴づけを贈ることが出来るし、また彼等が、若しも徹底的であるならば、さういふ風に彼を特徴づけなければならぬであらう。そして彼等が何を言はうとも、彼等は決して人々から、それが少しでも事理を辨へる者である限りは、彼等がカントの教義を棄て、主觀的觀念論に傾いたことを蔽ふことは出来ぬであらう。

勿論、リール教授の如く、——この移行を全然好まないやうな新カント派も存在する。<sup>1)</sup>この最後の種類の新カント派はラスキツツ博士に比すれば、自己の師に對してより忠實である。しかしその代りに彼等はより確實に自己の師のすべての矛盾をも保存してゐる。

註1 彼の著述《Der philosophische Kriticismus》第一卷、ライプチヒ、一八七六年、四二二—四二九頁および第二卷、第二部、一三八—一七六頁を見よ。

*Incidit in Scyllam qui vult vitare Charybdim!* (一難去つて一難來たる!)

『純粹理性批判』の如何なる版を觀念論の眞實の表現と考へるべきであるか? コンラッド・シュミット氏はこの點に關して我々に一と言も語らなかつた。彼は、思ふに、『批判』の第一版の見地が第一二版の見地と異つてゐることを夢想だにしてゐないのである。そしておまけに、彼は第一版も、第二

版も理解してゐないやうに見える。このことは、尊敬すべき博士の哲學的散文に通ずる骨折りをなすであらうところの者は誰でも、それ以上ではあり得ないほど確かなことであると考へるであらう。彼は、譬へば、かう書いてゐる、『それに依據してカントが、あらゆる哲學の迷妄を、即ち概念の助をかりて、經驗の限界の外に逸出しようとして形而上學的に努力しつゝある迷妄を曝露してゐるその認識論は、それ自身を完全なる現象論の刻印を捺されてゐる、即ちそれは我々が見かつ我々の經驗の對象となつてゐる世界を單なる現象と考へてゐる。』

カントは、若しも彼がマルクス及びエンゲルスから彼自身を辯護すべく立上つた人間によつて書かれたこれらの行句を讀んだならば、非常に驚くであらう。

經驗とは何であるか? それは實に、哲學の根本問題の解決、即ち主觀の客觀に對する、思惟——の存在に對する關係の規定、に着手するであらうところの者は誰でも答へなければならぬやうに、カントが答へねばならなかつた問題である。カントの認識論はこの問題に對する回答以外の何物でもない。それに答へつゝ、彼は、就中、如何なる相違が、彼の意見によれば、實體と現象との間に、物自体と現象との間に存するかを説明した。カントに同意せざることは出来る、——また我々は全然彼に同意してゐない、——しかし彼をコンラッド・シュミットが明かに考へてゐる如き、みぢめな表面的な思想家であると考へることは全く不可能である。若しもカントが簡單至極にも、我々は現象を見る、我々の經驗は現象に關係すると宣言したとしたら、それは、彼の哲學の基礎に譯のわからぬ *petitio*

Principii (循環論法) が、即ち尙ほ解決しなければならぬ問題を解決されたものとしての承認が横はつてゐることを意味するであらう。

『こゝに自然に問題が発生した。——と我々の博士は續けてゐる。——我々は一般に、我々が或る一定の方法で我々の外的感情の印象をそれに移入し、そしてそれを我々が原因および結果の範疇の助をかりて理解しうべきものにしてゐるところの、この外界についての直接的な知識を有しうるか、時間および空間の中に運動しつゝある物體界についての一般的表象は主觀的な性質を有しないか。』

カントの哲學における『外界』なる言葉は、我々の『外的經驗』に關係する所の或は——フイヒテが表現する如くんば、——我々の非我を成立てゝゐるところの、一切の現象を表徴する。諸現象、この一群に關する我々の知識が、我々の我に關係する現象の知識と同様に直接的であることを理解する爲めには、この哲學に最も表面的にでも通ずるだけで充分である。この方向においては如何なる『問題』も『發生』することは出来なかつた。それと全く同様にカントは、外界に關する我々の表象が主觀的な性質を持たないかどうかを自分に訊ねることは出来なかつた。それ以外の性質をかゝる表象が持ちえなかつたことは自明である。これについて訊ねることは——對象について何等の『表象』も持たないことを意味する。しかし『外界』なる言葉は同様に現象界の基礎をなす物體に關係することも出来た。カントは曾て、我々にとつて物體に關する直接的な知識が可能的であるかどうかの問題を起したことがなかつた。彼にとつて直觀は我々に對する物の作用から獨立なるものであつた、そして彼は

かゝる知識があり得ないことを非常によく知つてゐた。『何となれば、——と彼は自己の「純粹理性批判」の第二版において言つてゐる、——感覺することは自己の外部においてではなく、自己の内部においてのみ爲しうるからである。』しかしカントは自分にかう訊ねる権利があつた、——また實際訊ねた——我々は我々の意識を離れて物の存在することを信ずることが出来るかどうか。讀者は既に、彼がこの問題に對して如何に自己の生涯の異なる時機において答へたかを知つてゐる。今はシュミット博士がこれについて何を語つてゐるかを聞かう。

註I ケルバツハ版、三二〇頁。

『しかしカントにはこゝにも疑ひを挿むべき非常に有力な基礎があるやうに思はれたところからして彼はこの最後の一步を踏み出すことを恐れなかつた。空間および時間、物およびその助をかりて我が世界を解釋するそれらの概念は、彼にとつては何等か人間の表象および思惟の中にのみ存在するところのものである、この感覺、この表象および思惟がそれから流出する源泉として、彼は認識しえざるもの、物體を考へてゐる。全存在の最も深奥なる基礎は何等か到達しがたきものである、すべて實現されるところのものは不斷の奇蹟である、何となれば到達しえざるものから流出するが故である。この思想の無根據 (die Bodenlosigkeit) がフイヒテ、シェーリング及びヘーゲルの爲めに、遙か

に深遠なる且つ豊富なる思想の、しかしながら尙ほ一層空中に懸かり、尙ほ一層本質的な内容を失つたところの新しい形而上學の完成の爲めの前提を創造したのである。』

この長たらしい長文句全體の簡単な意味は、カントが我々の意識を離れての物の存在を否定したといふことである。我々にはかくも斷然たる斷定の『無根據』を曝露する必要はない、それは時間および空間の中において行はれた事實に矛盾する。

シユミット博士は、物は我々の意識内にばかりでなく存在することを確信してゐる。この側からして彼は可成り厳しくカントを（彼の『意識』内に存在するそのカントを）批難してゐる。『人間の意識から全く獨立な外界の存在をすら疑ひ始める悟性は、その足の下に鞏固な地盤を失つてゐるものである。』

こゝにおいて我々は『ケーニツヒベルグの哲人』を辯護すべく餘儀なくされるのを見る。

我々はすでに、『プロレゴメナ』（一七八三年）を出す時迄は、カントは斷然我々の意識から獨立な物自體の存在を認めてゐたことを知つてゐる。しかしこのことは彼に——物質の世界を現象の世界として觀察することを妨げなかつたし——また妨げることは出来なかつた。『唯だ經驗的な悟性においてのみ、——と彼は言つてゐる、——即ち經驗的關係においてのみ、物質は眞に我々の外的感情に……現象における實體として與へられる。』この物質に、従つてまた、それによつて形成される物質界に、我々の意識から獨立な存在を歸することは、カントの見地からすれば、至大なる、思惟にとつて許し

難き誤謬を犯すことを意味するであらう。

しかしそれは何れにしても、我々の博士はフイヒテの見地に移ることを拒否してゐる。それ故に我々は、我がカント哲學の矛盾を、すなはち上に我々によつて指摘され、またそれは新カント派の或る部分にとつてさへも明瞭であるところの矛盾を、如何に解決するかを我々に語つてくれることを要請する。正にこれらの矛盾にマルクス及びエンゲルスは自己のカント哲學の批判において依據したのではないか。

シユミット博士はこれらの矛盾の存在を承認するか？ 我々は斷然たる答を要求する、然りかそれとも否か？ コンラッド・シユミットは、彼等が實際において存在することを承認するものゝ如くである。しかしそれに留意する代りに、そしてそれを解決しようと試みる代りに、彼は次の如き『文學』をもつて我々を楽しませようとかゝつてゐる。

『しかしカント哲學によつて……思惟の前に開かれてゐる、——さういふ權利があるにしても無いにしても、——空虚な深淵は、この哲學の消極的成果に過ぎぬ、その眞に成果的な方面は研究の積極的部分に、即ち現象の中に場所を占める所の我々の心靈的・精神的組織 (Seelischgeistigen Organisation) の總體的作用に關する天才的な研究にある……しかしこゝに、我々の表象能力の構造の曝露に、『純粹性批判』の眞の課題、その解決にはカント以前また彼以後の何人もかゝる驚嘆に値する透徹力をもつては取りかゝらなかつた所の課題があるのである。そしてカントの分析は充分に満足な、矛盾

から自由にされた最終的な、この、恐らくは、科學的研究が提起しうる中の最も困難な課題の解決は與へなかつたとは言へ、それにも拘らず、内的世界の神秘的な源泉へのより深刻なる透徹の如何なる企圖もカントによつて爲されたことを無視しえないことは全く確かである……カントへの復歸は決してそれ故に反動的な意味における後退を意味するものではない。』

註1 【Vorwärts】の上述の論文。

かゝる『文飾』の助をかりては、勿論、カント哲學に對してなされる駁論の『検討を回避する』とは出来るが、しかしこれらの駁論を覆へすことは全く不可能である。

自己の『純粹理性批判』においてカントは我々の認識能力を研究することを課題としたのであつてシュミット博士が主張してゐるやうに、我々の表象能力ではないのである。何故に最も大なる精確を期して記述されなければならぬことを歪曲するのであるか？ しかしこれは序でもつて言ふのである。

出發點としてカントは既に出來上つた意識を取つてゐる、彼はこの意識をその發生の過程において觀察してゐない。こゝに彼の『意識の分析』の最大の缺陷が潜んでゐる、しかもカー・シュミット氏が發展の理論が科學のあらゆる領域において勝利を獲つゝある我々の時代においてこれに氣付かなかつ

たことは驚嘆に値しなければならない。

註1 この版への註『私は知らない、——とヒン・バックは言つてゐる、——カントの認識論を奉じてゐる哲學者たちが如何に發展に關する教義を處理しつゝあるか。カントにとつては人間の心は、自己の要素において不變量であり、所與であつた。彼にとつて問題は唯だ、その先天性を決定し、その中から爾餘の一切を導き出すことだけであつたのであつて、この性質の發生を示すことであつたのではない。しかし若しも我々が人間は漸次的に原形質の一塊から發展したものであるといふ公理から出發するならば、細胞の初等的な生活的發現から丁度また、カントにとつては『全現象界の基礎』であつたところのものを導き出さねばならぬで』  
 455r『Die Nachahmung und ihre Bedeutung für Psychologie und Völkerkunde, Leipzig 1904, S. 33』。しかしカント主義者たちは、彼等の理論が發展に關する教義に一致するか否かを考へてゐないのである。唯だ極めて最近に至つて彼等の中の或る者に、譬へば、ウキンデルメントにおいて、この點に關する或種の疑ひが生じ始めたのみである。

コンラッド・シュミット氏は、『物質界』は我々の意識の内部にばかりでなく、またその外部にも存在することを固く信じてゐる。我々が聞きたいのは、彼が、この、彼の意識の外に存在する、物質界が彼の認識能力に作用すると考へてゐるかどうかといふことである。若しも彼が我々に向つて——

否と言ふならば、彼は正にそれによつて主観的觀念論の見地に立つであらうし、我々にとつては、果して何物が意識から獨立に物質界の存在することを彼に信じさせてゐるのか解らなくなるであらう。また若しも彼が、然り、と言ふならば、彼はエンゲルス及びマルクスとともに、カントの「認識されるものは矛盾に充ちてゐることを承認しなければならぬであらう。論理學も亦「義務を負はせる」(obligé) また「高貴」(noblesse) よりも遙かにより多く義務を負はせるのである。

「すべての生活過程の基礎および源泉として、客觀の世界、すなはち意識に對する關係から獨立にそれ自身存在するところの世界に固く依據してゐる唯物論者は、觀念論者と同様に、我々の精神的組織の研究を回避することは出来ない。」——と尊敬すべき博士は續ける。

唯物論者は物質界の客觀的存在に固く依據してゐる。コンラッド・シュミット氏も同様に固くそれに依據してゐる。彼は「人間の意識から全く獨立に存在する外界の存在をすら疑ひ始める悟性は、その足の下に鞏固な地盤を失つてゐる」(上記の箇所を見よ)と信じてゐる。一方には「唯物論者」、他方には——カー・シュミット博士、兩者の見解の相違はどこにあるか？ 私は如何なる相違をも認めない。

しかし、讀者よ！ 相違はあるのである。「唯物論者」の歸結は前提に相應する、しかるにカー・シュミット博士は「折衷主義者」の雜炊を珍重してゐる。諸君はどちらを珍重するか、讀者よ、「唯物論者」をか、それともカー・シュミット博士をか？ 成程、de gustibus non est disputandum (趣味は種

種だから)。

「唯物論者」は我々の精神的組織の研究を回避することは出来ない。否、云ふまでもなく、否！ しかし我々の精神的組織を研究するその爲めに、「唯物論者」は現象のみを問題としました生物學から借りて來られた方法を使用する實驗心理學に向ふのである。これは——より確實な方法である。

しかしこれは最早唯物論ではない！——と我が學識ある博士は叫ぶ、「唯物論と觀念論の主要の相違を現象の世界において常に觀察される合則性の承認の中に見る者は、この對立の眞の性質を解消し、そしてそれによつて唯物論の概念からそれに固有の性質を奪ふものである。エンゲルス自身が特徴的な例證としてそれに役立ちうる。」

何故か？ 何を正にエンゲルスは唯物論と觀念論の相違について言つたか？

コンラッド・シュミット氏は「ルドウイツヒ・フォイエエルバッハ」の著書から次の箇所を引用してゐる。

『ヘーゲル哲學との分離はこゝでも(マルクスにおいて——ゲー・ペー)唯物論的見地への復歸によつて行はれた。このことはこの派の人々が現實世界を——自然および歴史を觀念論的な眼鏡をかけずに眺め、そしてその中に現はれてゐるものゝみを見ようと決心したことを意味する。彼等は斷乎としてその眞の、幻想的ならざる聯關において把握された現實世界の諸現象と一致しない一切の觀念論的見解を拒否しようと決心した。そして正にこゝに全唯物論は成立するのである。』

この箇所は、明かに、唯物論の完全な定義をその中に含んでゐない。しかるに何故にカー・コンラッド氏は他のどんなかの箇所ではなくして、正にこの箇所を引いてゐるのであるか？ 何故に彼はエンゲルスの次の議論を忘れたのであるか？

『既に中世の哲學において大なる役割を演じたところの、思惟の存在に對する關係の問題、何が何に先行するか、精神が自然にかそれとも自然が精神にか、といふこの問題は、……宇宙創造に關する問題のより鋭い形をとるに至つた……哲學者は、如何に彼等がこの問題に答へたかに従つて、二大陳營に分裂した。精神が自然よりも前に存在したことを主張した人々は……觀念論の陣營を構成した。自然を本源的なものとした人々は、唯物論の種々なる流派に屬した。』

エンゲルスによれば唯物論は、従つて、自然を精神に比して何か本源的なものを見るところの教義である。この定義は正しいか？

十八世紀のフランス唯物論者を思ひ起して見よう。彼等の理論の基本的命題は何であつたか？

『物質の種々なる結合と彼等に固有なる運動に、我々が自然の中に見る作用を歸することは、これらの作用に一般的な或る一定の原因を歸することを意味する、かゝる説明の範圍外に出ることは、無知と暗黒の深淵より外に、どこにも何物をも我々が見出さないところの、幻想的な遠方に迷ひ込むことを意味する。それ故に我々は常に存在したそれには常に運動が固有であつたところの自然の外に推進的原理を探索することをしないであらう。』——と『自然の體系』の著者は言つてゐる。——……何

故に自然の外に、それを運動に齎らした推進的原理を探索しなければならぬか？

註1 《Système de la Nature》一七八一年版、第二卷、一四六頁。

學識ある博士よ、尙ほ一つの拔萃をなすことを求められるか？ 満足をもつて！ 我々は貴下の爲めに尙ほ二つの最も確定的な箇所を引くであらう。

『自然の中には唯だ自然的原因と結果のみがあり得る。その中において行はれる一切の運動は恒久的なまた必然的な法則に従屬する、我々が我々の肉眼から隠れてゐるものについて判断しうる爲めには、我々が研究しました理解しうるころの自然の現象だけで充分である。我々は彼等について、少くとも、類推によつて、概念を構成することが出来る。そして我々が注意をもつて自然を観察する時その時自然が我々の爲めに開いて見せるそれらの現象は、彼女が我々から隠してゐるところのそれらの現象に當惑してはならないことを教へるであらう。その結果から最も遠い原因は、疑ひもなく、中間的原因を仲介して働いてゐるのである……若しも我々が、その原因の連鎖を研究しながら、我々の努力に及ばぬ障礙に當面するやうなことがあつても、我々はやはりそれを征服することに努めなければならぬ、そして若しもそれが我々に成功しないとしても、それはまだ、自然的原因の連鎖が切斷されてゐることを斷定せしめぬばかりでなく、我々に興味ある作用を超自然的原因に歸する權利を我々

に與へるものではない。この場合には我々は、自然の中には我々に知られてゐない力が存在するといふ承認に満足しなければならぬ、しかし我々は決して我々の研究に服従しない原因の代りに幻影、假想（エンゲルスをして言はしめるなら、案出——ゲー・ペー）を立てゝはならない。かゝる方法は唯だ我々の未知を増大し、我々の研究を困難にし、我々の迷妄を多くするのみであらう。<sup>1)</sup>』

註1 《Système de la Nature》第一卷、三八頁。

そして更に、

『自然は我々が識ることの出来るところの凡てを内包してゐると言はう。凡ては自然によつて爲されたのであり、自然が爲さなかつたところのものはあり得ないものであり、自然の外には何物も存在しないし存在しえないと言ふであらう。若しも我々が最後の原因を發見しえないならば、我々は（お聞きなさい、博士よ、お聞きなさい！）経験が我々に指示するところのより近くに横はつてゐる原因および結果をもつて満足しなくてはならない、我々は我々に近付きうるまた知られてゐる事實を觀察しなければならぬ、それは充分我々に未知のものについて判断させることを許すであらう。我々は我々の外的感情の媒介によつて我々に到達する真理の微光に満足しなくてはならない』（これは、シュミット氏よ、我々が決して経験の地盤を棄てゝはならないことを意味する——ゲー・ペー<sup>1)</sup>）。

註1 《Système de la Nature》第二卷、一六一—一六二頁。

『自然の體系』全體はこの思想の發展であるに過ぎぬ、そしてこの思想はこの有名な著述の著者といふよりも、より精確には、著者達の全唯物論的教義の根底に横はつてゐるのである。

我が學識ある博士は大なる利益をもつて更に他のフランス唯物論者の言葉を傾聴することが出来るだらう。

『人間は自然の創造物である、彼は自然の中に生活してゐる、彼はその諸法則に従つてゐる、彼はそれから自由になることは出来ない、彼は自己の思想においてさへも彼等の範圍外に出ることを許されない……自然によつて創造された存在物にとつては、彼がその一部であるところの、この偉大なる全體の範圍外には何物も存在しない……自然以上であると言はれるそれらの存在物が、怪獸以上のものではなく、従つて我々は彼等について何等かの表象を持つことは出来ないのである。』

註1 《Le vrai sens du système de la Nature》第二章および著作集《Recueil nécessaire》の序文、ライプチヒ、一七六五年。

「人間が、不幸なことには、人間の範圍外に飛び出さうとしたところから、彼は可見の世界（博士よ現象の世界である——ゲー・ベー）を超越しようとする企圖をなしたのである。彼は憶測によつて生きる爲めに、經驗の地盤を棄てたのである。」

註1 Free discussion, p. 76.

貴下はすべてこれをどう考へるか、コンラッド・シュミット氏よ？ 我々には、我々の舊師エンゲルスが正當であるやうに思はれる。我々には、唯物論は實際において、自然をそれ自身の力によつて説明せんとし、また自然を『精神』に比して何等か本源的なるものと見てゐるところの教義であるやうに思はれる、我々には最後に、エンゲルスによつて與へられた唯物論の定義は最も一般的なまた最も満足的なものとして承認さるべきであるやうに思はれる。

私は、最も一般的であると言ふ。しかし私は、一般的な規則には例外もまたあることを知つてゐる。譬へば、イギリスの唯物論者たちは自然を超越するところの存在があることを認めてゐた。それにはデョセフ・プリストリを指示するだけで充分である。彼の教義は多數の全く非唯物論的な懸垂物で裝飾されてゐる。しかし凡てこれは彼等にあつては正に唯だ懸垂物であつて、そしてイギリス唯物論

者たちがこれらの懸垂物に重要な意義を附してゐる限り、彼等は唯物論者であることを止めてゐるのである。かゝるものとしての、彼等の唯物論は、靈魂と身體との關係に關する問題の觀察によつて制限を受けてゐるのである。しかしこの問題に關して言へば、彼等の見解は明白で決定的であつた。

「私が私の我 (my self) と名付けるところのものは、——とその同じプリストリが言つてゐる。——組織化された物質以上ではない。」そして彼は更に附加へて、人間の内部に非物質的根元の存在を認めることは全く出来ないと言つてゐる。『それによつて人間の内部における非物質的根元の存在が認められたところのその同じ基礎において、或る一定の力若しくは性質を具へたあらゆる個々の存在物（實體とプリストリに言つてゐる）にもかゝる根元の存在を認めなければならぬであらう。』

註1 Free discussion, p. 123.

私によつて上に引用された著書 (Le vrai sens du système de la Nature) (『自然の體系の眞意』) はエルヴエシユースに歸せられてゐる。シュミット博士は、この興味ある、そして町人どもによつてかくも甚だしく中傷された著述家の唯物論に關する多少とも明瞭な觀念を持つてゐるかどうか？ 私は少しなりとも彼にそれを紹介するの勞を取るであらう。

シュミット博士が我々の意識から獨立な外界の存在を疑つてゐないのに反して、エルヴエシユース



にとつてはこの存在は唯だ蓋然的なるものであつた。この蓋然性(その存在の)は、疑ひもなく、極めて大である、従つてそれから流出する歸結は眞實性に等しい、しかし依然としてそれは蓋然性以上ではない。

註1 Oeuvres complètes d'Helvétius. Paris 1828, 第一卷、五一六頁、註。

このことはそれを期待することさへも不可能であつたほど意外である、すなはちカー・シュミット博士は十八世紀の唯物論者の一人と比較しても「獨斷論者」の役割を演じてゐるのである。それでゐて何の「進歩」であるか!

シュミット氏は、恐らく、誤謬を犯したのは正に彼、學識ある博士であつて、彼が修正しようと思ひ立つたフリードリッヒ・エンゲルスでないことを今や承認すべく同意するであらう。

有名なイギリスの生物學者ハックスレーは自己の論文の一つにおいて、現代の生理學は引力を具へてゐる實體以外には如何なる他の思惟實體も存しないこと、そして意識は、運動と等しく、物質の一機能であることを斷定するところの教義にこの名稱を適用しうる限りにおいて、一直線に唯物論へ導くものであると言つた。ハックスレーは唯一つの點において、恰も唯物論が嘗て何等か他のことを意味したかの如く想像した正にそのことにおいて誤つたのである。凡ての唯物論者たちは物質をハック

スレーの言葉によれば、正に現代の生理學がそれをさう觀察するやうに我々に教へてゐる通りに、觀察してゐたのである。この基本的な見解からしてフランス唯物論者たちは、彼等に固有な徹底と果敢とをもつて、その時代にとつての凡ゆる結論をなし得たのであり、それに反してイギリス唯物論者たちは最後まで行くことを怖れてゐた。しかしその何れものが唯物論のこの根本的基礎を分け持つてゐたのでありまた主張してゐたのである。

最後に我々によつて語られたことを要約して置かう。

(一) 博士コンラッド・シュミット氏は彼がマルクス及びエンゲルスに反對して擁護しようとしたカントを殆ど理解しなかつた。

(二) 彼がカントの名において批判すべく努めたマルクス及びエンゲルスを同様に殆ど理解しなかつた。

(三) 唯物論に關する全く誤れる觀念を曝露した。わが學識ある博士のこれらの三つの過誤は、讀者の側に次の如き問題が発生しうる爲めに全く充分である、すなはち如何なる惡魔が彼を唆かして、勿論、彼にとつては「不可知」ではありえなかつたところの、しかし明かに彼にとつて不可知なるものとして残されたやうな問題について論議させたのであるか? これは極めて興味ある問題である。これに答へる爲めには、タルドが摸倣の法則と名づけたところのものを思ひ出すことが必要である。

我々の時代においてはブルジョアジーの理論的代表者たちは固くカントの哲學に依據し、それに通ずる骨折をさへせずして、唯物論を批難しつゝある。

シュミット氏は彼等の例に従つて、マルクス及びエンゲルスの唯物論を批難したのである。

ブルジョアジーの唯物論からの背反とそのカント哲學への執着とは非常によく現代の社會状態によつて説明される。ブルジョアジーはカントの教義の中に勞働者階級の激烈な突進との闘争の爲めの強力なる『精神的武器』を見出してゐる。それ故にこそカント主義は教養あるブルジョアの間の流行の教義となつたのである。

周知のごとく、下層の階級は屢々上層を摸倣する。しかし何時彼等はそれを爲すか？ 彼等がまだ自己意識を獲得せざるの時である。下層の階級の上層への摸倣は、下層の階級がまだ自己の解放のための闘争に成熟してゐないことの確かなる徴候である、従つてこの意味における彼の成熟に助力せんと欲する者は、摸倣とも闘はねばならぬのである。虐げられた者達の自己意識の發達は最大の「進歩の動因」である。

我々はシュミット博士と尙ほ辯證法について語ることを欲した、しかし紙數の不足が我々にそれを許さない。すなはち、次回までこれを延ばさねばならぬ。今は我々は彼に向つて言ふ、左様なら、  
Ich salutiere den gelehrten Herrn! (學識ある君よ、左様なら!)

## 唯物論かカント主義か

如何なる哲學を選ぶかは、人間の如何による。

イーゲー・ファイヒャ

讀者は、多分、エツアルド・ベルンシュタインがコンラッド・シュミット博士に、私の矛盾を曝露して私の哲學上の虚偽の結論を覆へすといふ——平易な、『必ずしも愉快ではない問題』を委任したことを記憶してゐる。コンラッド・シュミットはこの問題を『*Neue Zeit*』の第一號(一八九九年)において解決しようと試みた。彼の努力は成功を勝ち獲たかどうか見て見よう。

コンラッド・シュミットの論文は三部に分かれてゐる、可成りに皮肉な序論と、極めて憎惡的な結論と、それから主要部分。私は第一から、即ち皮肉な序論から始めることにする。

私の反對者は吃驚した顔をしてゐる。彼は、何故に私の中の最近發表されたものすら既に一年以上も経つてゐるところの彼の論文を問題にしてゐるか解らないと言つてゐる。しかしこれは非常に解りきつたことなのである。

私は彼の諸論文をそれらが發表されると直ぐ一讀した。それらは私に甚だしく薄弱なるものと考へられた、で私は彼等が如何なる影響をも持ちえないものと思ひ定めた。それゆゑ私は當時これらの諸論文の著者との論争に入るべき少しの意向をも持たなかつた。反駁に値しないやうな愚劣な論文がすくないだらうか！ 所が去年の春エツアルド・ベルンシュタイン氏は *Urbietorbi* (萬人に向つて) コンラッド・シュミットの薄弱な小論文が彼に「直接的な刺戟」を與へたことを宣言した。その時私はこれらの諸論文の與へ得る影響に關する私の以前の意見が誤つてゐたことを悟つた、そして彼等を反駁することが徒勞ではないであらうことを見出したのである。コンラッド・シュミットを批判に附することは同時に、周知のごとく、マルクスの教義の検討に着手したエツアルド・ベルンシュタイン氏の精神力に尺度を與へることを意味する。この考に導かれて、私は「カール・マルクス及びフリードリッヒ・エンゲルスに反對するコンラッド・シュミット」なる論文を書いたのである。それはこの論文が決して私の反對者が主張する如き程度には現代的な興味を喪失してゐないことを意味する。

今や私は尊敬すべき博士の論文の主要部分に向ふことにする。

エンゲルスは、資本主義の最もよき反駁は日常我々の實踐的活動によつて、特に産業によつて我々に與へられてゐると言つた。また——彼が表現した如く、—— *the proof of the pudding is in the eating* (プツディングの吟味は喰つて見ることである)。コンラッド・シュミットは、エンゲルスは常に拙劣に論議してゐるのみでなく、また、——尙ほ遙かに悪いことには、——問題の考察を回避して

ゐるものであると見た。私の論文において私はこの意見に反對して立ち、コンラッド・シュミットがエンゲルスのプディングを消化しえなかつたことを示した。私の意圖はすこしも私の反對者に氣に入られようといふことではなかつた、それゆゑ私の論文がその形式の側からも、またその内容の側からも彼の稱讃に出遭はなかつたことでは怪しむに足らない。形式に關して言へば、私はそれについては本論文の最後で言はうと思ふ、が内容に關しては、私は今それに着手する。

マルクス及びエンゲルスが、人々の實際的活動が毎日カント主義の最もよき反駁を與へてゐることを斷言した時、彼等はそれによつてカントの教義の根底に横はつてゐた不思議な矛盾を揚棄したのである。この矛盾は次の點にある、すなはち、カントによれば、一方において、物自体は我々の表象の原因である、が他方において、それには原因性の範疇が適用されないのである。この矛盾を曝露しつつ、私は就中かう書いた、

「現象とは何であるか？ それは——我々に對する物自体の作用によつて喚び起される我々の意識の状態である。さうカントは言つてゐる。この定義からして、或る何等かの現象を豫斷することは物自体が我々に示すその働きを豫斷することを意味するといふことになる。そこで借問する、我々は或る何等かの現象を豫斷することが出来るか？ 答、勿論、出来る。科學および工藝がそれを我々に保證する。がそれは、我々が、少くとも、物自体の我々に對する或種の働きを豫斷しうることを意味する。が若しも我々が上述の物の或種の働きを豫斷しうるとせば、それは我々が或種の彼等の性質を知

つてゐるといふことである。が若しも我々が或種の彼等の性質を知つてゐるとするならば、我々は彼等を不可知的であると稱する如何なる権利をも有たぬのである。カントのこの「思つき」は彼自身の教義の論理に打碎かれて脱落する。正にこのことをエンゲルスは自己のブディングによつて言はうと欲したのである。彼の證明は、數學上の定理の證明と同様に明瞭であり確實である。』

コンラッド・シュミット博士は何よりも先づ私の論文のこの箇所を反駁すべく企圖してゐる。

『若しもこれが正しいならば、——と彼は彼の論文を貫いてゐる皮肉な調子で言つてゐる、——數學上の證明の確實性が甚だ怪しいものとなるであらう。』さう言つて彼は許すべからざる概念の混同をもつて私を責めてゐる。『如何なる物が我々に働きかけ、そしてそのお蔭で、我々に彼等の或種の性質を知ることを許すのであるか？——と彼は尋ねる。——それは——時間および空間内において數學的に規定されたところの物である、即ちこれらの物の基本的性質は純粹に現象論的性質を有つてゐるのである。』若しもそれがさうであるならば、わが學識ある博士が輕蔑をもつてエンゲルスのブディングと同様、私がこのブディングに基づいてなしたところの結論をも見てゐることは、全く自然である。』従つて、若しもカントの思辨が彼自身の教義の論理によつて粉碎されるのだつたら、それは——我は、少くとも、他の證明が我々に與へられない限り、さう考へざるをえないのであるが、——明かに言葉の遊戲、「物」および「物自體」によつて、この論理の中へそれとは無關係な非論理が持込まれてゐるところからしてさういふことになつたのである。』

何といふ輕蔑をして何といふ殲滅的な結論であるか！ 唯物論者たち（マルクス、エンゲルス及びこれらの行句を書いてゐる粗末な人間）は言葉を弄してゐる。これは明かに、唯物論者たちが、——獨斷論者および「形而上學者」の資格において、——カントの教義を理解するに必要な能力を具へてゐないといふことによつて説明される。「批判的思想家」は決して、永久に、我々、哀れなる「獨斷論者」唯物論者たちが主張しようとすることを口にせぬであらう。

しかしながら……しかしながら……貴下は自分の言つてゐることを本當に信じてゐるのであるか、私の反對者よ？ 我々に興味ある問題を哲學史の照明の下に觀察して見よう。

すでに一七八七年にエフ・ゲー・ヤコービは、—— Idealismus und Realismus（理想主義と現實主義）なる自己の對話への附録において——問題の矛盾の故にカントを批難した。正に下のやうに彼はこの點に關して書いた。

『私は尋ねる、如何にして、第一には、それに従へば物が我々の感情に對して印象を惹き起し、かくして我々の表象を生起するところの前提と、第二には、かゝる前提の一切の基礎を絶滅するところの概念とを結合することが出来るか？ 若しも下のことに留意するならば……すなはち空間および空間内の物は、カントの體系に従へば、我々自身の内部より外のどこにも存在しないといふこと、凡ての變化および我々自身の内的状態の變化さへもが……客觀的な現實的な過程ではなくして我々の表象以外の何物でもないといふこと、これらの變化は外的にも内的にも諸現象の連續性を示すものではない